
臆病な恋

エスキュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

臆病な恋

【Nコード】

N6727U

【作者名】

エスキユ

【あらすじ】

元彼に酷い振られ方をした酒田桃。昔好きだった女を引きずっている大島海。二人は同じ職場の同僚で、且つ飲み仲間。お互いがお互いを好きだけど、何故だかうまくいかない。そんな二人が幸せになるまでの物語。【桃主観の一人称 / 海主観の三人称 交互での物語を展開します。】

1 7月7日

今日が七夕だって気づいたのは、午前0時、10分前だった。

何故そんな時間に気づいたのかと言えば、テレビを見ながらかなり遅い夕飯を食べているとき、ニュース番組のキャスターが屋外の映像を見ながら、

「今日は七夕でしたが、生憎の雨でしたね」と言っていたからだ。

そして、それと同時に思い出したのは、帰り際、二つ上の同僚に言われた一言。

「家帰っても飯ないんなら、食いに行くか？」

お互い残業帰り。

時刻はもうすぐ10時に近い時間だった。

私は呑気に

「いやー、今から食べると太りますからー」なんて断った。

結局我慢できなくて、今ひとりでテレビ見ながら食べていると言っのに、だ！

何故、断った、私！！

と思えども、今更仕方ない。

あの時は、遅くなるのは面倒くさいという本能が真っ先にきてしまったのだ。

こんなところで自分の女子力のなさを思い知る。

「せっかくの七夕デートだったろうになあ……………」

片思いの相手より自分優先なのは、ちよつと考えないといけないな
と思いつつ、なけなしの女子力をあと5分にかける。

急いで机からハサミとペンを取り出して、電話横のメモ紙を一枚と
る。

そして、短冊の形に切り取るとサラサラとマジックで願い事をか
いて、窓にセロテープでくっつけた。

色々、色気も何もないが、これで勘弁、だろう。

「織り姫さま、彦星さま、どうかお願い叶えてください！」
パンパンと柏手を打つと、真つ暗な雨模様の外を眺めた。

先輩は単純に夕食の誘いだったろうし、私もあの時はそのつもりだ
った。

だけど、七夕だと知っていたならば、少しは違っていただろう、と
思わなくもない。

窓に張られた短冊の願い事が今の私の精一杯の女子力だ。

<クリスマスに夕飯誘われたら、忘れずについていくように！>

それは、どう考えてもただのメモだろう。第一、クリスマスなら後

輩じゃなくて誘うのは恋人だろう。

と織り姫が溜め息を吐いたかどうかは知らないが、ちょうど0時になろうとした瞬間、まるで図ったかのようにパラリ、と短冊が窓から剥がれて落ちた。

「ギャー、縁起悪い!!」

「ねーちゃん、うるせー!!」

ドン、と隣の部屋の壁を弟が蹴る。

酒田 桃、24才。

女盛りと言えば聞こえはいいが、残念ながら七夕さえ忘れてしまう残念な女子力の持ち主が私だ。

2 7月7日

「いやー、今から食べると太りますからー!」

屈託なくそう言われてしまえば、その後は何も言えない。

海は自分より少しだけ小さい桃を見下ろして、「じゃあ、また明日」とだけ言った。

「願い事、書かれます?」

馴染みの蕎麦酒屋で、店主にそう言われて指さされたのは、笹と短冊だ。

「今月いっぱい飾って、そのあと、神社で炊き上げしてもらいます」
人の良さそうな笑顔に、海ははにかみながら、

「いや、大丈夫です」

とだけ言って断った。

それに対して店主がニコニコとしながら、

「この前、よくご一緒に来られるお嬢さんは書いていかれましたよ」と付け足す。

馴染みのこの蕎麦酒屋に連れてくるのは、最近では桃ばかりだ。

海と同じく日本酒好きで、蕎麦好きらしく、誘えば犬のように尻尾をふってついてくる。

但し、自分の規律というか、考えと合わないときは、きっぱりすっ

ぱり断つてくれるので、逆に気を遣わず誘える数少ない後輩だ。

ただ、今日はほんの少しだけ下心があったから、断られたのには少し応えたが。

「あいつも書いたんですか？」

「ええ、しかもご自分のことではなかったですよ」

意味深に店主にそう言われ、海はわずかにドキリとする。

店主には同僚の間柄としか伝えていないし、店主もそれ以上は詮索してこない。

だが、海が桃を憎からず思っていることは、薄々分かっているだろうとは思う。

そして、それを分かっているながら、そんな話題をふってくるのだから、店主も人が悪い。

海は先程まで全く気にしていなかった笹に飾られた短冊の願い事が気になってくる。

人の願い事を勝手に見るのは悪趣味だ。

それは分かっている。

分かっている。

「.....」

探すつもりはなく、うっかり見つけてしまった。

いや、あれはどう考えてもわざとだろう。

「店主」

「はい」

「俺も書きますんで、短冊ください」

「はいはい」

店主がニコニコとしながら、短冊を渡してくれた。

「おとーさん、こんばんは！」

「はい、いらっしやい」

蕎麦酒屋の店主はいつもの二人が顔を出したので、ニコリと微笑む。

「大島さん、今日は何からにします？」

「言つとくが、今日は驕りじゃないからな」

「ええっ?! 意味分からないですよ！」

「意味分からないのは俺の方だ。何でせっかくの定時退勤日にお前と飯食わなならん！」

ポンポンと会話をしながら、二人は特等席のようにカウンターに座る。

今日は短冊のついた笹の真横だ。

桃は、「願い事いっぱい書いてますねー！」なんて言いながら、笹を眺める。

そして、

叫んだ。

「な、な、なんじゃ、こりゃあああああ!!！」

その目線の先には一枚の短冊。

そこにはこう書かれていた。

<酒田桃の乳がでかくなりますように>

「私、こんなこと書いてないし!! 誰? 誰がやった!?!」
喚く桃の横で、海がクククと笑ったので、桃は犯人が分かったらしい。

「大島さん有り得ない!! セクハラ! どん引き!」

「俺こそ、どん引き、だ!」

そう言い放ち、海はそのセクハラ短冊の横の短冊を指差した。
そこにはこう書いてある。

<大島さんの背が160センチを越えますように!!>

桃がハツとした顔をした後に、片言の日本語で、

「ソナナコト、カイテマセーン」
と言いつつ。

「この店にくる輩で、あんな不躰な願い事書くのはお前ぐらいだろうがっ！！ 第一、俺は160センチジャストだ！」
力説する海に、桃が肩を竦めた。

「またまたあ、サバ読んじゃダメですよ。大島さん。

この前、サチと並んだとき、サチより低かったじゃないですかあ
！」
「ぐっ。」

「……お前こそ、この前飲み会で、Cカップですなんて酔っ払って暴露してたが、あれ、誰も信じてなかったぞ。2カップは、サバ読みすぎだろう」

「っな！！ 誰も信じてくれなかったんですか？！ というか、Bカップはありますから！ サバ読み1カップだけですから！！」

海がチラリと視線を桃の胸元に移すと、目をそらし、無言で首を横にふった。

「何ですか、その視線！ マジでムカつく！！ 今日は大島さんの驕りー。はい、決定ー！！」

「元からたかる気だったくせによく言うよ」

そんな二人の会話のタイミングを見計らって、店主が注文をききに前に立つ。

「何にします？」

と店主が問うと、二人揃って、

「「冷やで！」」

と言った。

なんだかんだ言っても、息はピッタリな二人を見て、店主はニコニコしながら返す。

「はい、わかりました。

お二人とも、願い事、叶うといいですねえ」

「!!!!!!」

二人ともサアツと顔を赤くしたが、それは別にこの願い事の為じゃないのは、店主しか知らない。

「もう一枚、書いていいですか？」

と言ったのは桃。

「もう一枚、書きますか？」と店主の促した短冊を受け取ったのは海。

目立つように飾られたセクハラ短冊とは逆の、見えづらい場所に、名前もなく願い事だけ書かれた短冊が二つ。

互いが互いの短冊と思いもしないだろう短冊の願い事は奇しくも同じ内容だった。

<これからも、ここに一緒に飲みにこれますように>

3 7月10日

「7月10日は何の日だって知ってます？ 大島さん」

仕上がった図面を渡しながたそう問うと、大島さんはチラリと卓上カレンダーを見た。

今日は7月11日。昨日は10日。日曜日だ。それだけ確認すると、大島さんは図面に目を戻して、

「納豆の日だろ？」
と言った。

私の中では想定内。

分かりきっていた回答だから、

「その通りですよお」
と口を尖らせる。

まあ、去年言ったことを今年も覚えていてくれるなんて、そんな図々しいことは思ってもいませんでしたが。

ちよつとは期待してしまった自分が恥ずかしい。

「昨日、納豆食ったのか？」

ふ、と大島さんが顔を上げると、からかつような色合いを目にのせながら私に問い掛けた。

「納豆は毎朝、食べてます！」

「朝から？ お前よく朝からそんなの食えるな」

「そうですか？ なんか毎日出されるからあんまり気にしてないんですよね」

大島さんは机の引き出しを徐にあげると、「ほら」と私に差し出してくる。

迷わず手を出して受け止めてしまふあたり、私の賤しさが出てしまった気がしないでもないが、貰えるものは貰います。

ぼす。

掌に置かれたのはミントガム。しかも一つとかではなくて、ボトルガム。

「でかつ」

「やる」

大島さんはもう図面に目を戻して、チェックを再開し始める。そして、「よし、OK。次はこっこのトレースな」と、ペラリと一枚の図面を寄越してくる。

但し、1枚であっても、精密機械の構造がびつしり細かく書かれた図面は、ちよつとやそつとでは終わらなそうだ。

まあ、トレース、嫌いじゃないから全然構わないのだが、問題はこの手に乗ったガムボトルだ。

しかも未開封。味は私も好きなシトラスミント味。ガムは甘くない方が長く噛めるよね、と思いつつも、こんなの渡されたら、いくら物怖じしない私だって、邪推してしまう。

「私の口臭、納豆臭いですか？」

心配になってそう問うと、大島さんはキョトンとしてから、苦笑した。

椅子に座っていると、そんなに背の小さいことも分からない大島さんのそんな表情は、意外に年相応に見える。

「違う。そういう意味じゃない」

「じゃあ、どういう意味ですか？」

大島さんはニヤリと笑うと、片肘を机について、顎を乗せて、私を見上げる。

そして、チラリとカレンダーを見る。

「昨日、7月10日なんだろ？」

「……！」

「年の数より多めに入ってるやつ買ったんだから、感謝しろよ」

分かってて、ワザとか！

ぐうつ、と思わず唸れば、大島さんはニヤリと笑って

「ほら、仕事しろ！」

と私を追い立てた。私は兎に角お礼だけはきちんと行って、新しい
図面と、ガムボトルを手に入れて、席に戻る。

別に貰えるとも思ってたし、覚えていて何か貰えるとも思
わなかった。

去年と同じように、

「私の誕生日なんですよー！」

って、笑いながら白状して、あわよくばおやつでも貰えたら、って
思ってたから、ちょっとこれには参った。

「くそ。何か負けたー」

ヨロヨロしながら席に戻ると、隣の席で同僚の花川祥子が、私の
顔を見てぼやく。

「負けた言いながら帰ってきたわりには、あんた、満面の笑みじゃ
ん」

一っ年上だけど、殆ど同時期にこの部署に入ってきたせいとか、私と
このサチは、名前呼び捨て、敬語抜きはかなり気の置けない仲だ。

「で、戦利品はあったの？」

サチに促され、私は貰ったガムボトルを自分の机に置く。

「へえ。知らなかった割には結構いいものくれたね」

「いや、知ってて、これみたい」

サチが「そうなの？」と面白そうに聞いてくる。

「じゃあ、桃の為にワザワザ買つといたんだ」

あう。

やめてー。そんなことをいちいち言わないでくれ。

きつと、机に入っていたただけのはず。

変な期待をさせないで。

頬が自分でも赤くなるのが分かったが、それをごまかすようにパソコンのモニタスイッチをオンにした。

ガムボトルはそのまま、見える配置にセッティングすると、

「ここに乙女がいます」

とサチが小声で言ってくる。

「うるさい。黙れ」

「ほんと、あんたたち、何で付き合わないのかしら？」

更に小声でそう溜め息を吐かれたが、それには応えない。

答えられないから。

一瞬、今年の年始を思い出して胸がチクリと痛んだが、ガムボトルを見てそれを流し込む。

「どーね。頑張りますか！」

「はいはい、がんばってー」

気の抜けたサチの声を聞き流しながら、私は午後の作業に集中し始めた。

3
7月10日
(後書き)

4 7月11日

酒田桃と蕎麦酒屋で鉢合わせしたのは、去年の暮れも暮れ。 12月31日の昼過ぎのことだった。

たまに独りで飲みに行く海にとって、そこは会社を忘れて飲める息抜きの場所で、そんなところに会社の、しかも同じ職場で仕事も重なる奴と会うなんて、想定外だった。

しかも、酒田桃も自分と同じ独りでカウンターに座って飲んでい

る。こんな日に限ってカウンターの席は連れ合い同士で埋まっており、残された席は桃の隣だ。

海は一瞬戸惑ったが、桃が横の席を引いて座るように促してきたので、観念してそこに座る。

「何してんだ、お前？」

「年越し蕎麦食べに来たんですよ。うち、ここの蕎麦屋からタクシ

ーでワンメータなんで」
そう言えば、会社から桃の実家が近いようなことを聞いたことを思い出した。海は会社から二駅離れたここが距離的に気に入ってアパートを借りているが、実家暮らしでこんなに近いなんて、なんとも羨ましい話だと思った。

「よく来るのか？」

「そうですね。割と頻繁に。」

あ、おとーさん、お猪口、もう一つ」

店主とも気安い仲らしく、愛想良くお猪口を受け取ると、それを海に渡した。

「日本酒、いけますよね？」

飲み会での飲み方を知っているせいか、自分で飲んでいた徳利から海にもついでくる。

・・・というか、若い女が大晦日の昼間から、独りで日本酒かよ。

お酌してもらった手前、言わなかったが、色々突っ込みどころが多すぎる。

「せっかくの大晦日ですからね」

上機嫌な桃はくいつと自分の酒を飲み干すと、手酌しそうになったので、慌てて海がそれを制した。

「俺がする」

と言えは、

「あれ？ いいんですか。すみませんね」

と桃が返す。

とくとくとくと、と淡い音をたてて注がれる酒を、桃は目を細めながら見ていた。

会社の女の子と、こうして二人で飲むときは、大抵付き合った時だったり、狙ってデートした時ぐらいだったので、偶然鉢合わせしてというシチュエーションは、なんだかこそばゆい。

しかも相手はよく知る人物だ。

どうにも具合の悪さを流し込もうと、お酌してもらった酒を、くいと煽った。

・・・お。

煽った瞬間、口内、舌、喉元を通り過ぎる酒の、スッキリとした飲み口に思わず、口を開く。

「旨い酒だな」

桃の目の前に置いてある一升瓶がそうなのだろう。

「山形の方のお酒らしいですよ。スッキリしてて、飲み口いいです

よね」

自分と同じ感想なことに、思わず口元を弛めると、それを見計らったかのように、桃が「もう一杯どうぞ」と注いできた。

その日は結構楽しく酒を飲んで、夕方にはお互い結構酔った状態で別れていた。以来、何の気なしに誘い合う飲み仲間になってしまったのは、今思い返してもどうしてなのかわからない。

「何、真剣に選んでんのさ」

コンビニのガム売り場で立ち尽くしていた海の肩に、無遠慮に置かれたのは無精ひげを生やした侍の生首、もとい同期の白土健輔の頭だった。

男の癖に、肩まで伸びた髪は伸ばしたわけではない。仕事が忙しくて、のびきったものだ。その髪を男ながらに、一つに束ねているので、世が世なら落ち武者にしか見えない。

彼をかるうじで現代人に行っているのは、そのワイシャツとチノパンだけだろう。

海は大きいため息をつくとき、肩をずらして白土の顎をよけた。

「朝っぱらからお前の顔か」

「珍しいね。食堂派のお前が朝からコンビニなんて興味津々で白土が聞いてきたが、海はその言葉を軽くシカトする。いちいち付き合っていたら、埒があかない輩だからだ。

白土もシカトには慣れているらしく勝手に話しかけてくる。

「ガムボトル？ そんなの休みの日にホームセンタで買った方が安

くね？」

そんなことは海だって分かっている。

ただ、シトラスミント味のこのガムボトルは、海の行動範囲ではコンビニでしか手に入らない。

だから会社に行く前に買おうとしていたのに、寄りによって白土に会うとは、と思わず嘆息した。

そのまま、ガムボトルだけ持ってレジに並んで会計を待つと、待たなくてもいいのに、外で一服しながら白土が待っていた。

「ガムだけ買ったんだ」

「ああ」

そのまま、二人で会社に向かって歩き出す。

「で？」

「.....」

「誰かにあげんの？ それ？」

「はあ？」

思わず問い返せば、白土はニヤリと笑って、

「簡単なことさ、ワトソンくん」

と言ってくる。

「お前、ガムはいつもボトルじゃなくて、1000円の買っじゃん。

しかも売店で。なのに、わざわざ、朝、コンビニで、ガムボトル！

どう考えても自分のじゃないよな？！」

ウザイ上にしつこい。そして鋭い。

同期でなければ、友人にもしたくない輩だと思いつつも、観念して海は言う。

「酒田が、昨日が誕生日だって喚いてたから、買ってやったんだ」

ガムボトル位なら、同僚の域は越えてないだろう。下手に隠し立てして邪推されても適わないからそう言えば、白土はニンヤアと品のない笑みを浮かべた。

「ふうん。そう。誕生日ねえ」

「アイツが自分で言ってたんだ」

尤もそれは去年のことで、「納豆の日が私の誕生日なんですよー！」と

喚いていたから、覚えていたに過ぎない。

今年もそう喚いてくれたらいいのに、金曜日は何も言わずに帰ってしまった。休み前に言ってくれた方が余程用意した理由にもなるというのに。

人にたかる癖に変なところで遠慮しいなのは、桃の良いところであつたし、悪いところでもある。

「もう誕生日過ぎたのに、わざわざ、コンビニで、朝に、買っていつてあげるんだ？」

痛いところをピンポイントでついてくるんだから、いやらしいところの上ない。

「悪いか。いつも世話になってるしな」と開き直ったら、「御馳走様です」と合掌されたので、遠慮なくその後頭部を叩いた。

「付き合うようになったら、教えてね」

白土が叩かれた頭をさすりながら、そう言った。海は苦笑しながら、首を軽く横に振る。

「それはないな」

「何で？ 好きじゃないの？」

「そういう関係じゃない」

好きじゃないわけではない。

飲み仲間としても、とても飲みやすい気の置けない相手だし、早いうちから、好感が好意に変わったことも自覚している。

だけど、そこから先を考えることが出来ない。

一緒に飲むのが楽しいから、その関係が崩れるのが怖いのかも知れない。

それに桃だつて、自分を異性として見ているか怪しい。

昔からこの身長の子で、異性からは「友達」扱いされることが多かった。それで勘違いして、玉砕した恥ずかしくも苦い思い出も、実は、ある。

だから、この関係をワザワザ自分から壊したくはないのだ。

「もっと分かりやすいもの、買って送ればいいのに」

白土がそう言ったが、それこそ余計なお世話だ。

……分かれちゃ、困るんだよ

分かるか分からないか、ギリギリの線でいい。

「相変わらず、大島はマゾだなあ」

なんて白土のぼやきを聞きながら、海たちは会社に入った。

「へへへ。ありがとうございます」

ペコリと頭を下げ、自分の席に戻る桃の背中を、チラリと海は横目で見た。

いつもと変わらない背中。

だが、そこはかたなく嬉しそうなのが、海にも嬉しい。

本当は誕生日だった昨日に渡したかった。だけど、それは二人の関係からは出来ないことで、仕方ないと諦めるしかない。

それでも今日、図らずも自分からねだってきたから、誕生日プレゼントとして渡せた。

本人としては、飴玉1個とか、そんなものだけでよいと思っていただろうから、ガムボトルは破格の待遇だろう。

もし桃から何もリアクションがなかったら、午後の仕事のご褒美という大義名分で渡すつもりだった。

しかし、それでは誕生日プレゼントとはならない。

だから、誕生日プレゼントとして渡せたことが、何よりも嬉しかった。

・・・やべ。ニヤけそう。

海は顎を乗せていた手を少しずらして、口元を隠そうとしたが、沸き立つ心はなかなか元には戻らない。

観念したように席を立ち、横目で仕事に集中している桃の席を通りながら確認しつつ、部屋の外にでた。

桃の机に、自分の渡したガムボトルがあることを、しっかり確認して。

誕生日、おめでとう。

誰にも見られないように向かったトイレに白土がついてきて、しつこく海をいじったのは、また別の話だ。

5 7月21日

夕方、随分蒸した空気になったな、と思つたら、定時の5時をすぎた頃には雨が降ってきた。

しかも、大雨洪水警報発令。いわゆるゲリラ豪雨に近い大雨は、会社の中で瞬停が起きるほどで、こんな日に限って運悪く残業した私は、雨上がりの駅のホームで、「あちゃー」と小さく呻いた。

駅の改札口に掲げられるホワイトボード。そこには、しっかりと電車の到着遅延のお知らせ。

どうやら南の方がかなり酷かつたらしく、停電が1時間ほど続いたらしい。その影響で電車の方も2時間近くずれこんでいるらしく、しかも8時近いというのに、ホームは人でごった返している。

どうせ次の電車を待っても鮪詰めなら、潔く、遅めの電車に変更すればいい。

私は今入った駅を背に、今度は駅前通りに向かって歩いていく。駅前通りと言っても、ここは商店が栄えた街ではないので、ポツポツと八百屋や魚屋がある以外は、会社帰りの人間を狙った居酒屋が、何軒か立ち並んでいるだけだ。

会社員になつてから、夕飯が不規則になつたせい、私の分の夕飯の用意はない。だから、こんな時は気兼ねなく飲みに行ける。

まあ、その代わり飲まない日は、自分で夕飯の支度をしなければならぬのは面倒くさいけど、一人暮らしの自炊に比べれば、とても楽だろう。煮物とかカレーの時は、鍋に残っていれば、それを食べられるし。

ブラブラと何軒か居酒屋をすぎた後、右に入る小さな小道に猫のように滑り込む。車は当然入れないその小道の先に、ちょこんとあるのは小さな居酒屋だ。

女独りで飲んでも悪目立ちしない。客層も年配者が多く、騒いで

飲むような居酒屋ではないところが気に入って、電車の待ち時間に立ち寄る私の隠しスポットだ。

しかも、店内が狭いせいか、職場の飲み会では使用できないところがいい。

「こんばんはー」

カラカラ、と低い音を立てて戸を開けると、一つしかないテーブル席の客と露骨に目があつた。

「あ」

と小さく声を上げてしまつたが、ペコリと会釈で済ませたことは、自分を誉めてあげたい。

「なあに、大島くん、知り合い？」

テーブル席で大島さんと差して飲んでた女性が振り返つた。

私を見て、にこりと軽く笑う。サバサバした感じの綺麗な女の人だつた。

（これは、デート、かな？）

大島さんに彼女がいるという話は聞いたことがなかつた。

だから今、こうして二人で飲む女の子が、私以外にいたと言うことに、少しばかり動揺する。

「なんだ、お前も電車待ちか？」

大島さんがビールを飲みながらそう聞いてきたので、

「まあ、はい。そうです」

と返してカウンターを確認する。人が一杯ならこのまま帰るのに、生憎一人しかカウンターにはいないから、座れてしまうところが辛い。

「こつち来て一緒に飲むか？」

あ、千夏。こいつ同じ部署の後輩」

シヨートカットの千夏という女性は、「こんばんは」と笑つた。

「あ、どうも。酒田と申します」

私も取りあえず会釈する。

(しかし、一緒に飲むタイプの女じゃないよなあ)
酒飲みのせいかな、酒好きするタイプや、人好きするタイプは、分かるようになってきた。

目の前の女性は、どう見ても、身内で飲むのが好きなタイプで、人と飲むのは嫌いそうに見えた。

第一、一緒に飲むと大島さんが言った時点で、飲むならこの人も声を掛けてくるだろう。

私は大島さんに対してニコリと笑うと、

「デートの邪魔は出来ませんよ」
と言った。

大島さんが、ギョツと目を丸くしたが、それがどうしてかは知る由もない。恐らく言い触らされるんじゃないかとも思ったのだろう。何だか虚しくなりつつも、取り敢えずそのままカウンターに座る。

「おい」

大島さんが何か言い掛けたのを軽く会釈でごまかして、

「生大一つ」
と言った。

大島さんもそれ以上は何も言わなかったので、少しだけ切なくなりかけたが、それは料理を頼むことで押し流した。

「あと、ほっけと枝豆と冷や奴。それと、このカボチャのください」
!

「はいよー」

脱サラしてこの店を始めたという店主は、ツルツルぴかぴかの頭を光らせながら、私の注文を笑顔で受けてくれた。

背後では、女性が大島さんに何か話し掛け始めている。

私は人の話に聞き耳たてるのは好きじゃないから、直ぐテレビの方に集中した。幸いこの豪雨のせいかな、テレビはナイター中継ではなく、特別番組が流れていた。お世辞にも面白いとは言えなかった

けど、それでも後ろの二人の話を聞くよりはまだいい。

「はい、生大」

でん、と置かれた大ジョッキ生を私はゴクゴクと飲んだ。いつもみたいに飲んでる！って気分になれなかったのは仕方ない。

（そっか、まあ、私以外とも飲むよな）

別に私と大島さんが付き合っているわけじゃないし、誰と飲んだって構わない。

そこに、私がどうこう言える権利はない。

（動揺するな、私！）

そう思えども、冷や奴も、枝豆も、ほっけもカボチャも、いつもなら美味しく感じられるのに、今日ばかりは流し込むように食べるしか出来なかった。

「あ、じゃあ、お先失礼します」

店に入ってきたっかり一時間。私は勘定を済ませると大島さんたちに頭を下げる。

「もう行くのか？」

大島さんが驚いた顔をした。いつも二人で飲むときは二時間は飲むから意外だったようだ。

「ただ、流石にここで二時間も独りで飲めるほど強くない。

「電車待ちですからね」

と返して、千夏さんとやらにもペコリとお辞儀して店を出た。

「いい店だったんだけどなあ」

「当分行く気にはなれないかも。」

あの千夏さんとやらは一体、大島さんとどういう関係なんだろう、

と思り返す。

仲は良さげだった。

サバサバした感じは、大島さんも嫌いではなさそう。と言うより、好きな方なんじゃないかと思う。

「好き、なのかなあ？」

もしそうなら自分はどうしよう。

そう考えた瞬間、直ぐに答えは出た。

(応援してあげないと)

好きなら、精一杯応援してあげよう。大島さんが幸せなら、それが一番いい。

ホームにつくと、ごった返すような人が少しだけ減っていた。それでも九時という時間でこの人の多さは凄い。あと一時間待っていた方が良かった気もしないでもないが、こればかりは仕方ない。

幸い、あと少しすれば電車もくるようなのでそのままホームに入る。

人混みを避けるように、一番ホームの端に移動して携帯を開く。

時間潰しに、ゲームでもしようかと思ったら、ポンと肩を叩かれた。

「？」

顔を上げると、息を切らした大島さんがいた。

「あれ？ どうしたんですか、大島さん」

「いや、電車来るっていうから急いで出てきた」

「お連れの方は？」

「あいつ、上り電車だから」

そう言いながら、大島さんは手で自分の胸元を扇いでいる。

「置いてきちやっただんですか？」

「いや、あっち側にいるんじゃない？」

(いるんじゃない？ってアナタ．．．)

嬉しいと思うよりも、相手のことを考えると何とも言えない。

友達にせよ、それ以上にせよ、置いてくるように急いで来たのは間違いがない。

「そんなに急いで電車乗らなくても」

「お前が帰るから、もう電車来るのかと思ったんだよ」

そう言つて、大島さんはジトリと私を見た。横に並ぶとほんの少ししか、目線が変わらない。

私が151センチだから、その身長差は僅か10センチにも満たない。それでも肩幅とかガツシリしてて、手だつてゴツゴツとしてる男の人の手だ。

私は何だか恥ずかしくなつて、視線を反らしながらぼやく。

「わ、私のせいにしてないでくださいよ。せつかく二人で飲んでらっしゃったから、こっちは気をきかせたつてのに」

「変な気をきかせるな」

コツンと頭を小突かれた。

横を見れば、不機嫌そうな大島さんの顔。

「あいつ、既婚者だから。変に気を回されても困る」

「わ、既婚者ですか」

それでは、確かに余計なお世話だ。

「あー、すみません。だから私も誘つてくれたんですね」

既婚者と二人で飲むなんてこと、面倒事が嫌いな大島さんにとつてはあまりしたくなかったことだろう。

「同期なんだよ。経理部なんだけど、駅にいったらたまたまいて。電車待ちの時間潰しに、酒飲み誘われたんだよ」

説明されて、ストンと安心してしまうのは現金すぎたろうか。

それでも、大島さんから誘ったわけではないとか、この雨のせいだと言われたら、それだけで凄く安心してしまう。

「あちー」

大島さんが隣でワイシャツの首元をあげながら、ぼやく。

あら、喉仏。

なんて一瞬、見惚れてしまう自分が情けない。

さつきまで、凹んでたのに、我ながら本当に現金すぎる。

「結構飲んだんですか？」

「まあ、程々」

大島さんは何だか疲れた様子で、ため息を吐いた。

私はそんな大島さんを見ながら、少しだけニコリとする。

「もうすぐ電車来ますよ」

「そうか」

「九時半までには帰れますから、一時間位、飲んでできますか？」

いつものところで。

そこまで言わずとも大島さんは分かってくれたらしい。

時計を確認すると、「暑いし、飲み直してもいいな」と言った。

「生中くらいなら驕りますよ？」

「ああ、そりゃいいな」

「その代わり、私に生大奢ってください！」

「はあっ?」

呆れたような大島さんの声に被るように、電車到着のアナウンスが聞こえてくる。

「お前なあ!」

「えへへ。ご馳走さまです」

タイミングよく電車が滑り込んできて、私はにやけそうになる顔を、髪をかきあげ、空を見ることが誤魔化した。

ああ。

さっきまであんなに憂鬱だったのに・・・。

まるで夕方の通り雨みたいだと思った。

ホームから見上げた空は、夕方の雨が嘘みたいに、満点の星空だった。

6 7月21日

「あ！ 大島も今帰り？」

電車遅延でこつた返す駅で、海にそう話しかけてきたのは、東松千夏という、同期入社の人だった。

同期入社の中では、結構気さくに話す方で、一昨年までは一緒に飲みに行ったりもした。

一昨年までは。

「すごい人だよな」

と言って口元に左手をあてた彼女の薬指には結婚指輪。

海を気の置けない飲み友達だと称した女は、飲み友達よりもいい男を見つけて早々に結婚した。

友達だと思っていたのは彼女で、それ以上だと勘違いしていたのは海。

今、思い返しても何とも苦い思い出だが、何も伝えなかったからこそ、こうして、今も気軽に話しかけられる関係のままだったことは有り難い。

「電車、まだ来ないだろうから、少し飲んでかない？」

「旦那は？」

「今、出張中」

それでも他の男と二人で飲みに行こうなんて言えるのだから、罪作りなことこの上ない。

「最近飲んでないから、久しぶりに飲みたいんだよね。いいでしょう？」

どう言えば海が断らないか分かっている彼女に対し、海は僅かにため息を逃してから、それを了承した。

但し、それを今、好きな女に見られるなんてのは、当然ながら考えなくてもいかなかった。

「えへへ。ご馳走さまです」

はにかんだ笑顔を海に見せつけた桃と電車に乗り込んだのは、九時過ぎのことだ。

自宅からの最寄り駅が同じ海と桃だが、帰宅時間が重なることはまずない。

大体、10時前後が帰宅時間になる海と違って、設計補助の仕事の桃は、遅いときでも九時頃には帰宅するからだ。

(何か、緊張する)

図らずもこうして一緒に帰れるとは思わなかった。

先程、居酒屋で鉢合わせした時は、内心冷や冷やした。しかも、デートだなんて誤解されたままなんて、冗談じゃないと思った。

まだ飲み足らなそうな千夏を急かして切り上げた。

「もう1本、遅くてもいいじゃん」

なんて言われたが、生憎慈善事業じゃあるまいし、既婚女性と長々飲む気にもなれなかったから、桃が帰ってすぐに切り上げた。

「凄いな」

乗り込んだ電車は朝以上の混みようで、乗り込んだ瞬間、車両の真ん中まで押し込まれる。

なんとか吊革をつかむと、桃は捕まるところもなく、両足を開いて踏ん張っている。

女が男の前でその足はどうだろう、と思ったが、ここでは仕方ない。

「おい、酒田」

「はい？」

横並びだった酒田がこちらを向いた瞬間、電車が発車した。

「うわっ！」

誰かがよろめいたらしく桃が押されてこちらによるめいてくる。
ぼすん。

軽くはないが、重くもない勢いで桃が胸に飛び込んできた。海は片手で桃を支えて、もう片方の手で吊革をギュツと更に強く掴んだ。

「す、すいません！！」

「い、いや。気にするな」

そうは言ったが桃の頭がちょうど海の鼻頭に近づいて、もう少し押されたら、桃の柔らかさそうな頬にキスできそうな距離に桃がいる。いつもはこの身長で損することもあったが、まさかの役得に不覚にもドギマギした。

「す、すいません」

桃は顔をあげられないらしく、俯いたまま体を固くしている。

海も海で、桃の身体を受け止めた状態は、精神衛生上、非常に好ましくないことに気がつき、必死に別のことを考えようとする。

考えようとするのだが、それを邪魔したのも、やはり桃だった。

「大島さん、意外に体格いいんですね」

「はあ?!」

「小さいから、もっとひよろっこいのかと・・・」

「お前、俺の手が動かないのを分かかって言ってるだろ?」

いつもなら間違いない桃の頭を叩いているが、今は彼女を支えるのと、吊革で精一杯だ。

桃は顔を背けたまま

「いや、誉めてるんですよ」と言っ。

どんな顔でそんなことを言っただか。きつと、相変わらずのしたり顔だろうと思って、ぐいっと桃を更に抱き寄せた。

ほぼ、密着状態だ。

「ちよっ！」

桃が胸を押ししてくるがお構いなく抱き寄せる。これくらいの役得、構わないだろうと思いながら、顔をずらして桃の耳元に囁く。

「お前は思った以上に小さいな」

女だとは思っていたし、だからこそ恋愛感情も抱いた。

だけど、こんなにも抱き寄せたら小さいとは思ってもみなかった。そして、柔らかい。

(これ以上はヤバいな)

「大島さん?!」

戸惑う桃の耳に更に囁く。

「・・・胸が」

「はっ?」

顔をこちらに向けた桃と、目がすぐに合う。キスできそうな至近距離だが、今、彼女の頭の中では先ほどの言葉と今の言葉が連結されたはずだ。

「!!!!!!!!!!!!!!」

顔を赤くして、ぐぬぬぬぬ、と桃が呻いた。

「せ、セクハラめ!!」

「男に身長のこと言うお前もセクハラだ、馬鹿」

それでも先程のことは、言い過ぎだとは分かっている。普段なら

まず言わない。

だけど、それ位言わなきゃ、どうにかなることも分かっていた。

(思った以上に、俺、コイツのこと、好きなんだなあ)

少なくとも、このまま、抱き締めていたら、せつかくの友好的な関係を崩すのは目に見えていた。

「信じらんないっ。低俗！」

腕の中の桃は、腕の中だということも忘れて怒っている。

それでいい。それが桃らしい。

一駅挟んで、10分少々時間の後、電車から降りた時は、元の桃に戻っていた。

さっきまで、人の腕の中にいた彼女は、そんなことも忘れたみたいに、怒っている。

「そんなに怒るなよ。今日は俺の奢りでいいから」

「そうですか？　じゃあ、今日は遠慮なく奢られますから！」

奢りで機嫌が直るのも、また、桃らしくて、海はそんな桃を見ながら微笑む。

(これ位がちょうどいい)

千夏の時みたいにな、どんどん近くなって、離れがたくなって、欲情して、盛り上がった時に、

「私、結婚するんだ」

なんて言われるくらいなら、ハマリそうでハマらないくらいで、い

い。

「よおし、沢山、飲むぞー！」

腕をまくる桃の背中中は、やはり小さくて、抱き締めても、小さかった。だけど、彼女がその小さな身体に似合わず元気で、大らかな心の持ち主だつてことは、桃と仕事をして十二分に分かっている。

身長同様、気持ちまで小さい自分には、勿体無い女性だ。

「程々にしろよ」

「それは無理なお話かな！」

先程まで抱き合っていたのなんて嘘みたいに、さっぱりと話しながら、海は桃とホームを歩いていく。

似たような身長の二人が、似たような歩幅で歩く。

二人の間の距離は、30センチ程空いている。

その距離が意味するものを、海は深く噛みしめながら、
「程々に、な」

ともう一度、意味深に呟いた。

7 7月28日

「今日は菜っ葉の日らしいんで、菜っ葉が食べたいですね、大島さん！」

お昼前、午後作業分のトレース図面を桃に渡そうとしたら、いきなりそう言われた。

「は？」

海が不機嫌そうに顔をあげると、桃はニコニコしながら、

「今日は菜っ葉の日なんですよ」

ともう一度繰り返し返した。

(馬鹿馬鹿しい)

今は気がたっているんで、桃とそんな無駄話をする気にもなれない。

だから適当に流すと、桃は空気を読まずに言葉が続ける。

「何で菜っ葉かなあって思ったんですけど、7月28日で、728でしょ？ それで7(な)2(つ)8(ぱ)なんですよ！ 私、感動しました！！」

相変わらずコイツの感動閾値は低すぎる。そう思いながらも、ここまで無神経に無邪気にこられると、八つ当たりするのも馬鹿馬鹿しくて、

「そうか。分かった」

と相槌で返した。

桃はニコツと笑うと、

「今日のお昼は食堂で菜っ葉あるといいですねー！」
なんて言い残して満足したように戻っていった。

海はそんな後ろ姿をチラリと横目に見ると、軽く溜め息を逃して、先程、主任に怒鳴られた案件の見直しを始めた。

昼休み、食堂派の海はいつも白土と食べに行く。友達にはしたくないが、仕事仲間としては嫌いではないので、食事は専ら白土と食べに行くのが定番だった。

いつも通り、天ぷらそばを選んで、いつもは選ばないのにほうれん草のゴマ和えの小鉢を追加すると、白土が目ざとく尋ねてくる。「珍しいな、小鉢つけるなんて」

「今日は菜っ葉の日だって、酒田が言ってたからなんとなく、だ」
言った瞬間、ぶふつと不気味に白土が吹き出した。

「何だよ」

「お前のそう言う素直なところ、俺スゲエ好き！」

眉間に皺を寄せ、露骨に白土から離れると、白土はポンポンと海の肩を叩きながら言う。

「ほんと、酒田ってお前の扱いうまいわー」

「はあ?!」

訳の分からないことを言われて海が顔をしかめると、白土はニヤニヤしながら、海を見下ろした。

「昼前の佐藤主任との言い争い。殆ど言いがかりだったじゃん。あの人も引くに引けない人だからなあ。」

お前もマジで切れそうだったから、今日の昼は俺、八つ当たられ担当だと思ったのに、小鉢一つで機嫌直すんだもん、大したもんだよ」

「っな……!」

昼休み前、桃に仕事を渡す直前まで、確かに海は主任と口論になりかけていた。

たまたま主任の虫の居所が悪かったらしく、そこに海が、ミスと

は言えないが、つつかれやすい案件をうっかりもって行ってしまい、大人気なく理不尽に叱られたので、かなり苛ついた。

そして図面トレースを終えた桃がノコノコやってきて、どうでもいい菜っ葉の話をしていった。

聞いた当初はイライラしていたが、案件の見直しをしていくうちに、

(728で菜っ葉かよ。なんかうまいんだか、下手なんだか分からないゴロ合わせだな)

なんてどうでもいいツツコミが頭の中で浮かんで、気がついたらお昼になっていて、気がついたらほうれん草の小鉢をトレーにのせていた。

「偶々あいつがそんな話もってきただけだろ」

桃は偶に無駄話をする。その内容は天気のことから、最近好きなものまで様々だ。長時間話すわけではなく、ちょこつと話していくので、海としても特に気にしてはいないし、それが桃だと思っていた。

だから、次の白土の言葉に目を見開いてしまう。

「偶然じゃないでしょ？ 大島がイライラしてたから、空気抜きしてくれたんじゃない」

「アイツがそこまで考えてるか？」

確かに気配り上手とまではいかないか、ある程度気配りは出来ていると思う。

だが、菜っ葉程度の話で、しかもあんな能天気の話しかけたことが、海の機嫌を直そうとしたとは到底思えなかった。

白土はニンヤアと、また猫みたいに笑って、海を見る。

「だってお前機嫌直ってるじゃん」

「ぐ」

確かにそう言われたら言い返せないが、それは海が桃に好感を抱いているから、話したことで息抜きできたとも言えなくもない。

菜っ葉の話題だから、という訳でもないだろう。

言い返しはしなかったが、思ったことを見透かしたみたいに、白土は「まあ、菜っ葉なんてどうでも良かったんだと思うけど」と言った。

「ただ、タイミングは狙ったろうね。あんなギスギスした大島の所に、ノホホンと仕事貰いにいくんだもんな。ある意味、凄いやね、彼女」

白土がしみじみ感心するので、海は七味を蕎麦にかけながら、「考えすぎだろう」と切って捨てた。

「せっかくお前が当たられ役に立候補してくれたんだから、当たってやるっ」

「へ？ うわっ！ 俺、七味苦手なのに……！」

涙を浮かべてヒーヒー言いながらも、それでも白土はうどんを完食した。

午後一に午前中の案件を主任に見せにいくと、主任は午前中の不機嫌が嘘のように

「そのまま、相手方にメールで連絡してくれ」と了承してくれた。

だったら午前中にグチグチ絡むなよ、と内心思ったが、上手くいけばそれでいい。

海が席に戻ると、桃がトレースした図面をもって席に戻る。

「大島さん、2件、質問してもいいですか？」

「ああ、なんだ？」

桃がもってきた質問に答えると、桃は青ペンで訂正個所を書き留めて、「ありがとうございます」と席に戻ろうとした。

「あ、酒田」

「はい？」

「菜っ葉、食べてきたぞ」

そう言つと、桃はニコツと笑った。

「それは良かったですね」

もつと何か言ってくるのかなとも思ったが、拍子抜けするくらいアッサリそう言つと、桃は席に戻っていく。

(やっぱり、白土の思い過ごしだろうが)

自分はそんなに単純じゃない。

菜っ葉程度で気晴らしになる訳じゃない。軽口程度で気晴らしになるわけでもない。

(まあ、それでも . . .)

あの時、酒田がどうでもいいこと言ってくれたのは良かったんだろつな)

下手に同調されたりしたら、更にイラついて、主任に午後一で案件をもっていけたか怪しい。

(今度、飲みにも誘つか)

暑気払いでも兼ねて声をかけようと思いながら、海は仕事に集中した。

7 7月28日 (後書き)

菜っ葉の日を教えてくださいましたエニシダさん、ありがとうございました。

8 7月28日

ああ、怒られている。

好きな人が怒られている姿をみるのは、ちょっと胸が痛い。

仕事中、もうすぐお昼だっていうのに、窓際の主任席で、私の好きな人、大島さんが佐藤主任に怒鳴られていた。

佐藤主任は気分屋で、その日の気分で人を怒ることがある。普段は気の優しいおじちゃんなのに、今日は虫の居所が悪かったらしい。

(大島さんもそういうの気にしてみればいいのに・・・)

偶に大島さんは人のタイミングを見誤る時がある。まあ、この職場の男性陣は皆、悲しいことに自分本位なところがある。

設計職という職業柄でそうなるんだなんて言う人もいたが本当のところは分からない。

ただ、自分の仕事に没頭すると、ちょっと周りが見えないときがあるのは確かだ。

(うわ、凄いイラついてる)

席に戻った大島さんは不機嫌極まりない顔で、あんな露骨に不機嫌な顔をしていたら、また主任が怒るような気がした。

これは午後もうひと嵐、くるかもしれない。

(それは嫌だなあ)

大島さんが苛ついてっていると、私も何だかモヤモヤする。

だから思い切って午後からのトレース作業を貰いに行く。幸いに午前中の作業は終わっていた。但し、白土さんから頼まれたトレース作業が実はまだ少しある。

それでもあんな不機嫌な状態で二人ともいるのは不味いだろう、と大島さんに声をかける。

案の定、大島さんは不機嫌丸出しだ。私はそれを無神経を装って無視すると、午後の作業を貰う。

(んー。どうしたら機嫌なおるかな)

下手に仕事の話をしてもきつと駄目だろう。

ふと目線の先に、カレンダー。

今日の日付は7月28日。

「あ、今日って何の日だか知ってますか、大島さん？」

「.....」

(うう、めげそう。頑張れ、私ー！)

「今日は菜っ葉の日らしいんで、菜っ葉が食べたいですね、大島さん！」

「はあ？」

怪訝そう、というより、不機嫌丸出し。ああ、馬鹿な話でスイマセンと思いつつも、笑顔で728(なっば)の話をした。

大島さんは不機嫌ではあったけれど、最後には「ああ、分かった」なんて会話らしい会話を出来たので、ほっとした。

息抜きにもならないだろうけど、少しでも息抜きできたらいいな。「お昼に菜っ葉あるといいですね」

お昼休み始まりの時、今日はお茶当番だったので、佐藤主任の席にお茶を渡しに行く。

佐藤主任は丁度お弁当を開いたところで、私は思わず「おいしそ

「！」と声をあげた。

佐藤主任は歓喜の声をあげた私を見て、少しだけ苦笑する。

「うわ、レトルトないですね、佐藤主任！ 奥さん、凄いなー！
！」

「そうか？」

佐藤主任、実は愛妻家だ。席に子供の写真を飾っているのだが、その写真には奥さんも写っている。本人は否定しているけれど、奥さんのことも好きだから、家族の写真をわざわざ飾っているのだらう。

まあ、飾っているといっても、パソコンの下の方に小さく名刺サイズで机にはさまっていて、普段はキーボードで隠れて見えないから、知っているのは主任の机を拭き掃除する女性社員ばかりなのが。

「佐藤主任、今日は菜っ葉の日なんですよ！」

大島さんに言ったことと同じことを言えば、佐藤主任は嬉しそうに、

「今朝、うちのかみさんも同じこと言ってたな」

と返してくれる。しかもニコニコしながら。

「あ、だから今日のお弁当、菜飯なんですか？ 凄いいいしそー！」

そう言った私の視線の先には、お世辞抜きに美味しそうなお弁当。「わざわざ菜飯にしてくれるなんて素敵なお奥さんですね。私もそんな奥さんになりたいなー！」

嘘ではなくそう思う。

会社で頑張ってお仕事してきてもらっている旦那さんが、お昼のお弁当で少しでもふんわりした気持ちになれるのって、奥さんとしては嬉しいんじゃないだろうか。しかも、自分の作ったものでそう感じてもらえたら、妻冥利に尽きる。

「ははは。酒田くんならすぐお嫁さんになれるんじゃないの？ ああ、でもまだお勤めはしててもらいたいなあ」

佐藤主任は午前中の不機嫌もどこへやら、嬉しそうに自分のお弁

当を両手で触れながらそう言った。

気分屋さんではあるけれど、この主任さんのこういうところは好ましいと思う。

私はニコニコしながら、自分の席に戻って注文していた宅配弁当を手にすると、一緒にご飯を食べている女性陣のいる会議室へと向かった。

午後、佐藤主任も大島さんもご機嫌とはいかないまでも、午前中のことは水に流したらしく、何事もなかったみたいに話を進めていた。

私は大島さんの様子を見計らって、トレースでわからない箇所を質問した。

本当は雑談したかったけれど、白土さんの仕事もこなさなければならぬから、急いで要点だけ確認した。そして席に戻ろうとした時、大島さんが思い出したかのように最後に言う。

「菜っ葉、食べてきたぞ」

一瞬、キョトンとして、それから思わずニヤツとしてしまった。

(やだ、この人、可愛い)

年上なのに、どうしてこうも素直なんだろう。

別に青菜を絶対食べて欲しくてあんなこと言った訳じゃない。

気晴らしにもならなかっただろう雑談なのに。それでも、そうして素直に食べてきてくれるこの人が、愛しいと思ってしまう。

これ以上いると、もっとニヤニヤしてしまうと思って、慌てて自

分の席に戻った。

(うう、大島さんって何であんなに可愛いのかな！)

卑怯だ！と内心思っていたところに、白土さんがチョンチョンと机を指で叩いてくる。

「俺が頼んだの、終わった？」

「あ、すみません。あと見直しだけで、今、出力中です」

トレースした図面は、必ず二重チェックをかけるようにしている。画面チェックだけでは見逃しが多いからだ。

「俺の仕事も忘れないでよおー」

シクシクと泣き真似をされるから、私はアハハと笑って、「午後一で仕上げてますから大丈夫です！」と返した。

「大島のところに行ってるから、俺が頼んだの忘れられたかと思っ
たよー」

「そんなことないですよ！ チェック図面出力中に質問に行った
だけです」

「そー？」

白土さんは寂しがり屋さんだ。そして面倒くさい。

隣の席で、サチが露骨に顔をしかめている。サチは白土さんのこ
う言つところが嫌いらしい。

まあ、私も好きではないけれど、影で言われたり、思われたりす
るよりは、白土さんは素直でいいと思うのだが。

「あとで白土さんの席にもっていきますね？」

「うん。よろしくー！」

白土さんがふらあつと、蜻蛉みたいにフワフワしながら、自分の
席に戻ったのを見てから、私は白土さんからの図面を確認し始める。

「あんたつてさあ・・・」

横の席のサチが、そんな私を見ながらポツリと呟いた。

「ほんと、出来た女だよね」
「ん？」

「大島さんも佐藤主任も、白土も、みんな、あんたの手の上で踊らされてそう」

「ははは、何それ」

(手の上で踊るねえ・・・)

踊らされているのは、私の方だ。

「この魔性め！」

「ちょ、ひどっ」

私はアハハと笑いながら、サチの肩を軽く叩いた。

魔性だったら、どんなによかっただろう。
だけど、私は魔性でも何でもない。

ねえ、知ってる？

私みたいに誰にでもいい顔して、人の顔色ばかり伺ってる女は、
魔性なんかじゃない。

ただの都合のいい女なんだよ？

いつか、

いつか、
私は誰かに愛される日がくるんでしょっつか？

9 8月2日

「鰻、うな、うな、鰻」

調子外れな音程だけど、そこは見逃して欲しい。

何故なら今日は鰻の日。土用の丑の日だからだ。

夏の、土用の丑の日は有名だけど、今年は、実はそれが二回ある。毎年あるわけではなくて、今年の暦がたまたま丑の日が2日ある年だということなのだが、私は二回あったことに、深く深く感謝したい。

「はいよ、鰻の白焼きね」

「きやああ!」

行きつけの蕎麦酒屋。

私の前には白焼きの白い鰻。

私の横には、日本酒を飲みながら笑む大島さん。

そして、歓喜に咽ぶ私。

「今日、二の丑だろ? 飲みに行くか?」

と大島さんが言ってきたのは、定時前の廊下。いつもならこれから残業に入るのが大島さんの常なのだが、今日は早く帰れるようになったらしく、こうして二人で行きつけの蕎麦酒屋に来ていた。

「そんなに鰻が好きなのか?」

半ば呆れるような大島さんに、私は満面の笑みで、

「いや、丑の日なんだから、食べないと!」

と力説する。

年中、鰻を食べたがるほどの鰻好きではないが、やはりこの季節

になると、いつもより鰻が食べたくなるのは世の常だろう。

しかも酒飲みにはもってこいの、白焼きだ。

脂ののったふんわり白い鰻を山葵で食べるなんて、どんだけ贅沢?!と思わなくもない。

しかも、今年の鰻は高上がりで、この白焼きだって、この蕎麦酒屋の価格帯では、破格のお値段だ。それでも、こうして白焼きを用意してくれる蕎麦酒屋の店主であるおとーさんに、私は心底感謝する。

「おとーさん、おいしー!!」

「ははは? そうお? それなら嬉しいなあ」

おとーさんは好々爺然とした話口で、嬉しそうに目を細めた。蕎麦だけでも十分美味しいのに、この蕎麦酒屋は、酒のつまみも絶品だ。そして安い。

楽しくてうまい酒、がおとーさんのモットーらしく、その酒に対する愛情はおとーさんの店構えにもよく表れている。

決して満員御礼な、繁盛店ではないが、常連がこよなく愛する酒屋が、ここだ。

(私が一人で来ても、快く受け入れてくれるしね)

何も聞かないし、何も言わない。

去年まで、ここに通っていたのは、実は私一人じゃない。

実家からタクシーワンメータの距離だが、市街地と住宅街では人の目は全く異なる。

私のことを知る人もいなかったこの場所に、去年、一昨年、その前の年、私はずっと誰かさんと一緒に来ていた。

大島さんも常連だったのに会わなかったのは、単純に私はこの店に来店するのは土曜日で、大島さんは会社帰りの平日だったからだ

ろう。

思い出の場所、と言うのも苦い思い出だが、誰かさんと来ない日も一人で偶に来ていたせいか、おとーさんは一人できていた私にもいつも通りだったし、誰かさんが一緒にこなくなっても、いつも通り迎えてくれた。

美味しいお酒と肴を、女一人でも気兼ねなく飲み食いできる場所というのは、ジクジクと何時までも消えない傷みを少しでも癒すのに、本当に貴重な場所だったのだ。

「おいしー。おとーさん、おいしー！」

「奢ってやる俺に感謝の言葉はないのかよ」

隣で酒を飲んでいる大島さんが、呆れたようにそう言うので、私はニコニコしながら、

「大島さん、御馳走様です」

と言ってみた。

「ああ」

私の顔に満足そうに大島さんは目を細める。

初めて二人で飲んだのは去年の暮れ。

それから一人で通った一月、二月、三月。偶に会うようになって、四月には蕎麦酒屋で偶然出くわすのではなく、互いに声を掛け合っで、ここに繰り出すようになっていた。

(神様、ありがとう)

運命の神様なんて信じないが、大島さんとのこの時間は、私にとってかけがえのない物になりつつある。

他愛ない話を異性とする。

それだけで、楽しい。

それだけで、癒される。

(これ以上は望みません)

もう、これで十分。

こうして、自分の恥を知らない人と話すことが、こんなにもささくれ立った心を癒やしてくれるものだと、思いもよらなかった。

(もし、大島さんがいなかったら、私、どうなってたかな)

やさぐれて、一人で飲み歩いて、寂しさに耐えきれず、行きずりの男と情性の関係を結んだかもしれない。

そうならなかったのは、大島さんがいたからだ。会社の人で先輩だったことも大きい。自棄になって、身体だけの関係になることも、大島さんとの関係故に防げた。

「ありがとうございます」

もう一度、心を込めてそう告げると、大島さんは

「そんなに殊勝にされると気色悪い」

と言いながら、私の頭にぽん、と手を置いた。

と、タイミングよく携帯の着信音が流れてくる。

私ではない。大島さんのだ。

私はニコニコしながら、大島さんが携帯をとるのを促して、自分は聞き耳を立てないように、おとーさんに話しかける。

だけど、一瞬間こえた名前に、ピクリと少しだけ反応してしまう。

「なんだよ、千夏。はあ？ もう飲みに来てるっつうの」

(この前の人だ)

頭からスウツと血の気が引いていく。聞きたくないのに、大島さんの声が入ってくる。

「ああ、後輩と鰻食ってるんだよ。だから無理」

飲みの誘いだとすぐに分かった。

大島さんの方を見てないけれど、大島さんは少し不機嫌そうなのがその声から聞いてとれた。

「はあ？！ 会社の側じゃないから、来れねーよ。早く家帰って、飯作れよ。出張？ ああ、そうか……」

大島さんの声が弱くなる。

何だか嫌な予感がして、思わず大島さんの方を見た。

(ここは嫌だ)

千夏さんとやらには申し訳ないけれど、ここには来ないで欲しい。

ここ、だけは、嫌だ。

どうしても。

絶対。

私の顔が強ばるのが分かったのだろう。

大島さんはぼん、とまた私の頭を叩いて、

「駄目だ。また、別の日にしてくれ。じゃあな」

と言って、電話を切った。

私は自分でも分かるくらい、あからさまにホッとしてしまった。

(私にそんな権利ないのに)

私たちはあくまで、同じ職場の先輩、後輩でしかない。ほんの少しだけ、飲みに行く回数が多い。

それだけの関係。

「すまん。気にするな」

(謝らなくていいです)

謝らなきゃならないのは私の方だ。

まるでこの蕎麦酒屋が二人だけの場所みたいに、独占しているんだから。

「ごめんなさい・・・」

うなだれると、もう一度、頭を今度はくしゃりとかき混ぜられて。

「ホラ、せつかくの鰻なんだ。しっかり食えよ」

「はい」

山葵をのせて、パクリと口に鰻を含むと、ふんわりと優しい食感と共に、つん、と山葵の辛さが鼻にぬけた。

「酒の肴に鰻つつくのは、お前だけで十分だ」

ボソツと大島さんがぼやいたので、私は顔をあげる。どういう意味が分からずに首を傾げると、大島さんは苦笑しながら、

「今年の鰻は高いからな」と言った。

「そんなにお財布辛いなら、割り勘でいいですよ?」

いつも飲みに行くときは割り勘か、少しだけ多く大島さんが払う。鰻は大島さんが奢ってくれるという話ではあったが、ポーナスだって先月でたばかりだし、私だって余剰のお金がまだある。

「お前に心配される程、金がないわけじゃない」

「じゃあ、どうしてですか？」

とは聞かない。聞けない。

何だか聞いてはいけない気がしたし、聞いても答えてくれない気もした。

それでも、先程よりは随分心のざわざわも落ち着いて、いつもの二人の空気が降りてくる。

恋人じゃない。

だけど、ただの先輩、後輩でもないことに、私も大島さんも多分、気がついている。

それでも、これ以上進まないのは、私が悪いのか。それとも大島さんが悪いのか。

答は出さないまま、もう一口、パクリと鰻を食べると、やっぱり山葵が鼻につんときた。

色んな想いも一緒に通り抜けたけど、私はそれをサラリと流した。

10 8月2日

海が子供の頃、鰻の粉を混ぜたクッキーを静岡土産にもらうと、いつも疑問に思っていたことがある。

夜のお菓子。

お菓子は3時のオヤツだと思っていた海にとって、何故、その菓子だけが夜と冠するのかわかりませんでした。

大人になった今では、随分、際どい隠喩だったのだと分かるが、今更、それを誰かに言う気はない。

「酒の肴に鰻つつくのは、お前だけで十分だ」
深読みすれば際どい言葉を投げかけたのは、桃と二人で飲んでいく最中だった。

二の丑だから鰻を奢ってやると言ったら、犬みたい尻尾を振って桃は海いつもの蕎麦酒屋についてきた。

いつもの楽しい飲み筈だったのに、水を差したのは、同期、人妻の千夏だった。旦那が出張だから、鰻を食べにいこうと電話をかけてきた。

いくら男として意識してないからと言っても、あまりにも道徳心のない千夏に内心、少し苛立った。

しかも鰻を既に食べていると言えば、自分も行きたいと言い出す始末で、そんな電話の内容をきいてしまったのだらうか、みるみる桃の上機嫌な顔が曇っていった。

(今更、何のつもりなんだか)

千夏は、結婚当初はピタリと連絡してこなかったくせに、この前、二人で飲んで以来、やけに気安くなってきた。

別に同期だから、嫌ではない。

だが、もう自分のプライベートな空間に、彼女を入れることはないと分かっている。

(そこには、コイツがいるからな)

鰻の話で微妙そうな表情を浮かべた桃は、他の人間を、鰻を食べに誘わないのはお金の問題ではない、との回答に僅かに戸惑った。

「この山葵、つん、とくるけど、お寿司屋さんみたいに避けて、る程じゃないですね」と別の話に移してくる。

さっきまで、他の女が入ってくるのを嫌がった《女》の顔はもうそこにはない。

(鰻食っただけ食って、そのまま、帰るのかよ)

奢ってやるって言ってるんだから、少し位、深読みしてもいいのに、そんなことを桃はしない。

思えば千夏もそんな感じだった。

散々、煽るだけ煽って、そのまま、サラリと海の腕から逃げていく。まるで、その駆け引きが楽しいんだと言わんばかりに。

(お前もそうなのか?)

期待させるだけさせて、桃も千夏のように、さっさと他の男の物

になるんだらうか？

酒を飲みながら、桃の顔を盗み見ると、桃は鰻の白焼きを綺麗な箸使いで口に運んでいた。

曇っていた表情が僅かに弛む。

そんな桃を見ている自分の頬も思わず弛む。

(くそ)

騙されてるかもしれない。

そう疑うくせに、桃のほんの少しの柔らかい態度で、そんな疑いをもみ消してしまう自分がいる。

「大島さんも食べましょうよ」

先程よりは大分元の顔に戻ってきた桃がそんな風に海に言った。

(鰻で悶々とするのは俺だけか？ 俺だけなのか？)

好きな女が目の前にいて、他に女を連れてこないで欲しいと表情に出される位には欲を見せられて、それでどうにか出来ない自分は何なんだと苛つく。

「大島さん？」

桃に呼びかけられて、海は桃を見る。

「この後、どうする？」

そう、思わず言いかけて、慌てて酒で流し込んだ。

(今日はどうかしている)

二人で飲んでいるところに、知らない奴が来たら、嫌がる人間も

いるだろう。

この気安い空間が損なわれるのは、海だって本意ではない。

「店主、甘口の重い酒、ありますか？」

助け船を乞うように店主に問うと、店主は一本の日本酒を奥の棚から持ってくる。

「これなんか重いし、香りも強いよ」

そう言われて、一合徳利に注がれた日本酒を、猪口を空にしてから注ぎ飲んで見れば、なる程芳醇な味で、のど奥にズシリときた。

「私も飲みたいです」

「お前、重いのが苦手じゃなかったか？」

桃はどちらかと言えば辛口のスッキリとした飲み口の酒を好む。

だから、飲み干して空にした猪口を突きつけられて、僅かに注ぐのを躊躇うと、桃は不満そうに口を一文字にした。

「私も飲みたい」

「子供か、お前は」

その駄々さえ可愛らしい、と内思いながら酒を注ぐと、桃は一気にぐいっと飲み干した。

「あ、おいしー！」

ペアっと、電話が来る前の明るい表情に桃が戻った。

「一気に飲むなよ」

と注意しつつ、再度酒を注いでやると、桃は鰻も食べながら、満面の笑みを浮かべる。

「おとーさん、これ、鰻とあうー！ー！」

嬉しそうに桃にそう告げられて、店主も嬉しそうだった。

それを見て、海も嬉しくなる。

(このままでいい……)

喜ぶ桃の顔を見られれば、それでよくなってしまふ。
下手に藪をつついて蛇をだす必要はないのだ。

この居心地のいい空間は、やっと作れた二人の空気だ。

他の人間に混じってもらいたくないし、自らこの空気を壊す必要もない。

(このままで、いい)

千夏の時のように、浮かれてはしゃぐ年でもない。

それがずっと続かないことも分かっていくせに、まるで夏休みの宿題みたいに、未来に押し込む。

酒を飲みながら鰻を食べると、確かに酒の重さが、白焼きの淡泊ながらしっとりとした味にじっくりきた。

「確かに合うな」

「でしょう!」

まるで自分の手柄みたいに喜ぶ桃を見ながら、海も微笑んだ。

夜のお菓子にもなる鰻。

桃の笑顔はいつそ清々しい位健全で、海は鰻と一緒に腹の中に黒い欲は流し込む。

これ以上は望まない。

期待しない。

それでいい。それがいい。

そんな二人でいられる内は、いくらでもいよう。

そう決意すると、海はぐいっと猪口を干し、甘口の重い酒を再び注いだ。

「えへへ。奢って貰ってすいません。今度、私も奢りますね？」

嬉しそうに笑う桃を見ながら、海も笑む。

いつもなら、「来年の丑の日も奢ってくださいね？」なんて言ってもいい筈の桃が、今日に限って殊勝なことを言った。

多分、来年の丑の日は鰻を食べないだろう。

このままでいい。

このままが、いい。

だから、来年はきつと鰻は食べない。

11 8月5日

「私、今度の暑気払いにちょっとどころじゃなく、本気になってます」

ダンッ、と漢らしく生中ジョッキをテーブルに叩きつけたのは、同じ職場の西脇ちとせちゃんだ。

私の一つ年下の彼女は、今期、派遣で入ってきた女の子。

今日は金曜日ということで、気心知れた女子だけで飲んでいた。ちとせちゃん、私、そしてサチ。

年齢順でもそうなるが、この位の年の差って、会社に入るとそう大差なくなる。大体は勤務年数とか人脈が物を言うてくる。

女が三人同じ職場にいと、何かしら面倒事も起こりそうなのが、私もサチもちとせちゃんも、マイペース人間らしく、すんなり仲良くなれた。

まあ、私としては三人とも大の酒好きってところが、馬があつた要因だと思っている。

因みに、私は何でも。サチはワイン好き。ちとせちゃんは日本酒好きと、好みが分かれているのもいいのかもしれない。

「本気って何が？」

サチが面白そうにちとせちゃんに尋ねると、ちとせちゃんは真顔で、

「浅間さんに勝負かけようと思ってます」
と言った。

「ええっ!?!」

浅間さんは同じ設計グループの技術主任で、年齢はちとせちゃん
とほぼ10歳違う33歳。

将来有望と言えば聞こえはいいが、痩せてヒョロリと長い体型に
眼鏡という、ちょっとオタクっぽい人だ。

「まさか、本当に本気だったの？」

私が尋ねると、ちとせちゃんは頬を膨らませながら、

「本気ですよ！」

と言った。

ちとせちゃんは、自分の歓迎会の時に、何を間違ったのか、その
浅間さんを好きになってしまったらしい。

酒の席の気の迷いだと思っていたのだが、着々と恋心を募らせて
いたとは思ってもよらなかった。

「確か、最初の飲み会で色っぽいって誉められたんだっけ？」

「はい！」

あの時の浅間さん、すごいムラムラきました」

頬に手を当てながら、ほおっと吐息を漏らすちとせちゃん。

その仕草は可愛いけど、言っていることは間違いなく《肉食女子
》だ。

私とサチとちとせちゃん。

サチは165センチあるが、私とちとせちゃんは150センチ前半
だ。髪型もショートボブだから似てなくはないが、前から見ると一
目瞭然。

たわわん、と豊かなお胸がちとせちゃんにはついている。そして

顔立ちも童顔でキュート。

パツと見、この三人の中じゃ、一番女の子らしいはずなのに、一番漢らしいのは、間違いなく彼女だろう。

「で、今度の暑気褌いでどうしたいの？」

そう確認したのはサチ。

こういう時、話をスムーズに流してくれる分、やっぱりサチが一番お姉さんなんだな、と思ってしまうが、そんな感心をよそに、ちとせちゃんは若さ爆発、お胸に違わないビックボムを投下してくる。

「酔った勢いで、既成事実を作ろうかと・・・」

ゴン。

勢いよくした音は、ちとせちゃんのジョッキの音じゃない。

私が頭をテーブルに打ちつけた音だ。

「ちとせちゃん、既成事実って・・・？」

「なにカマトトぶってんのよ。寝るってことでしょうが」

サチがニヤニヤしながら言ってくる。

サチはどうやら完璧傍観を決め込んだらしい。

だけど、私はそこまでは無理だ。

だって、ちとせちゃんも、浅間さんも、直接仕事で関わってくる。

「し、失敗したら、とか考えてないの？」

「いや、浅間さん、彼女いないみたいですし、押せばいけそうかな、と」

確かに押せば押し倒されそう．．．って、そんな失言をしている場合じゃない。

「一夜限りとか、そのあとのこととか、よく、考えてからにしようよ。ね、ちとせちゃん！」

「考えましたよ？ だけど、どうしても欲しいんです」

まるで子供が玩具を欲しがるといって、サラリと断言されて、私はあんぐりと口を開けるしかなかった。

ちとせちゃんはキラキラした目で、

「だって、このままいくと、他の誰かにとられちゃうかもしれない」と、力説した。

(いや、そう考えるのはあなただけですから！)

どう考えてもあの浅間さんを奪い合う女性が現れるとは思えなかったが、ここに一人、年の差も乗り越えてチャレンジしようとする強者がいるから、何とも言えない。

「だからって、お酒の勢いってというのは．．．」

「別に意識不明にしていただこうって言ってるんじゃないんです。

きっかけが欲しいんです。浅間さんと二人になれるきっかけが」

そう言ったちとせちゃんの表情は真剣で、凄く浅間さんの事が好きなんだと伺えた。

「それに来週の金曜日の暑気払いが終わったら、お盆休みに入っちゃって、会えなくなるから寂しいですし．．．」

口を尖らせて俯くちとせちゃんはとても可愛い。

確かに来週の金曜日の暑気払いが終われば、会社はそのまま長期連休に突入する。

次に会えるのは10日後の22日だ。

「10日も会えないなんて辛くないですか、桃さん？」

「うーん……」

自分に置き換えてみると、なんとなく共感出来なくもないが、まあ、仕方ないかなあ、なんて思ってしまう私と違って、ちとせちゃんはその10日さえ惜しいのだろう。

「それに、こうやって奮い立たせないで、いつまでも部下と上司だし……」

とぼやかれたちとせちゃんの言葉は、じくり、と私の胸にも棘を刺す。

「桃は現状維持派だもんね」

自分は彼氏持ちのせいか、サチは余裕の発言で、私にチョツカイをかけてくる。

本当、サチはサドツ気が強い。

私が顔をしかめて「別にそういうんじゃない」と言えば、ちとせちゃんが

「大島さん、結構もてますよ」

と塩を擦り込んでくる。

そんなこと分かっている。

大島さんは小さいけれど、何となく母性本能をくすぐるらしくて、経理などのアラサー女性の方々に、《プリンス》なんて影で呼ばれているからだ。

別に王子王子しているからではなくて、可愛いという意味合いで使われているらしい。小さな王子さまは、浮いた噂こそないが、好感度は高いことに間違いない。

「うかうかしていると取られるよー」

「別に私のものじゃないし」

「何でそう頑なかなあ」

サチが心配そうに私を見る。

サチには去年まで彼氏がいたことは話している。別れの理由までは言っていないが、大島さんとなく飲みに行くようになり始めたことを話したら、「新しい恋が一番だよね」と、自分のことのように喜んでくれた。

だから、私と大島さんの、何とも言えない関係を気にしてくれていることは分かっている。

ちとせちゃんにしたって、私と大島さんが飲みに行くことは知っているし、私が大島さんを好きなことも話しているから、私達の関係が不思議で仕方ないのだろう。

(だけど、本当のことを知るの怖いのさあ)

こうして飲みには行くけど、大島さんが本当は私をどう思っているのかは分からない。

皆はあれやこれやとはやし立てるが、それが正しいかなんて、大島さん本人にしか分からない。

確証のもてない感情に突き動かされるなんて、一度失敗した私には、どうしても出来なかった。

「ちとせと桃、足して2で割れば丁度なんじゃない？」

サチがぼん、と手を叩いてそう提案したが、それは名案でも何で

もないだろう。

．．．と、思っていたのは私だけらしい。

「そうですね、足して2で割りたいんですよ！」
と断言したのは、ちとせちゃん。

(いや、私、君と合体したくないし!)

ああ、でも、そのお胸だけは半分欲しいかもしれないと思った時
だった。

「なので、二次会に大島さんと白土さんも誘ってみました!」

「は?」

(二次会?)

暑気褌いに二次会はいつもない。長期連休の前日ということもあって、翌日から実家に帰省する人もいるので、なるべく早く切り上げるのが、例年の暑気褌이었다。
しかも大島さんは県外組なので、翌日から帰省組の筈。

「そ、それって、もしかして私もメンバーに入ってるの?」

確認すれば、ニコリと可愛らしくちとせちゃんが笑って、「はい」と答えてくれた。

「何で、また．．．」

「だって、私だけだと浅間さん、絶対警戒するし。浅間さん、白土さんと仲良しだから、大島さんもついてきても大丈夫だと思いますし」

「いやいやいや！　そういう問題？」

「大丈夫ですよ！　もうお店も予約してます！」

「そう言うのは私に確認してからしない！？」

少し語尾が荒いでしまったけれど、仕方ないだろう。

「いやだなあ、桃さんに大島さんをお持ち帰りしてもらいたいって言うてるんじゃないんですよ？」

（いやー！　この子怖い！！）

まだ少しの付き合いではあるが、その、手段を選ばない強引さに絶句する。

さすが女がてらに、あの浅間さんをどうにかしようと思うだけある。

「あわよくばお盆休みにどこか二人で遊びにいく約束でも取り付けられてはどうですか？」

（何、その、微妙に美味しい勧誘！！）

確かにお盆休み後半でもいいから、少し会えたらなあ、なんて思わなかったわけでもない。

だけど、お互いの電話番号しか知らない（それも飲みに行く都合上、聞き出したものだから、別に電話で互いに呼び出したことはない）状態で、お盆休みに電話で誘いをかけるのはハードルが高いと思っていたところに、その餌はずるいだろう。

ズルすぎる。

「はははー、がんばんなー」

傍観者のサチがケラケラと陽気に笑うと、ちとせちゃんはニコニコとエンジェルスマイルをサチにも向けた。

「男女の数、会わせた方がいいと思って、6人で予約してます」

「．．．え」

サチの笑顔が固まった。

ちとせちゃんはニコニコしながら、サチに更に言う。

「サチさんには、白土さんの監視役をお願いしたいんです。あの人、ウザイから」

（サラリと酷いこと言ったー！！）

「ただ、白土さんがウザイのは間違ってるので、そこは突っ込まない。」

「ち、ちょっと、私まで巻き込むの?!」

「ゴールデンウィークの時、お土産にワイン買ってきたら、『なんでも一つ、お願いきいてあげるよ』なんて仰ってくださいましたじゃないですか」

（サチへの賄賂は渡し済なんですね．．．）

サチが「うおう、もう飲んじゃってるよ!!」と悔しそうに呻いている。

「というか、ゴールデンウィークからって、どんだけちとせちゃん、計画練ってたんだろう。」

怖くて聞けない。

私とサチは可愛い顔して悪魔みたいなちとせちゃんを、恐る恐る見た。

だけど、そこにいたのは悪魔じゃなかった。

「お二人に不躰なことをお願いしているのは分かっています。別に浅間さんを襲う手伝いをしてほしいわけじゃないんです。そこら辺は、私、自力で頑張りますから」

ちとせちゃんは私とサチを真剣な目で見ていた。そして、強い意志を持った目で私達を見て言う。

「好きなんです。浅間さんのこと。凄く。」

私のこと、見てほしいんです。

例え、どんな手を使っても。

もし、それで嫌われたっていいんです。異性として見られて、駄目だったら諦めもつきますから」

強い、強い意志だった。

「私は浅間さんに女として見てもらいたいんです」

そこまで言われて、手伝わないって断れる程、私もサチも薄情ではなかった。

だって、彼女は彼女なりに頑張っているのだ。

その勇気と、努力を貶す権利は私にもサチにも、ない。

「ワインやら他の男で友達釣るやり方、私は好きじゃない」

ピシヤリとサチがそう言い放つ。一瞬、痛そうにちとせちゃんが目を細める。

「だけど、ちとせの、その愚直なところは嫌いじゃない。最初からそうお願いすれば、私も桃も喜んで手伝うよ」

呆れたような、だけど、どこか優しいサチの言葉に、くしゃり、とちとせちゃんの表情が歪んだ。

一瞬、泣くのかと思った。

そして、その顔を見て、ちとせちゃんも不安で一杯なんだと分かった。

「私も楽しみにしてるよ」

そう声をかけたら、ちとせちゃんは嬉しそうに微笑んだ。ぼろり、と、涙がその目から零れる。

「すみません。ありがとうございます」

深々とお辞儀をされ、私とサチは、目を合わせて微笑んだ。

8月12日、金曜日。

全てはその日の飲み会が、きっかけだった。

だけど、それはちとせちゃんが悪いわけでも、浅間さんが悪いわけでもない。

誰も悪い人なんていなかった。

でも、その飲み会がきっかけで、

私の壊れた心は動き出し、

浅間さんの何かがちとせちゃんに向かい、

ちとせちゃんが強い決意をし、

大島さんの心を固めさせて、
誰かの心が歪んでいくなんで、
未来を読めるはずもない私達に、
当然分かるわけもなく。

賽は投げられた。

12 8月8日

「お前、帰郷、いつから？」

白土にそう問われ、海は苦笑しながら、顔を上げた。

「あと1週間あるのに、もう夏休みかよ」

月曜の朝から、週末の夏休みに関しての予定を聞いてくるなんて夏休み気分には早すぎるんじゃないか。

そう咎めるように海が白土を見上げると、海の席の横に立っている白土は、ニヤニヤしながら小声で言う。

「違う違う。12日、暑気褌いの後に有志で飲もうって話が出てんの」

「はあ？」

何故、わざわざ暑気褌いの後に飲みに行かなくてはならないのか分からずに眉を顰める。長期連休の前日でもあるその日は、通常ならば翌日からの帰省組のことを考えて、二次会はない。

帰省組でなければ飲みに行く輩もいるが、海も翌日早朝の電車で帰省の予定だったので、それを知っていながらわざわざの飲み会の誘いに戸惑いを覚えた。

「その翌日早朝帰省なんだが」

「あ、ヤッパリ。じゃ、違う奴にしようかなあ」

あっさり和白土が引いたので、訝しげに彼を見れば、白土は「言ったじゃん、有志一同って」と言った。

「有志って誰だ？」

「俺と浅間さん」

「浅間さん？」

チラリと浅間の席を確認するが、彼はまだ入社してないようだった。車通勤なので、電車通勤の海や白土と違って、会社につく時間も丁度よく調整しているらしく、浅間の会社時間はいつも仕事開始15分前だ。

低血圧なのか、朝は酷く眠そうな顔で現れる浅間と、この目前に立つ白土は、何故か相性が良かった。

「だったら、二人で飲……」

「女の子も三人。」

西脇、花川、あと一人、だあれだ？」

ニヤニヤしながら海に聞いてくるその態度が腹正しい。

西脇、花川とつるんでいる女子とくれば直ぐに検討はつく。

(そんな話、言ってなかったな)

桃から飲み会の話は全く聞いていなかった。いつもならそう言うことは隠し事なく言ってくる質なのだが。

そこまで考えて、先週の金曜日に桃たちが飲み会だと言っていたのを思い出す。

「白土、その飲み会、女側の発起人って、西脇？」

花川はまず自分から提案しない。桃は半々だが、海を誘うつもりなら、桃本人から聞いてくるだろう。

消去法で行き着いた答に、白土は面白くなさそうな顔になる。

「ちつ。無駄に勘がいいでやんの」

それは西脇が発起人だと暗に言っているも同然で、海はジロリと

白土を睨みあげると、手帳を取り出し12日に印をつける。

「あれー？」

「俺も参加だ」

「ぐふ。可愛いね？」

(そんな合コンみたいな飲み会に、他の奴、誘われてたまるか！)

桃は、海の所有物ではない。

だけど、誰かのものになることを、わざわざ黙って見送るつもりもなかった。

うぷぷぷ、と不気味な笑いをあげる白土にムカついて、海は白土の向こう脛を遠慮なく蹴飛ばした。

「あ、大島さん！」

トイレに行った帰り道、廊下で桃とバッタリ会った。

桃は海の顔を見るなり、駆けてくる。

「どうした？」

「あの、週末の二次会、大島さんも参加なんですよね？」

少しだけ不安そうな桃の顔。

海はニヤリとしつつ、「俺じゃない方が良かったか？」と尋ねる。

「え！？ それは嫌ですよ！ だって気疲れしちゃうー！」

ぶんぶんと首を横に振る理由の色気のなさに少しだけガツカリしたが、桃らしいと言えば桃らしいので、「冗談だ、と笑ってみせた。

「しかし、そんな形で飲み会なんて珍しいな」

「そ、そうですね？ たまにはいいとおもいますよ！ みんなで飲むのも楽しいし！」

それならわざわざ二次会をする必要性はない気がした。なんとなく、桃の発言に含みを感じたが、あまりつつくのも自分の性分ではないので、「そうだな」と相槌だけを返す。

「その後、二次会も出来ればいいんだけど、無理だろうなあ」

「え？」

「いつもの蕎麦屋」

そう告げると、一瞬、桃がポカンとした顔になり、直ぐに「うわ、そっちの方が良かった！」なんて嬉しいことを言ってくれる。

本当なら、暑気払いの後、二人で飲み直しがてら、蕎麦屋に誘うつもりだったのだ。

しかし、流石に二次会の後では海も難しく、それだけは少しばかり残念ではあった。

（休みの前ぐらい、二人でゆっくり飲めれば良かったんだが）

10日も連休中は顔を見られない。あわよくば連休後半に、蕎麦屋で飲む約束でも取り付けたかったのだが、果たして二次会で誘えるか怪しい。

「あ、あのー！」

「ん？」

「れ、連休中にもし空いてる日があったら、蕎麦屋行きませんか？」

少しだけ不安そうに桃が尋ねてきた。

「去年の暮れみたいに昼間っから飲むのか？」
嬉しいくせに意地悪くそう問えば、「夜です！」と桃が慌てて言った。

(別に昼間っからでもいいんだけどな)

それはデートみたいで、なんだかとても楽しそうだった。

思わずにやけそうになりつつ、海は桃の肩をポンと叩くと、

「まあ、それは週末決めるか」

と言って、桃と離れる。

あまり廊下で、男女二人というのはよくも悪くも目立つ。

桃も時間だと気づいたのだろう。

「あ、それじゃ、また後で！」

と言って、トイレに向かって小走りに去っていった。

「.....」

部屋に戻りながら、思いがけず結べた約束に心弾みそうになった瞬間、ズボンのポケットに突っ込んでいた携帯が震える。

取り出すと一通のメールが入っていた。

差出人を見て、思わず眉をしかめる。

(何で今更)

メールの差出人は千夏からだ。結婚前は頻繁にメールを交換していたが、今はメールなど全くしていなかった。

この前の、二人での飲みが、余程千夏にとって懐かしかったのかもしれない。

何故なら開いたメール文の軽さは、以前の見知った彼女からの雰囲気そのままだったからだ。

《ヤッホー。今週で終わりだね！

やっと夏休みだよ！！ お互いお疲れ様！

せっかくだから、明日あたり、暑気被いしない？（ハ―・）》

結婚前なら、そのメールの内容は、『二人で』という意味だった。けれど、今は二人で飲むことは、海の倫理観からは外れている。白土辺りなら気軽に飲みに行くのだろうが、二人で飲んでいるところを見られて、変に噂をたてられたらたまったものではない。

だから、牽制の意味も込めて、返信する。

《何人で行く？ 白土とかなら直ぐ誘えるぞ》

その日、千夏から返信は来なかった。翌日、昨日とは打って変わって素っ気ないメールだけが海に届く。

《ごめん、用事入った》

それが本当か嘘かなんて、海には分かるわけもなかったが、なんとなく胸がざわついて、そのメールは読んだら直ぐに捨てた。

私の大好きな彼。

私の、私だけの彼。

彼も私が好きだって、私、知ってるの。

これから、どうしよう？

やっぱり初めは外で会う？

それとも・・・

直接、会いにいこうかな？

13 8月12日 (1)

「あれ？ 酒田、内藤と江口がつき合ってるって知らなかったの？」

社会人になってから、何度目かの飲み会だった。

大学のサークル仲間の有志一堂で集う飲み会。

私はいつもの通り新年会に参加して、そして啞然とする。

目の前で、自分の彼氏だと思っていた男が、別の女を彼女として紹介していたからだ。

否、紹介していたわけではない。

周知の事実だったのだ。

皆の間では。

「内藤と江口、同高からだから、もう7年になるんだと。ああいうの、純愛っていうんだろうな」

ニヤニヤと話すサークル仲間は、きつと、私と内藤がかなり仲が良かったことを知っていたのだろう。

私達が、というより、私が付き合いだしたのは、就職してすぐのことだ。

二人で何度か酒を飲むうちに、気がついたら、彼の部屋で、彼の布団で、裸になっていた。

好きだ、なんてことを言われたかなんて覚えてなく。

デートはいつも二人で飲んでばかりで、休日昼間に出かけることなんてなかった。

それでも、馬鹿みたいに私は、その男を自分の男だと思っていたのだ。

「酒田さあん」

何杯飲んだか分からず、しこたま不味い酒を干してトイレに行つたとき、内藤の彼女だと言われていた江口に呼びかけられた。

彼女は内藤と立っていた。

内藤はバツの悪そうな顔で私を見て、江口は長い茶色の髪を耳にかけながら、私に言う。

「私達、ずっと付き合ってたんだあ」

「そう」

「酒田さんは知らなかったみたいだけど」

ニコリと笑われて、そう言われて、全身の血が沸き立った。

そう、私は知らなかった。

だから、みんなの前で「桃は可愛いなあ」なんて言われたことも、冗談に受け取れなくて、卒業後、飲みに誘われたらホイホイとついて行ってしまった。

卒業後も何度か続いたサークルの飲み会。

親密さは見せなかったけれど、内藤に対して笑いかけてばかりいた私を、みんなはどう思ったのだろうか。

(ああ・・・)

いろんなものが足元から崩れていく。

「この人、からかうの好きなひとだから、ちょっと遊びが過ぎたみたい」

そう言いながら牽制され、内藤の苦笑いも見ないで席に戻ると、シンっといきなり静まり返った。

皆が私を見ていた。

何ともいえない目で。

(ああ、なんて恥ずかしい・・・)

自惚れてしまった自分が耐え難く恥ずかしかった。

あの人のただ1人が自分だなんて、馬鹿なことを思い、そして、付き合っていたなんて、幻想に溺れていたのだ、と思い知る。

憐れみでも蔑みでもない。

何とも言えない目をしたサークル仲間、既に私の友達などではなく、ただの外野であり、無関係な隣人だった。

いや、最初からそうだったのだ。

誰も彼も、私にとっては赤の他人で、ただのサークル仲間よりも縁のない存在だったから、私だけ、皆の周知の事実を知らなかったのだろう。

内藤と江口が入学当初から交際していたなんて。

後から人伝に聞いた話では、内藤は江口と付き合い合っていることを、大っぴらに公言することをあまりしていなかったらしく、あの日、正月明けの新年会で、二人の付き合いを知った人間もいたらしい。

では、何故二人がそんなことを、わざわざあの場で公言したのか？

それは私がいたからだ。

内藤の彼女面して浮かれていた私を、完膚無きまでに打ちのめしたかった。

それ故、だ。

(ああ、なんて・・・)

皆の視線が痛い。

いたたまれない。

顔が恥ずかしさのあまり赤くなっていく。

私は道化。

セフレにもならない、愚かな勘違い女。

私は、

私は、

恥ずかしい・・・！！

携帯のアラームで目覚めて、あまりの目覚めの悪さに、私は枕に顔をうずめた。

「なんで今更・・・」

夢の中身は、今年の年始に実際にあつたことだ。
恥ずかしくも、痛い出来事。

半年以上過ぎた今でも、こんなに鮮明に私を苛む。

「あー。くそ」

重い身体に鞭打つ様に起きると、時間を確認する。

6時30分ジャスト。

今日頑張れば、あとはお盆休みだつていうのに、幸先悪い夢見に苛立ちながら、私はベッドから身体を起こした。

8月12日、金曜日。

その日は朝からついてなかった。

上長に昨日の図面の入力ミスを叱られた。

飲みたいと思っていた飲み物が売り切れだった。

掃除の時間に紙で指を切った。

いつもなら笑い飛ばせるのに、些細なことも重なれば身体には応える。

定時間際にはぐったりしていると、パソコンと頭を誰かに叩かれた。

見上げると、図面を丸めて棒状にして持つ大島さんがいた。

「いいご身分だな、もう夏休み気分か？」

「そんなことないです！」

「このデータ、全部数字がずれてたから打ち直して」

「えっ？」

時計を見るとあと10分で定時だ。到底、終わる量じゃなくて大島さんを見上げると、

「今日中」

と遠慮ない声。

「はい……」

辛うじてうなだれずに図面を受け取る。

そして作業前に、サチを見て、

「こういうことだから、ごめん、先行つてて」と言った。

サチはニコリと笑って、「了解」と返してくれた。

今日は皆飲み会だから定時速攻だろう。

せめて1時間遅れで済むように、急いで図面作成ソフトを起動した。

「よし。帰るか」

修正を終えた図面を大島さんに確認してもらったのは、既に7時近くなつた時間。

いつもなら当たり前前に社員がいるのだが、流石にお盆休み前のせ

いか、殆どいなかった。
我がグループなんて、飲み会だから、私と大島さんしか残っていない。

「まだ間に合うだろう」

時間を確認しながら大島さんがそう言った。後片付けをしつつ、「ロッカー戻って、帰る用意してこい」と指示してくれるので、このまま一緒に遅れて飲み会参加という流れらしい。

「すみません、私のミスのせいで」

「まったくだ」

そう言いつつも大島さんの目は笑っていてくれたので、ホッとした。

片付けてロッカーに戻り、準備をして廊下で待っていると、大島さんも帰り支度を整えて部屋から出てくる。

会社内でこうして帰り支度をして一緒に帰るのは初めての経験だったので、不覚にも少しだけときめいた。

「今日、ミス、多かつたな」

飲み会場所への行き道で、大島さんがそんなことを言った。

私は下を俯いて、「すみません」とだけ返す。

「調子悪いなら、このまま、飲み会行かないで帰ったらどうだ？」

「それはイヤです」

せつかく会費も払っている。

料理はもうないだろうが、せめて酒ぐらい飲まないと、今日みたいな日はやってられない。

「二次会も行く気なのか？」

「行って何が悪いんですか？」

（私と飲むの嫌なんですか?!）

せつかく少人数で飲めるのだ。

二人で飲むのも好きだが、少人数で、気心知れた相手と飲むのも私にとっては楽しみの一つであり、ストレス解消法でもある。

いくら大島さんだからって、それを私から引き離そうとされたら、断固抵抗したい。

大島さんは強張る私の顔を見て、少しだけ溜め息を逃すと、ポンと私の背中を叩いた。

「あんまり飲み過ぎるなよ」

いたわりの言葉に、安堵する。

「顔色、そんなにいいようには、見えないんだから」

注意した大島さんの、その最後のぼやきを、私はうっかり聞き逃した。

確かに今日は夢見が悪かった。

もしかしたら、あまりしっかり寝ていなかったのかもかもしれない。

ミスも普段より多かったのは、しっかり大島さんに確認されている。

つまり、いつもの私の体調ではなかったのだ。

それを自覚しても良かったのに、私は自覚出来なかった。

もしかすると、久しぶりに見た悪夢を忘れなくて、自棄酒したかったのかもかもしれない。

兎に角。

この日の酒は、私の体調にバッチリ合わなかったことだけは、確かだ。

14 8月12日 (2)

先輩責任というものがあるなら、間違いなくこの現状は自分の責任だった、と深く海は内省していた。

目前には泥酔状態の桃。

「大島さん、桃のこと任せて大丈夫ですかね？」

と尋ねてきたのは、花川だ。

その後ろには白土、先輩の浅間、西脇がいる。

有志一堂で飲んだ二次会はつつがなく終了した。始終穏やかなムードで終わったのだが、1人、気がつけばベロベロどころか、でろんでろんに出来上がった桃がいた。

気をつけると言ったのに、気がついたら、ほろ酔いもなく、その状態だ。

時刻は既に10時を回っていたが、やっとエンジンのかかってきた連中は・・・というより、白土と西脇がハイテンションで、三次会に繰り出す話になっていた。

流石に明日の朝が早い海はもう帰ることにしたはいいが、桃はこのままにしておくわけにはいかない。

「わらしも、さんじかい、いくうー!!!」

ふらふらと歩くのも覚束ない桃の腕を掴んで、海は花川たちに「大丈夫だ。きちんと家まで送り届ける」と宣言した。

「お持ち帰りしないでくださいよ？」

花川がニヤニヤしつつそう言った。

「するか、馬鹿」

(そんなことしてもしょうもないだろうが)

記憶もはつきりしない泥酔女をどうにかしたいなんて、思いもしない。

「じゃあ、盆明けな」

「はい、大島さん、お疲れさまでした」

「大島、またな」

適当に挨拶を交わして、桃の腕を引っ張りながら、駅まで向かう。駅までの距離は10分。15分後に電車が来るので、丁度いいだろう。

「大島さん、大島さん。」

「わらし、のみたりましえん」

へらへらと笑う桃の目は焦点も怪しい。

海はため息をつきつつ、

「向こうについたら、蕎麦屋行こうな」と言った。

「本当？ えへへ。うれしいー！」

はしゃぐ桃に罪悪感を覚える。

当然ながら嘘だからだ。

「大島さん、地震。地震。地面ぐらぐらー！」

「揺れてるのはお前だけだ」

「しょうなんでしゅか？！」

「はふうー！！」

とてとて、と小走りになる桃の腕を決して離さず、海は駅に誘導する。

何とか駅にたどり着くと、丁度ホームに電車が入るといふアナウンスが流れてくる。

「あー、のりおくれましー！」

（何だ、その日本語！）

色々突っ込みたいことはあるのだが、今の桃に何を言っても仕方ないことも分かっていたので、兎に角、電車に乗り遅れないことだけに専念する。

階段の上り下りにはヒヤヒヤしたが、なんとか下り電車のホームにたどり着き、無事電車に乗りこんだ。

「がたん、ごとんー。がたん、ごとんー」

「酒田、静かに乗れ」

「あいー」

幸い、人はそれ程多くは乗っていなかったが、それでも泥酔でこ機嫌な桃は悪目立ちする。

「お嬢ちゃん、ご機嫌だね！」

と、ほろ酔いの中年男性に話しかけられて、

「はいー！」

と嬉しそうに手を上げたときは、その頭を思いっきり小突いていた。

「痛い！ 大島さん、いたいー！」

「静かに乗れ！」

「大島さん、だめれすよ、そこは！」

いたいならそこにいろ！っていわないとおー！！」

どこの親父だそれは！と頭を抱えなくなった。そんな海の代わり

に、先程話しかけてきた中年男性が笑っていたが、それは無視する。下手に絡まれるのも困るからだ。

幸い、それ以上中年男性は絡んでくることもなく、下車駅に到着した。

「おじさんバイバーイー！」

ブンブン、と手を振る桃を引つ張ってホームに降りる。

今まで、何度も桃と飲んだが、こんな桃は初めてだ。

そう言えば、今日は朝から様子がおかしかった。顔色もあまり良くなく、ミスも多かった。

「体調悪かったのか？」

そう問うと、桃はへらつと笑ってから、

「ぜんぜん！」

と否定する。

「だけど、こんなに酔うことなんて、今までなかっただろう？」

「そんなことないですよ。結構ありましたよー？」

笑いながら桃は言う。

「あー、でも大島さんとは初めてかも？」

「誰と飲んだらそうなるんだよ」

毎回、こんな泥酔女、介抱するのは大変だろう。

花川が若しくは女友達あたりだろうと思ってそう問い掛けたが、それは余りにも油断した考えだった。

「もとかれー」

「．．．」

一瞬、カレーかと思ったが、そんな訳ではないことはすぐ分かる。
元彼。

桃からその言葉を聞いたのは、今年になって初めてだった。
去年までは、彼氏がいると公言していた桃だったが、今年になつて、そう言わなくなった。

白土に一度、「最近彼氏とどうよ？」なんて下品に聴かれた折、笑いながら、「もう存在しません」と笑いながらキツパリ言い張ったのは、春の飲み会の時だ。

だから桃が今、フリーなことは知っていたし、そのせいか、飲みに誘うことも気安くなった。

別に下心があつたわけではない、と言つても惚れてしまった今では何とも嘘くさいが、当時は本当に、飲みに行くのが気楽で、楽しかったのだ。

まあ、当時なんて言つてもつい3、4カ月前のことで、好きだの何だのと言つには、時間も何もかも足りない気がした。

だから、お互いの今はよく知つていても、過去は何も知らない、と言つたことを、桃のその発言は今更ながらに海に叩きつけた。

(元彼ねえ．．．)

普通の桃なら絶対そんなこと言わなかつた筈だ。桃はどこかふわふわした足取りで定期を改札でタッチすると、ふふふ、と笑つた。

「ご機嫌な私が可愛いから、いつも酔えつて．．．」

まだ元彼の話なのか。

いい加減、聞きたくなくて眉間に皺を寄せてしまふ。何が悲しくて、好きな女の元彼の話なんか聞かなくてはならないのか。

「こつして手を繋いで、頬擦りする私が可愛い、って」

「酒田、いい加減にしろ」

海の手を握って自分の方に持って行こうとしたその手を乱暴に振り払う。

「俺はお前の元彼じゃない」

キツパリそう告げる。

泣くだろうか？ と思ったが、桃の顔は思いもよらない表情を形づくる。

ニツコリ、と華やかに笑ったのだ。

「酒田……?」

「ああ、はじゆかしい」

「は?」

「はじゆかしい」

(恥ずかしい?)

訳も分からず戸惑えば、桃はニヤニヤと笑う。何が楽しいのか。否、どう見ても楽しい笑いではなかった。

どこか卑屈で、誰かをあざ笑うかのような、品のない笑みは、桃

に酷く不似合いで、海は戸惑う。

「ごめんなさい・・・」

突然、桃が自分の目元を隠すかのように、自分の腕を押し付けた。そして口元しか見えないその顔で、再度言う。

「ごめんなさい」

「お前、酔ってるんだっとな」

それで海は桃が泥酔状態だったことを、改めて実感した。

酔った桃は感情のふれ幅が極端なのだろう。

その証拠に、先程まで笑っていたのに、今、ごめんなさいと謝る桃は、どうやら泣いている様にも思えた。

「酒田？」

「・・・ごめんなさい。」

「こんな私でごめんなさい・・・」

「おい、酒田！」

「酔ってるのが可愛いなんて嘘信じて、馬鹿馬鹿しい。恥ずかしい。嫌になる」

ゴシゴシと目元を乱暴に擦る桃の腕を海が掴む。

桃は掴まれた腕を顔から外され、その潤んだ瞳で海を見ていた。目から涙がポロリとこぼれる。

「・・・っ」

好きな女がそんな風に泣く姿を初めて見て、海は息を飲む。

桃は口元をぐっとへの字に結ぶと、涙をこらえて、海を見つめた。

「酒田、大丈夫、か？」

戸惑いつつもそう問い掛けた瞬間、桃が海の胸に飛び込んできた。

「酒田！？」

心臓が一気に跳ね上がった。思考回路が一瞬、断線した。何も考えられなくなる。

しかし、それは一瞬のことで、次の瞬間、海は言葉にならない声をあげた。

「う。吐きそう・・・」

と桃が咳いたのは、吐く前ではなく、吐いた後だった。

どこに？

言っまでもなく、海の胸に満遍なく。

15 8月12日 (3)

飲み会の日は遅くなるとは言っている、大体終電が過ぎる時間位までは我が家は何も言われない。

流石に朝帰りは怒られるが、事前に泊まりだと言っておけば大丈夫。

但し、本日はそんなことは言っていなかったので、パチパチと頬を無遠慮に叩かれた時、私はそこがどこだか分からなかった。

(私の家?)

「起きろ！ 頼むから起きてくれ！」

「ふぁい？」

まだ頭がガンガンする。酷く酒の匂いが口内にたまっていた。目を開けて飛び込んだのは、大島さんの顔。

「あれ？ 大島さん？」

飲み会の場所で寝てしまったのだろうか？

それにしても、大島さんの服が違う。いつもはワイシャツなのに、今はカジュアルなTシャツだ。ズボンもチノパンではなくジーンズで、いつもより随分若く見えた。

部屋の方も居酒屋にしては、真上の蛍光灯が妙に民家っぽい。

「わたしのいえ？」

「そんなわけあるか」

ため息を吐いた大島さんは、酷く疲れきった顔で、何だかよく分からなかった。

私が寝ていたところも、畳の座布団の上だ。我が家はベッドだし、二次会の居酒屋は座敷ではなかったはずだ。

「んー？」

首を傾げる私に大島さんは口早に説明する。

「変な意図はないぞ。お前のゲロくらった状態でタクシーなんて乗れないから着替えに立ち寄っただけだ。今からタクシー呼んだから、お前んち送ってく」

「変な系？」

（それってどんな系？）

頭がさっぱり働かないが、我が家に送っていただけらしい。

腕時計を確認すると、11時半を過ぎていた。

良かった。まだ、午前様ではない。

「はい。急いで帰りましょー！ サチ、帰ろー！」

「花川はもう帰ってる」

深い、深い大島さんの溜め息に、私はニコニコしながら、その眉間を強く押す。

「わたしだけ、おいてけぼりー。っりぼりー。ぼりぼりー」

「最後、こじつけだろうが」

呆れつつも大島さんが起こしてくれたので、私はよろめく足で立ち上がる。

「生まれたての小鹿ー！！」

渾身のギャグは完璧にスルーされた。

大島さんは窓の外を確認して、「来たぞ」と言つと、私の腕を引いた。

何だか誰かのお部屋みたい。

玄関までつれてかれて、靴が履けないと駄々をこねたら、大島さんが文句を言いながら履かせてくれた。

そのまま外にでると大島さんが鍵をかける。

「鍵をかけてどうするんですか？」

「かけないとまずいだらう」

「まるで大島さん家みたいですね」

「俺の家だからな」

そう断定されて、へー、と返した。頭にあまり入ってこない。

そのままタクシーに乗せられる。

「お前んちどこだ？」

と聞かれたので番地まで告げるとタクシーはスムーズに走り出した。

「大島さん、大島さん」

「ん？」

「大好きです」

「はあ!？」

何だか無性に気分がいい。眠る前までは、酷く悲しい気持ちだった気がしたのだが、起きた瞬間、目の前に大島さんがいて、とても嬉しかったのだ。

しかも大島さんは、裸でも何でもなくて、ただ心配そうに私を見てくれて。

あの部屋がどこかいまいち分からなかったが、少なくとも酔っ払った私に何か大島さんがしようとしたわけではないことは、分かった。

その、大島さんの、大島さんらしい誠実さが、とても嬉しい。

「ちょ、お前・・・」

動揺しているらしい大島さんに、私はコテンと頭を寄せて、もう一度、囁く。

「大島さん、大好き」

「あのなあ、そういうのは酔ってないときに言ってくれ」「ぼやくようにそう呟かれて、私は笑ってしまっ。

無理。

そんなの絶対無理。

「酔ってなきや、言えませんよお。」

私みたいなみっともない、恥ずかしい女が、どの面さげて言えますか?」

他に女がいる男と、それを分からず3年近くつき合っていて、バラされたのは、サークル仲間がみんないるところで。相手はずっと付き合っていて。私はここ数年のただのセフレ？

散々好きになって、ただ、ひたすら向けた愛情が、実は滑稽なものだと分かった瞬間、怒りより憎しみより、こみ上げたのは、恥ずかしさ、だった。

遊ばれていることも分からず、ひたすら一途に一人の男を恋い慕っていたという事実。

好きになることの、あまりにも盲目で、愚かなことを自覚する恥ずかしさ。

(あんな想いは二度としたくない)

誰かを好きになることが、好きで居続けたことが、あんなにも、恥ずかしいことだなんて、思いもしなかった。

「酒田、さつきも言ってたけど、何が恥ずかしいんだ？」
大島さんが私の頭に手を回すと、ゆっくりと私の頭を撫でながら尋ねてくる。

髪を梳かれる心地よい感触に、私は猫のようにつつと目を見ながら、
「好きだっというのは、自己中で、思い込みで、自分勝手に、周りが見えないから」

と返した。

言ってみて、自分でもしっくりくる。

好きだって、どんなに思っても、それは自分勝手な、自分だけの感情で、相手のことなんて、結局、何にも分からないのだ。

勝手に相手に期待して、勝手に自惚れて、勝手に失望して。

「人を好きになることって、本当に恥ずかしい」

「そうか？」

「だって、どんなに付き合ってたって、寝たって、相手の気持ちが出来に分かることなんてないもの。

それなのに相手も自分のことが好きなんだとか思っ、馬鹿みたいで恥ずかしい」

「なるほど。そういう意味の恥ずかしい、か」

コツンと頭を寄せられた。

何だか恋人同士みたいに気がついたら、ぴったり大島さんとくっついている。

「ここ、タクシーの中だよね？」

そう思ったけれど、酔いが満遍なく回った身体は、それ以上の思考は全てシャットアウトしているらしい。

「確かに恥ずかしい、な」

大島さんの思わぬ同意に私はビックリした。

だって、私が恥ずかしいのは、思い上がっていた自分のことで、大島さんのことじゃない。

それでも納得されて、それが意外過ぎて何も言えない。

「それでも酒田は俺が好きなんだ？」

意地悪く確認されて、私はクスクス笑ってしまう。

「そうですよ。大好きなんです」

自分をもつ見失いたくないのに、あんなに恥ずかしい想いはしたくないのに、それでも、好きで好きで仕方ない。

一緒にいられる時間も、何気ない仕草も、態度も、声も、言動も、みんな、みんな、大好きだ。

「はあ．．．。酔っ払い」

グリグリと頭をくつつけられて、またぼやかれた。

「とりあえず、俺の恥ずかしいところは実家から帰ってきたら教える」

一応、お前より年上な分、まだ辛うじで俺の方が自制がきいてるから．．．

というボヤキは、耳元で囁かれて、タクシーが家の前についたとき、離れた身体がとても名残惜しかった。

「盆明けには帰ってくるから、そうしたら電話する」

「ん？ はあい」

何で電話？と思いつつ、折り返し戻るタクシーを見送って家の中

に入る。

既に両親は寝ている。

隣の部屋の弟は分らないが、そのまま自分の部屋に入り、化粧を落とすのも忘れて、ベッドに突っ伏した。

「おやすみなさあい」

と誰にもなく告げて、私は気持ち良く夢の中にダイブした。

16 8月12日 (4)

桃を降ろした後のタクシーで、海は何とも言えない気持ちになっていた。

(戻る俺のことも考えて告白しろよ!)

そう思えども、頬が自然と緩んでくるから困る。

「好きだっていうのは、自己中で、思い込みで、自分勝手に周りが見えない」

そう桃に言われた時、千夏のことを思い出した。

1人で入れ込んで、彼女のことを好きだ何だと言わないまでも、態度には薄々示していただろう自分のことを。

あの時、千夏に「結婚する」と言われたとき、確かに海もまた、《恥ずかしい》と感じた。

(だけど、俺は付き合ってたから言えることで、アイツはつきあってたんじゃないのか?)

それでも自分を恥じる程、あんなに辛い顔をする程、彼女に何があつたのだろう。

その過去に想いを馳せてはみたが、桃本人から言わない限り、海も何も聞かない。聞くべきではないだろうし、一々昔の男のことを聞く気にもなれなかった。

ぼんやりと色々考えていたら、あつという間に自宅についたので「すいませんでした、タクシーの中で」

と言って、お金を渡す。

運転手はニコニコしながら、

「何も聞いてませんか」

と言ったが、その顔はどうみても聞いている感じだった。

あの場で自分も返す刀で「好きだ」と告白しなくて本当に良かったと思う。

いや、本当は桃をつれて帰って自分の部屋に籠もりたいくらいの激情にさらわれかけたが、酔っている桃に対してそんなことはフェアではないと思ったのだ。

あれほど酔わなければ、自分の気持ちを吐露出来なかった桃。

しかし、言ってもらわなかったら、海はきつと、ずっと自分の気持ちは告げられなかっただろう。

部屋に戻ると、居間には二枚の座布団。先程まで桃が寝ていた場所だ。

無防備に、くてり、と寝ている姿はとても可愛らしかった。

「ああ、よしっ！」

ウロウロと家の中を一人で歩く。

明日の朝が早いが、やることはやらなくては始まらないので、軽くシャワーを浴びると、桃を送る前に電源を入れて廻しといった洗濯機から、洗濯物を取り出す。

流石に帰省中、ゲロ塗れの服を放置するよりは、階下の住人の不満の方がマシに思えたから、洗濯物を廻しておいたのだ。

まあ、殆どが独身且つ、階下の住人は男性のアパートだ。しかも、階下の電気はまだ煌々としていたので、安眠妨害にはならないだろう、と自分勝手に解釈した。

(いつ、電話するかな)

洗濯物を干しながら、桃のことを思う。

彼女は今日のことを夢と忘れるだろうか？

あそこまで泥酔した時、どうなるのかは分からなかったが、私、どんなに酔ってペロペロになっても、記憶飛ばないですねー」と飲みの席で話していたから、きっと忘れはしない気がした。

「忘れるなよ」

願うようにそう呟いた。

きちんと伝えなければ、きっと桃のことだ。笑いながらなかったことにしてしまいかねなかった。

「大島さん、大島さん。大好き」

可愛らしくそう言われた声が、頭の中でリフレインする。

「あー、俺、今日寝れるか？」

時計を見れば、時刻は既に1時半。明日は5時始発の電車に乗らなければならず、しかも帰省の準備もまだ、だ。

(いや、電車で寝るか)

そう割り切って、海は帰省の準備に取りかかる。

とりあえず、帰ってきたら絶対桃に電話しようと、誓いながら。

訳がわからなかった。

頭が酷く混乱した。

どうして。

何で。

問いかげようにも、相手に私の声が届く筈もなく。

どうして、

どうして彼の部屋に、女が入っていったのでしょうか？

どうして？

あなたが愛してくれているのは、

私、でしょう？

17 8月20日

お盆初日、お墓参りで願ったことは、大島さんが全部忘れていまずように！ということだった。

そもそも、忘れていきますように、って御先祖様に願掛けすること自体間違っていることは分かっていたけれど、神様、仏様、何でもいから、何とかしてほしかった。

（何で酔っ払った私！

何でゲロった私！

何で告白した私いいー！！）

全部、ええ、悲しいくらいに全部、覚えおりました。

泥酔したことも、大島さんにゲロったことも、部屋に連れて行ってもらって、その後、タクシーで送ってもらったことも。

しかも、そのタクシーの中で告白したことは、もう！ 何というか、抹殺したいくらい忘れ去りたかった。

「これじゃあ、ちとせちゃんのこと言えないー！」

お持ち帰りされなかったが、想いを告げている時点で、痛い。私、痛すぎる。

（大島さん、どう思っただろう！）

「あーー！！ もう、早く忘れたいー！」

叫んだ瞬間、ドン、と部屋の壁を蹴る音。

隣の弟の部屋からだ。

「ねーちゃん、うるせー!!
毎晩、何叫んでんだ!!」

このお盆休み、毎日寝る前に、12日のことで悶えるのが私の日課になっていた。

時計を見ると既に12時を回っている。

今日は20日になったので、寝ても笑っても、泣いても叫んでも、休みは残り、21日までしかない。

(どんな顔して会えばいい?)

「お盆前は酔ってすいませんでした」と謝って、酔いの席のことだから、と誤魔化すのが一番いい気がする。

そうすれば、大島さんが私のことを何とも思っていない場合、大島さんも無駄に断る労力を使わなくていいだろう。

(でも、もし、大島さんも、わ、わわ、私のこと……!!!!)

駄目だ。無理。

例え仮定であっても、そんなことを想定出来なかった。

(あー。でも送ってもらったときのタクシーの中で、いっぱい頭、撫でて貰った気がする……)

凄く甘い声で何か言われた気がするのだが、自分の言ったことは覚えていても、言われたことは忘れていた。

ただ、酷く耳がこそばゆくなるような、気持ちのいい声音だったのは覚えていて……。

「むきやーーーー！！！！！！」

思わず叫んだ瞬間、ドカッと壁を蹴られて、弟に
「動物園に帰れ！！」
と叫ばれた。

この時の私は、まさか本当に動物園に行くなんて、思いもしなかった。

『明日、暇か？』

朝、9時。

夜中まで眠れなかった私は、ゴロゴロとまだ起きずに布団の中にいた。

そんな折、かかってきた電話の相手は大島さんだった。

（何で？ 何で大島さんから電話！？）

動揺しつつも電話にでると、大島さんは落ち着いた声で、電話が遅くなったことを謝罪してくれた。

（というか、何で電話をくださったのか、それ事態、訳わかんないのですが！）

内心、大混乱の一言で、殆ど大島さんの言葉が素通りしている状態だった。

それでも辛うじて聞き取った実家で引き留められたとか、車がど

大島さんなら有り得る。

『まあ、いい。明日10時に、車で迎えに行くから』

「はあ．．．」

『じゃあ、明日』

ブツ、と電話が切れたが、暫く私は携帯を見つめていた。

「ねーちゃん、ねーちゃん」

ノックもせずに弟がドアを開けてくる。

「え？ あー．．．」

(大島さんと明日、会うってこと???)

頭をかきつつ、呆然と口をあけながら弟を見ると、弟は「アホ面
」と苦笑しながら、チケットを一枚、私に突きつけてくる。

「何、これ？」

「お母さんが、新聞屋から貰ったんだって。動物園の入園券だつて
さ」

「入園券？」

「その券で5人まで入れるって。」

お母さんがねーちゃんに渡してこいって言った

お前は行かないの？と弟に尋ねようとして止めた。

彼女もいない弟に、そんなことを言うのは酷すぎる。

「あ、痛っ！！」

「うるせー、ほっとけ!!!」

思っただけなのに、人の心情読みまくって、弟が私の頭を殴った。恨みがましく睨んだが、全く応えていない弟は、

「まあ、ねーちゃんも行くとしても女友達なんだろうーけどー」と減らず口を叩いて、部屋を出て行った。

「失礼なっ!!! 私だって一緒に行く人位います!!!」

「へー? どこにいるんだか?」

階段を降りていく弟の声に、私はカチンとしながら、

「明日、行ってくるもんねー!!!」
と叫んだ。

あれ? 行き先、勝手に決めていいんだっけ???

18 8月21日

常々、予想外のことをする奴だと桃を評価していたが、その評価が正しかったことを今更ながら海は実感していた。

「動物園？」

迎えに行つて車に乗せるなり、桃が提案したことがソレだ。

(今日の気温、天気予報で見てきたのか?)

本日も晴天なり。

気温、30 越えは確実だというのに、何を血迷つて炎天下の動物園に行く!?

声には出さなくとも態度に出たのだろう。

「す、すいません。別に無理つて訳ではなくて……」

「いや、酒田が行きたいならいいよ」

「せっかくのタダ券なんで!」

タダ券に弱いらしい彼女をチラリと横目で確認すると、今日は会社では見ることのないラフな格好だ。

海はあまり女の服装は分からないのだが、七分丈の薄手のパンツは確かカプリパンツと言われるものだよな、とぼんやり思う。

それに併せてタンクトップとTシャツを重ね着して、中折れの麦藁帽子を被っているのだが、どう考えてもデート仕様ではない。

動物園仕様だ。

(少しは深読みしろよな)

告白したことを多分覚えているらしいことは、昨日の電話からも今日、家の前で待っていた顔からも直ぐ分かったのだが、それにしてはその先のことをどうも考えてない気がしてならない。

「初めてです、大島さんの車」

「そうだな」

会社の人間をこうして乗せたことはない。休みの時に運動会などの会社行事が発生しても、大抵ビールなどの飲酒が絡んでくるので、車に当然乗れない。元々車通勤もしていないので、会社の人間を乗せる機会がない。

「結構大きいんですね」

ミニバンタイプの車なので、腐っても7人乗りだ。桃が後部座席を確認しながら、「こんな車もいいですね」と感心した。

「お前も運転するの？」

「しますよ？ 私は軽自動車持ってます。車庫に緑色の車あったのを見ました？」

「ああ、アレか」

緑色の車なんてあまり見かけないから、結構な勢いで頭に残っていた。

「色が可愛くて一目惚れだったんです」

うつとりしながら桃が言った。

あの色の車を可愛いとは共感出来ないが、自分の好きなものを語る桃は嫌いではない。

「じゃあ、大事に乗ってるんだ？」

と海が問えば、

「はい！ ワックスかけもしてます！」

桃が元気に返事した。

その様子から本当に愛車を大切にしていることが伺えた。

「じゃあ、その内、酒田の車で出かけてもいいな」

と言いたかったが、我慢する。

そういうのはきちんとしてから言いたいと思ったからだ。

(しかし、いつ言おうか？)

昨日の内に、一応頭の中でシミュレーションはしてみたのだが、動物園は想定外だった。

(.....)

一応、動物園をザッとシミュレーションしてみる。してみたが、家族連れの多い動物園内で告白できるような場所が思い浮かばない。動物園と考えると、まず思い浮かんだ場所は猿山だった。

だが、猿山なんて言語道断だな、と早々に切り捨てた。猿山を背景に告白している自分が酷く間抜けに思えたからだ。

(まあ、今日1日あるし)

動物園から帰る時など、何とかなるだろうと思いつながら、海は動物園へと車を走らせた。

連休最終日だというのに、動物園はなかなかの混雑具合だった。日曜ということ、この炎天下の中にもかかわらず、親子連れが多い。

「動物園なんて久しぶりー！」

「俺も子供の時以来だな」

幼い頃、遠足や親に連れられてきたことしかなかったが、動物園内は大分様変わりしていた。

北海道の動物園が流行ったからだろうか。その動物園を意識したらしい行動観察などをし易くなっている動物の檻の前で、桃がいつも以上にはしゃいでいる。

「大島さん、象！ 象！」

「象だな」

「大島さん、ペンギン、ペンギン！」

「ペンギンだな」

「大島さん、アライグマ、アライグマ！」

「お前に似てるな……」

「何ですと?!」

アライグマたちを目の前に、桃が、キシヤー！と人間らしからぬ奇声をあげたが、それがアライグマそっくりだったので、不覚にも吹き出してしまった。

(参った)

思った以上に、楽しい。

動物園なんて、子供じみた場所だと思っていたのに、隣で桃がはしゃいでいるだけで、楽しいのだから困る。

白土には決して見せられない顔を今自分がしている自覚がある。

「ああ、大島さん!! 猿山!!!!」

一際甲高い声は、猿山を目の前にして発せられた。

一昔前はただのコンクリの山しかなかった猿山は、大幅なリフォームの結果、猿用吊り橋など、とても賑やかな造りになっていた。

「すごい! 大分変わりましたね!」

「そうだな」

海も思わず感心する程の、楽しげなアスレチック施設といった有り体の猿山に、桃が両拳を握りしめて、うずうずしている。

「帰っていいぞ」

「はい?」

いきなりの海 of 言葉に、桃がキョトンと不思議そうな顔をする。

海はニヤリとし、顎で猿山の方を指しながら、

「生まれ故郷だろ、そこ」

と言えば、桃が瞬時に湯沸かし器になった。

「酷い酷い酷い! 私はおさるさんから生まれませーん!」

ムキーと怒る様は猿と変わらないが、可愛いから困る。

「冗談だよ」

「冗談に聞こえなかった！」

ぶーっと膨れ面になった桃の頭をポンポンと軽く叩いて宥めながら、

「ほら、あそこの猿、可愛いぞ」

と話を逸らせば、桃はすぐにそちらを見て、歓声をあげた。

「かーわあいー!!」

桃の視線の先には、1匹の猿が

、せつせと同じ大きさの猿の背中を、毛繕いしていた。

「暑いのに頑張ってるな」

他の猿たちは暑さにやられてグッタリしているのに、その猿だけは甲斐甲斐しい。

「まるで、休み前の俺みたいだな」

その姿に、あの日の自分を思わず重ねた。

自分の胸に吐いた後も、桃は海の部屋のトイレで吐いたのだ。その背中を撫でながら、水を渡して甲斐甲斐しく世話をしたことは、ついこの前のことなのに随分前のことのようにも思えた。

桃にも思い当たる節があったのだろう。

「あ。その、あの日はすいませんでした」

何ともいえない気まずそうな顔に、海は笑ってしまう。

「まあ、たまにはいいんじゃないか？」

「いや、でも」

「俺はお前の本音が聞けて良かったけど」

恋は恥ずかしい。

そう言いながらも、自分のことを好きだと言ってくれたことが、
どんなに嬉しかったか。

桃が過去にどんな恋をして、どんな傷を負ったか海は知らない。
だけど、海の過去だって桃は知らないだろう。

知っているのは、今、お互いのことだけで、
恥ずかしい、と互いに思いながらも、それでも好きになってしまう
感情が愛おしい。

「あ、その、あの時は・・・！」

「なかったことになんかするなよ。」

俺も嬉しかったんだから」

笑いかけ、桃を見つめながらそう言つと、麦藁帽子の下の桃の顔
が、朱に染まる。

「え？ あ？ ええ？」

混乱している桃に、「その続きはここじゃないところで」と背中
を押そうと後ろに手を回した瞬間、

いきなり、王手をかけられた。

「大島さん、私のこと好きなんですか？」

(それは直球すぎだろう！)

全く、恋というものは、ちっとも思い通りにならない。

ここは猿山の前だぞ、とか、

先に仕掛けた自分が悪かったのか、とか、

もう、そういう色んなものは、全部吹き飛んだ。

「お前も俺のこと好きなんだよな？」

自分だけ言質をとらせるつもりは更々ない。

背中に手を回すと、桃の背中はこの暑さだけか分からないが、じつとりと汗ばんでいた。

ぱくぱくと、金魚みたいに口を開け閉めしている。

「酒田」

答えを促せば、桃は身体を固くして、顔を真っ赤にしながら、言う。

「……す、好きです」

「じゃ、お前、俺の彼女だから」

「……………」

もつと上手いこと考えていたはずなのに、出てきた言葉は独占欲丸出しな言葉で、自分はどこの高校生かと思った。

だけど、千夏の時、曖昧にしていたからこそどうしようもなかったから、今回はそうなりたくなかった。

恥ずかしい思いをしたから、次は同じ間違いをしたくなかった。

「ホラ、行くぞ」

「う。は、はい！」

背中をポンと押してそのまま恥ずかしくなって、少し前を歩くとトコトコと後ろをついてきた桃が、そつと海の小指を掴んできた。

「ん？」

振り向くと、桃が不安そうな顔で海を見ている。

「ほ、本当に？ 冗談とか、他に付き合っている人とか、いませんよね？」

「はあ？ いるか、そんなの」

「ほ、本当に？」

「他の女と付き合ってたら、お前と付き合っわけあるか」

自分はそんな不誠実な輩ではない。

無然とした海をじつと見つめた後、桃が小さくへにゃあと笑った。

泣きそうな、でも嬉しそうな笑顔だった。

「ありがとう、大島さん」

何でそこでお礼を言われるか分からなかったが、取りあえず納得してくれたようなので、安心した。

本当は、こんなところで告白するとは思ってもみなかった。

それだけが心残りではあるが、キュツと小指を強く握られて、それだけで満足してしまう自分がある。

「ほら、次行くぞ」

「・・・はい」

桃の指に、掴まれた小指を絡めて強く引くと、桃が嬉しそうに微笑んで、ああ、これで桃が自分の彼女になったんだ、と強く実感した。

19 8月24日

「えー、只今からあー、第1回盆連休前、何があったか報告する会を始めまーす」

パフパフ！って鳴ってもないのに、ラッパの幻聴が聞こえる。

私は乾杯の合図で生ビールをカチンと合わせて、ゴクゴクと飲み込んだ。

「何、その報告会って？」

そう私が訪ねた相手はちとせちゃんだ。

今日は週の半ば、水曜日。

定時退勤推進日でもある今日、ちとせちゃんに招集されたのは、私とサチ。場所は会社近くの大衆居酒屋。

そろそろ蕎麦酒屋のおとーさんの味が恋しくなってきたなと思いつつながら、私はお通しのゴマ和えに箸をつける。

「あー、報告しなくても、大体分かるんだけど」
手を挙げてサチがそう言った。

はい、私もそう思います。

だって目の前のちとせちゃんは、とつてもご機嫌だ。

週初めからご機嫌のちとせちゃんを見て、私やサチが思ったことは、下品で申し訳ないが、

ああ、喰ったな。

ってことだった。

何というか、毒婦的要素、全く皆無のちとせちゃんのだが、そのちとせちゃんに対する浅間さんの態度が、見てるこちらが恥ずかしくなるくらい初々しいのだ。

ちとせちゃんの声が聞こえると、浅間さんの肩がピクリと動く。ちとせちゃんに話しかけると、ほんのり目尻を赤らめる。

ちとせちゃんが横を通り過ぎると、チラリとそちらの方を見る。

あれで気づかない方が無理だろう。

というか、浅間さん、三十路過ぎてその純情さ、どうなのかと思う。

「え？ 報告させてくださいよ！」

お二人には色々お世話になったんですから！」

ちとせちゃんとしては、きちんとお礼をしたいらしい。

こう言うところ、凄く律儀なのに、何故に実力行使？と思わずにはられない。

「私にはお礼言って貰いたいけど、もう一人は棚ぼたしたから、お礼いらないわよー」

「ぶっ。」

サチの言葉に思わず私が吹き出す。

「え！ 桃さん、やっぱりあの日、食べられちゃったんですか!?!」
「食べられてませんっ!?!」

ちとせちゃんが顔を赤らめて私を見てくるが、私は首をブンブンと横に振る。

「私じゃなくて、食べたのはちとせちゃんでしょ！」
やり返すつもりで言ったのに、ちとせちゃんはニッコリ微笑んで、
「はい、美味しくいただきましたよ」と言った。

「この子、怖い!!!」

思わずサチにすがりついたが、サチは我関せずだ。

「あからさまに分かる二人は別にいいのよ。もう大人なんだし、やることやってるし」

「ちょ！ サチさん、少しは私と隼生さんの愛のラブソティーを聞いてください！」

「いらん。聞きたくない！」

「今週の土曜日もデートなんです。」

「夜は隼生さんの部屋にお泊まりで……」

「あーあー。きーこーえなーいー」

サチが耳を押さえてちとせちゃんの言葉を聞かないようにする。
ちとせちゃんは頬を膨らませて、「じゃあ、いいですよ！」と拗ねた。

「こんなに素直で可愛いのに、どうしてあんな実力行使が出来たのか不思議でならない。」

「それとも、素直だから、か？」

「ちとせちゃん……。その、さ」

「はい、なんですか？」

聞いてよいのか不安だったが、敢えて尋ねてみる。

「体から始まつても、平気なの？」

それは捉え方次第では失礼極まりない問いかけだったけれど、どうしても聞きたかった。

ちとせちゃんは、お盆前、私たちを呼び出して私たちに頼み込んだあの時と変わらない素直さで、サラリと言う。

「そこまでして欲しい人だったから、後悔ありません」

(凄いなあ)

素直に感心してしまう。

私なんて過去の失敗を引きずって、今回だって、酔っぱらわなければきつと想いを伝えることも、通じ合うこともなかっただろう。だけど、ちとせちゃんは違うんだと思った。

ちとせちゃんはニコニコしながら、その後、ぼそりと呟く。

「まあ、一度失敗しても、隼生さんに殺されるまで、リベンジしたと思いますけど」

怖っ。だから、怖いって！

私の心の声はサチが拾ってくれる。

「あなた、絶対ストーカーになるよ、それ」

「もう付き合ってるから大丈夫です！」

ニッコリ笑うちとせちゃんは、本当に嬉しそうで、ああ、幸せなんだな、と思った。

この際、肉欲だろうが、恋だろうが、浅間さんにはどっぴりちとせちゃんにハマって貰おう。

「で、もう一人の幸せ者は？　どうなの？」

「ぐっ」

猛追は逃れたつもりでいたのだが、サチは逃してくれなかった。

私は興味津々な二人の視線に俯いて、ビールをちびりと呑んで、舌の乾きを潤してから言う。

「に、日曜日から付き合うことになりました……」

「はあ？！　あんなに休みあったのに、この前の日曜からなの？」
呆れたサチに返す言葉もございません。

「え？　じゃあ、まだ寝てないんですか？」

ちとせちゃんに至っては、もう、何て言うか次元が違う。
私は頬が熱くなるのを感じながら、首を横に振った。

「ちとせ、あんたもこういう初さを見習え」

「サチさん、私、それは母のお腹の中に忘れてきたんです」

二人が何だかんだ言っているのを聞き流しながら、私がビールに再び口を付けた瞬間、携帯から軽やかな着信音。

確認すると大島さんからだった。

というか、どうして二人も確認する？

「早くでなよ」

「ここで出ていいですよ」

二人は私をトイレに行かせてくれるという選択肢はないらしい。

私が渋々、通話ボタンを押すと、

『酒田?』

と大島さんの優しい声が聞こえた。

『あ、今、飲み屋か?』

周りのざわめきが聞こえたらしい。

『はい。サチとちとせちゃんと呑んでます』

と返すと、大島さんが『出遅れたか』とぼやいた。

『いつもの店、誘おうかと思ったんだが』

「あ? えっ!」

いつもの店というのは蕎麦酒屋だろう。行きたい!と思ったが、既に呑んでいる状態だ。

戸惑う私に大島さんは早口で言う。

『今日はいいよ。』

その代わり、土曜日、空いてるか?』

「あ、大丈夫です」

『じゃあ、空けといて。』

また電話する』

それだけ言うと、電話は切れてしまう。

(土曜日かぁ・・・)

二回目のデート、ということになる。

(うわ、どろじょろ)

何だか、凄く、嬉しい。

思わずにやつく頬を抑えた瞬間、我に返った。

サチとちとせちゃんの目がこちらをじーっと見ていたからだ。

「サチさん、わたし、お母さんのお腹にもどって、ちょっと、とってこようかと思えます!」

「いや、ちとせ。あんたの血筋にこのピュアピュアさはないだろう」

しみじみと語り合う二人に、私は顔を赤くしながら、

「人を脅にするな!」
と叫んだ。

20 8月27日

「私、結婚するの」

そう言われた時、海は一瞬、どんな顔をしていいのか分からなかった。

「おめでとう・・・」

それでも声が掠れないように精一杯気をつけて呟いた。

言われた千夏は、酒を飲んでいるのにちっとも落ちない鮮やかな色を付けた唇で、

「ありがとう」

と言いながら、微笑んだ。

華やかに。嬉しそうに。

そして言った。

「誰に祝福されるより、海に祝福されるのが一番嬉しい」

ああ、自分の好きになった女は、残酷だ。

それでも彼女を好きな自分が、とても惨めに思えた。

「おーしまさん、あ、そびま、しょー！」

インターホンを押した後、まるで子供みたいな声が聞こえて、海は苦笑する。

「お前はどこの小学生だ」

そう言いながら玄関をあけると、桃がニコニコしながら立っ

た。

今日はハンチング帽に、膝丈パンツの出で立ちだ。前日も思ったが、こういう少し少年っぽい服装が好きなのだろう。20代半ばにもなって、随分若々しい格好だが、背の小さい桃には似合っていた。

「今日は私の運転ですね」

そう言いながら、チャリチャリと車のキーをつけたキーホルダーを桃が鳴らす。

今回も海が車を出すつもりだったのだが、買いたい物があるらしく桃が運転したいと提案してきた。

拒否する理由もなかったので、迎えに来て貰った。

彼女に迎えに来てもらうという経験がなかったので、何となく落ち着かない気分で玄関に鍵を閉めて部屋をでた。

アパートの駐車場脇に桃の愛車が見える。相変わらずの鮮やかなグリーンに、これに乗るのか、と内心僅かに躊躇ったが、怪しまれない内に助手席に乗り込む。

「ちょっと狭いんですけど」

「いや、軽自動車にしては大きいんじゃないか？」

天井も高いし、思ったよりは乗り心地は悪くない。

「あ、椅子、下げて貰って大丈夫です」

「ああ。」

「？ すまん、どれがレバーだ？」

自分の車と勝手が違う上に、助手席ということも相まって、ドアと席の間を左手で探すが、レバーが見当たらない。

「あ、ちょっと待ってくださいね」

ヨイシヨ、と一声かけて、桃が海の太腿の上に上半身を乗せてくる。

「!」

思わず固まってしまった海などお構いなしで、上半身を押し付けながら、レバーを探している。

少しして、ガコンと音をあげて座席が後退する。

「この辺で大丈夫ですか？」

膝の上で顔を上げられて、海は口を一字に結んで、黙っているしかない。

「あ」

海の顔を確認して今更気づいたのだろう。

カアツ、と一気に桃の顔が赤面して、そのまま勢いよく桃が自分の座席に戻る。

「今更か」

出来れば上に乗る前に気づいて欲しかったが、もう遅い。

桃は顔を赤くしながら、

「す、す、すいません。」

いつも女友達しか乗せてないから

と理由を述べた。

その理由は悪くない理由だが、それなら彼氏がいた時は、自分の車に乗せなかったのだらうかと、余計な疑問が浮かんできた。

(いつもは男の車だったのか?)

それはそれで面白くない。

「俺の車でもいいんだぞ？」

と再度提案したが、桃は首を横に振った。

「大きいから、帰りに下ろしたりするの大変ですから」

そう言えば、桃が何を買いたいのか聞くのを忘れていた。

「何を買っただ？」

と言うかどこに行くんだ？

問いかけると、まだ顔を赤くしていた桃が、恥ずかしそうに言う。

「その……テレビを……」

「テレビ？」

随分大きな買い物だな、と思った時、桃が続けて言う。

「私の部屋、アナログテレビのままなんです」

「……………」

もう、1ヶ月程、地デジ化して経っただが？

「すみません」

恐縮した様子ながらも、桃は嬉しそうに家電量販店に車を停めた。

「私、家電あまり詳しくないから、大島さんに一緒に選んで貰おうと思って」

頼られるのは嫌な気がしないので、海は「気にするな」と返す。

「別にどこに行くとか決めてなかったしな」

(昼間から一緒にいられるだけで十分)

砂を吐きそうな甘い考えは脳内に納めて、桃の部屋のテレビを選びに行く。

「予算は？」

「そんなに大きくなくて、5万前後で欲しいんです」

「海外メーカーでもいいのか？」

「いいです。どうせ大して見ないので」

だったら必要ない気もするのだが、その海の考えを読んだのか、桃が言う。

「意外に朝が不便だったんです」

「ああ、なるほど」

朝のニュース番組は情報収集だけでなく、あの左端の時間が、なかなかどうして結構重要だ。

海も眠い朝などは、時計よりもテレビの声を気にすることが多いので、桃の言い分にすっかり納得した。

店員を呼んで、安価なもので映りのいいものを見繕って貰うと、思った以上に早くテレビは決まる。

「大島さん、ありがとうございます」

「いや、殆ど決まってたし」

「だけど、私一人だと、店員さんがうるさくて・・・」

確かに今も、カードを作らないかとか、余計な勧誘が間に入った。どうやら桃はそう言うものが苦手らしい。

「断ることは出きるんですけど、話が長いから疲れちゃって」

「聞く前断ればいいだろうが」

「気がついたら、話が始まってるんです」

確かに桃は見た目、押しに弱そうに見えるので、店員も強引になるのかもしれない。

「まあ、そういう時は今度から付き合ってやるから」

「本当ですか？」

嬉しそうな顔に、こちらまで頬が緩む。

先の、いつになるか分からない約束も、確定事項として締結できる間柄なのが、どこかこそばゆく、そして嬉しかった。

(俺、今、馬鹿面だろうな)

そうは分かっているても、出来たばかりの彼女を前に、仏頂面で見られるわけでもなく。

さあ、会計しにレジに行こうか、と桃の背中を押した時、思いもかけない声が出た。

「海？」

前から聞こえてきた声に視線を移すと、千夏が立っていた。

「あら、この前の子」

千夏は桃を確認すると、もう一度、不思議そうな顔で海を見る。

（何でそんな顔するんだ？）

普通なら、からかうような表情を見せてもいいのに、千夏の顔に表れたのは、困惑だ。

困惑された海の方が、逆に戸惑う。

「同じ部署の後輩じゃなかったの？」

「後輩だけど、彼女だから」

桃の背中に手を回したまま、そう告げる。

以前、千夏が海に結婚を告げたあの時の逆パターンみたいだ、と自分でも思った。

言われた千夏が、一瞬、何を言われたか分からない顔をして、それから口角だけをクイ、とあげて、

「そう、おめでとう」

と言ったからだ。

意趣返しをするつもりは更々なかったが、思わず口から出たのはあの時言われた言葉。

「ありがとう。千夏にそう言われるのも悪くないな」

(ああ、これで切られる)

プツリ。

音を立てて、漸く最後のしがらみのようなものが切れた気がした。

好きだった女。

他の男と結婚した女。

それらが海に与えた影響は、大きい。それこそ、桃を意識するま
でずっと、他に好きな女を見つけられなかった程に。

「じゃあ、俺たち、会計があるから」

「そう。じゃあ、またね」

それは社交辞令か。

それとも本当に「またね」なのか。

海は問い返すことはせずに、千夏の横を通り過ぎた。

「大島さん・・・」

不安そうに桃が海を呼んだ。

「何だ？」

「いいんですか？」

「何が？」

「私が彼女だなんて言って」

まるで自分が二号さんみたいな言い方だった。

千夏とは何も無いのに、どうして桃が引け目を感じる必要がある

のか。

海は苦笑しながら、桃の頭にポンポンと手を置く。

「ただの同期に何遠慮してんだよ」

「.....」

桃はじつと海を見ていたが、やがてふんわりと小さく笑う。

それはひっそりと咲く道端の花のような笑みで。

海はただ、桃が笑ったというその事実だけをもってして、安心してしまった。

その笑みの意味も分からずに。

あの人に、女が笑いかけていた。

アノ女八、何？

私は頭をかきむしる。

彼が優しい言葉をかけるのは、私だけじゃないの？

彼の言葉に、どれ程、私が救われたことか。

彼がいるだけで、どれだけ、私の毎日が鮮やかになったことか。

ああ、なのに。

今、彼の側には《女》がいる。

卑しい、浅ましい、穢らわしい、女。

「やめて、返して!!!!」

彼はずっと私の、私だけのものだったのに――!!

私は頭をかきむしる。

もう気が狂いそう。

私の、私たちだけの空間に、余計な物がある。

それだけで、おかしくなる。

オカシクナル。

オカシクナル――!!

21 8月31日

どっしりよづ。

どっしりよづ。

「いらつしやい」

「お久しぶりです」

久しぶりに、馴染みの蕎麦酒屋に顔を出す。

大島さんの後ろから、ピヨコリと顔を出すと、

「今日はお二人で」

とおとーさんが嬉しそうに笑ってくれた。

いつも通り、おとーさんの前であるカウンターに陣取る。目の前には相変わらず所狭しと、大皿料理がカウンター上を彩っていた。

「あ、おとーさん、南瓜！ これちよーだい！」

お酒の前に私が指さしたのは、南瓜のディップ。

洋風とは程遠い場所なのに、このディップは南瓜の季節の定番だ。生クリームが入っていると、何度か作り方を聞いたのだが、やはりここに来て食べるのが一番美味しいので、家では一度しか作っていない。

おとーさんがニコニコしながら、皿にディップとクラッカーを盛り合わせてくれる。

今日は大島さんはビールで、私は梅酒のロックから始める。
必ずビールがお約束って訳じゃなく、その時、飲みたいと思える
お酒を最初に選べる。

実はそれってなかなか重要で、最初から日本酒なんか選んでも、
大島さんは気にしない。

大島さん自身も、飲みたいお酒を気兼ねなく頼む。

そういうのが出来るようになっていたから、この飲み相手は、本
当に手放し難くなっていた。

それが告白とか、次の段階に進むことを躊躇わせる原因の一つに
なっただけのだけど、付き合い始めた今では手放さなくていいこ
とが、とても嬉しい。

(こうして一緒に飲めることが、凄く嬉しいんですよ?)

梅酒に口をつけながら、大島さんを見ると、大島さんがふっと小
さく笑う。

「ご機嫌だな」

「ご機嫌ですよ?」

だって、貴方とお酒を一緒に飲んでいる。

それが、どれだけ居心地いいことか。

それが、どれだけ私にとって掛け替えないことか。

きっと大島さんにも、他の人にも、分かって貰えないだろうけど。

そう思っていたら、思わぬところから、ドカン、と来た。

「はい、これ、食べてみて」
そろそろ食事も終えて、後は一杯位飲んで、お暇しようかと思っ
た時、おとーさんが私の前に出してきたのは、赤い色した綺麗なゼ
リー。

頼んでなくてもたまにおとーさんは、その日のオススメを出して
くれる。

だけど、そんなデザートのような甘い物が出たのは初めてで、私
はポカンとしておとーさんを見上げる。

「トマトで作ったゼリー。」

今日の貴女たちにピッタリでしょ?」

おとーさんはお客さんを「貴方」って優しく呼ぶ。見た目、つる
つる頭の可愛らしいお爺ちゃんなのに、その言葉はいつも優しく
綺麗だ。

今もニコニコしながら、私と大島さんを見てる。

先に顔に表情が表れたのは、大島さんだ。

「あ、分かりますか?」

照れ臭そうに大島さんが言う。

「幸せそうだからねえ」

おとーさんが笑いながら返す。

「え? え? え?」

戸惑う私におとーさんは、もう一度、優しい声で言う。

「お祝い。仲良くね」

「！」

それだけ言うと、おとーさんは他のお客さんのところに行ってしまった。

「ええー！」

取り残された私は、大島さんの顔を見てしまう。

大島さんも苦笑いしながら、

「そんなに俺、デレデレだったか？」

なんて聞いてくるから、私も慌てて自分の顔を抑えた。

(そんなに分かりやすい?!)

いつもと同じ様に二人で来たはずなのに。

「まあ、その内、嫌でも気づくだろうから、こうして祝って貰えて良かったんじゃないか？」

そう言いながら、大島さんはゼリーをすくって口に入れた。

「お、美味い」

「あ、じゃあ、私も！」

美味しいと言われたら、色気より食い気です。

一口、スプーンに掬って口に入れると、爽やかな甘味が口の中に広がって、思わずジタバタしたくなった。

「トマトなのに、あまーいー!!」

(何これ！ 何、これ!?)

「おとーさん、凄い美味しいです！」
別のお客さんと話しているにも関わらず、そう話しかけると、おとーさんは嬉しそうに笑ってくれた。

私はニマニマしながら、トマトのゼリーを完食する。

「うっうっ、幸せ過ぎるー！」

はぐはぐとトマトのゼリーを食べていたら、大島さんがニヤニヤしながら私に聞く。

「それはどういう意味で幸せなんだ？」

「へ？」

（どういう意味？）

反芻して、それから漸く気付いた。

「っ……」

そんなこと言えますか！って。

赤くなつて何も言えない私を見ながら、大島さんは小さく笑って肩をすくめた。

「トマトゼリーが美味しいから幸せなんだよな？」
駄目押しでそう言ってくる。

確かにそれもある。

だけど、それだけじゃないことも確かだ。

私は「うー」と口を尖らせて、それから観念して呟いた。

「それだけじゃないですよーだ」

大島さんは今度は声を出して笑って、「上等」とご褒美みたいに私の頭を撫でてくれた。

どうしよう。

どうしよう。

こんな風に、嬉しくなる恋は初めてで、返ってくる優しさも初めてで。

(これ以上、好きになっても大丈夫?)

頭を撫でられながら、幸せを噛みしめながら、一瞬、過ぎったのは、大島さんの同期の女の人。
結婚してるという人。

多分、大島さんが好きだった人。

何となくだけど、そうなんだろうな、と思った。

(大島さん、これ以上、好きになっても平気?)

大島さん、大島さんの中で、私は一番、好きな人?

あの人が結婚してるから、私ってわけじゃ、

ないよね？

そんなこと、怖くて聞けない。

私に向けられている感情が、もし偽物だったら、どうしよう。
もし、そうだったら、と考えることさえ怖くて。

好きな人と付き合って、初めて気付いた。
私の心は、私が思っている以上に、傷ついて、臆病になっている
ってことに。

22 9月1日

「それだけじゃないですよーだ」

拗ねたように口を尖らせた桃は、文句なく可愛かった。

「思い出し笑い、やー、らし！」

ゴンッとファイルで頭を叩かれて、海は顔をしかめて、ファイルの方を仰ぎ見た。

ファイルを持っていたのは白土で、ニヤニヤしながら、海を見ている。

「何だよ」

「ん、ちよつと一服行かない？」

時計を見れば、間もなく11時。

丁度作業も切りがいいところだったので、それに乗って喫煙室に向かうと、浅間がコーヒーを飲みながら一服していた。

「うわ、この二人に挟まれたらマジ辛い」

入るなり呻いたのは白土だ。

海自体は浅間と極々普通の先輩後輩の関係だが、白土はそれよりも仲がいい。というより、一方的に白土が浅間に懐いている感じで、浅間も特に嫌がっている素振りはなく、同期の海を除けば、この部署で白土が一番仲が良いのは浅間だ。

今も白土の不躰な言葉に対して、さして不快な顔もせず、浅間

は苦笑だけで返す。

「ちょっと、二人とも、何が辛いかな俺に聞いてよ！」

リアクションがなかったことに白土が抗議してきたが、どうせ禄でもないことは分かっている。

シカトして煙草に火をつければ、勝手に白土は話し始める。

「二人が彼女出来たてでニヤニヤしてるから、俺、辛いんだけど！」
「全然辛そうな顔には見えない」

寧ろ、楽しげなその表情に、疲れた顔で浅間を見れば、浅間は慣れているのか相変わらずの苦笑いで、沈黙を保っていた。

（流石、白戸の唯一の友なだけあるな）

本人が聞いたなら、「大島は俺の友達じゃないの!？」と泣かれそうなことを、海はぼんやり思っていた。因みに、そんなことを言われたら、間髪入れずに「同僚だ」と訂正できる。

白土は反応が薄い海と浅間に納得いかないのか、煙草の煙を耳から出さん勢いで喚く。

「しかも、二人とも付き合ってるし、隠そうともしないし！ 何なの？ フリーの俺に対するあてつけ!？」

「隠す必要ないだろ」

寧ろ、早く桃と付き合っていることが広まればいいとさえ、海は思っている。

設計部の独身三人娘は、あれでもそれなりに男性陣の噂に登りやすい。

ただでさえ女性の少ない設計職。

彼氏のいなかった桃や西脇などは、恰好の嫁さん候補として、たまに男だけの会話に登るのだ。

それ位、設計職の嫁不足は深刻だ。

だから、変な虫がたかる前に、売約済みと書きたいのは、彼氏として当然だろう。

三十路を過ぎている浅間ならば尚更だろうと浅間を見れば、浅間は苦笑を張り付けたまま、

「そういう話題は勘弁してくれ」と返した。

「んもー！ 浅間ちゃんてばシャイなんだからー！」

先輩相手だと言うのに、白土がどのオカマだ、とつつこみたい口調で浅間に言った。

「いや、そういうんじゃないけど、まだ実感、沸かなくてな」
照れるというよりは、本当にピンときていない感じだった。

「またまたあ！ 一回り違う娘なんて、一発逆転ホームランのくせしてー！」

「そういうもんか？」

自分のことだというのに、どこか浅間は他人事のように、聞いていた海も思わず苦笑いを浮かべてしまう。

（確か、西脇の方が惚れてるんだっけ）

西脇の方が浅間に惚れているのだというのは、白土からの情報で惚れられている浅間には、まだ恋人という実感は薄いようだ。

付き合い初めは、お盆前後で海と似ているだろうに、浅間はまだ恋人という関係がしっくりきていないらしい。

（俺はもっと恋人らしくしたいけど）

まだ桃の方が遠慮がちなのが、こそばゆい。

今週末もデートの約束は取り付けた。まだ手位しか繋いでないの
で、あわよくばその先にだっていきたい程度には健全な青年男子だ。
独りでそんなことを不埒に考えている横で、白土は勝手にウザい
テンションをあげまくっていたらしい。

突然、海がその軽い頭を叩かずにはいられないことを口にする。

「西脇、おっぱいデカいし、いいじゃないですか!」

「お前、サイテーだなっ!」

白土の頭を遠慮なく叩けば、ポンといい音がした。

頭の中に、しっかり味噌が詰まっているか心配な程、軽くていい
音がする。

白土は「痛っ!」と痛くもないくせに自分の頭を撫でながら、

「酒田はあんまりないよね?」

と海に確認してきたので、更に遠慮なく殴っておいた。

(見た目よりはある、はず!)

とのフォローさえも、想像させたくなく、我慢した。我慢はしたが、
もう一度、ボカリと鈍い音で頭を殴ってはおく。

「いってー!」

うつうつ。浅間さん、大島が俺をいじめます!」

「どう考えても自業自得だろう」

漸く浅間が小さく笑った。そしてそのまま

「俺、先に戻るから」

と言つと、居づらくなつたのだらう。コーヒーを飲み干すと、浅間
はそのまま喫煙室を出て行く。

海は軽いため息をつきながら、「お前、絡みすぎ」と白土を叱責
した。

「いや、浅間さんのあんな顔、初めて見たからさあ！」
「あんな顔？」

(苦笑いしかしてないよな?)

思い返してもピンとこない海に、白土はニヤニヤしながら言う。

「浅間さん、今まで女にアプローチされても落ちたことないんだ。
あの人、面倒くさがりだから」

「そうなのか？」

「俺、結構、あの人、合コンに連れ出したから」

失礼ながら意外だと思った。

合コンに行ったこともそうだが、アプローチされている浅間も想像出来ない。

「浅間さん、たまに無意識で女落とすからなあ」

「何だそれ？」

「口説くつもりなくても、ポツリと吐いた言葉が女の子のツボにハマるの。すげーよ、言葉の魔術師」

普段、あまり話さない浅間が言葉の魔術師だなんて言われても、どうもピンとこない。

だが、白土が言うのだから、モテるといっつのは本当なのだろう。

「で、女から寄ってくるんだけど、いつも引いちゃうんだよね。浅間さん。」

だから、西脇も絶対無理だと思ったんだけど」

思ったのに、あの飲み会を開催したのか。

煙草の煙をくゆらせながら、呆れたように白土を見れば、白土は肩を竦めながら、咳く。

「まさか、付き合うことになるとは思わなかったなあ」

「付き合つて欲しくなかったのか？」

「お前等の為の飲み会でもあつたの！」

はぐらかされたな、と思つたが、それ以上は何も言わなかつた。

ただ、煙草の灰を灰皿に落としながら、

「今度、奢る」

とだけ言つ。

「おうよ。沢山、奢れ」

白土が満足そうに笑つたので、二人で煙草の火を同時に消して、そのまま喫煙室を出た。

23 9月6日

「で、やったの？」

そうサチに聞かれて、私は思わず周囲を確認してしまっただって真っ昼間。

午後2時。

資料のファイルを二人で運んでいる真っ最中。誰が聞いているか分からない廊下だっただけに！

「誰も聞いちゃいないわよ」

「いや、そういう問題じゃないでしょ」

「そこまで動揺するってことは、まだか」

当たっているだけに何とも言えない。

「きちんと避妊しなさいよお」

「ちよ！ サチい！」

また周囲を見回してしまっ。

幸い誰もいないが、会社でしていい話でもないだろう。

「冗談よ、冗談」

ケラケラとサチは笑うが、冗談なんて一つもなかった。

「でも、今が一番楽しいんじゃない？」

「楽しい・・・と思うよ？」

大島さんと出かけるのは楽しい。

この前の日曜日だって、デートした。

進展は、手を繋ぐだけ。

キス、とかはまだしてない。

なんとなくタイミングがないというか、私が故意に避けていると
いうか……。

「何よ？ 何か不安なの？」

サチが鋭く聞いてきた。先程までの揶揄の入った口調はもうなく
て、少しだけ心配の混じった表情。

そういうところがサチらしい。

私は曖昧に微笑んで、

「私の問題」

と返す。

(前の恋愛引きずって、勝手に心配してるなんて言えない)

大島さんが、あの千夏という女の人と同期だということは分かっ
ている。

それでも、不安になる。

私は二番さんじゃないかって。

「私から告白してるし……」

「大島さんもあんなのこと、好きじゃない」

「そ、そうかなあ？」

「はあ？ あんなにあからさまに惚れられてるのに!？」

呆れたサチの声があまりに大きくて、私は「声、大きい!」と慌

てて忠告した。

「あっきたー！ つきあう前もウジウジしてたけど、付き合ってからウジウジなの?!」

「だ、だって、その・・・」

好き、だってハッキリと言われていない。

あの時は、確か、今日から彼女とは言われたが、自分を好きかという問いかけには答えて貰えなかった。

「男の好きとか愛してるなんて、やってるときに浮かれて言うくらいじゃないわよ」

言ってもいないのに、悩んでいる私の心の内を見透かしたみたいにそう言われて、ギョっとしてサチを見上げる。

サチは「やっぱりそんなところ？」と納得した顔になってから、「今時、好きです、付き合いますよーなんて高校生でもしないって」と追い討ちをかけてきた。

(分かってる)

それ位、分かってる。

だけど、聞いてないから不安で、ましてや自分とは全く異なるタイプの女性に以前は恋していた人だ。

(私のこと、告白しているから付き合っているかもしれない)
そう思うと、じくじくと胸が傷む。

サチはそんな私を見ながら、少し肩を竦める。

「ほんと、あんたとちとせ、足して2で割ればいいのに」

「? 何で??」

首を傾げた瞬間、ぽん、と肩を叩かれた。

サチではない。
大きな手だからだ。

「はい？」

振り向いた瞬間、その人がかけた声。

「西脇、ちよつと．．．」

振り向いて仰ぎ見る私。

私の顔を確認して固まる浅間さん。

浅間さん「ちとせちゃんの彼氏。」

「．．．．．」

「あ、酒田か。すまない、間違えた」

「い、いえ．．．」

浅間さんは慌てて廊下を逆方向に駆けていった。

後ろ姿で私とちとせちゃんを間違えたのだと直ぐには分かる。

ちとせちゃんも私も肩口ぐらいの髪だし、今は事務服だ。背も同じだから、前から見なければ、間違える人がたまにいる。

それ位、背格好が似ているのだ。

但し、胸はちとせちゃんの方がたわわだが。

「サチ．．．」

「自分の彼女、間違える様な男でも、ちとせはあんなに真っ直ぐ好きなんだから、桃は恵まれてるのよお？」

そう言われては何も言えない。

「皆が皆、付き合い始めから互いを一番好きだとは限らないってこと。」

両想いで付き合い始めた自分たちの幸運に感謝しなさい」
ぼん、と肩を叩かれ、私はコクリ、と小さく頷いた。

「一緒に帰れそうだから、帰り、会社出たところで待ってて」
残業を一時間ほど終えてから帰ろうとしたら、大島さんに呼び止められて、そう言われた。

断る理由は勿論なくて、ソワソワしながら会社の外、門をでたところでウロウロしていたら、小走りで大島さんがやってきた。

「すまん、待たせた」

「だ、大丈夫です。それよりいいんですか？ 会社前から一緒なんて」

「もう7時ちかいと暗いし。」

それに別に隠す必要もないしな」

そう言われて微笑まれたら、何も言えない。

大島さんの笑顔が眩しすぎる。

会社から駅までは徒歩で15分。

いつもは道路沿いの安全ルートを選択するのだが、大島さんは迷わず近道である住宅街ルートを選んだ。

その方が5分早く着くのだ。

夜遅くなると暗いので、私は定時で帰宅する日以外は選ばない道だ。

「酒田、お前って毎週会っても平気な方か？」

歩きながらそう聞かれ、私は横を見る。サチを見上げると変わ

らない角度で見上げれば、大島さんのこちらを窺う目とかち合つ。

「へ？ いや、誰とですか？」

「ここでそう聞くか？」

俺と、だよ。俺と！」

「あ、毎週デートはどうかってことですか？」

「いちいち確認するな、馬鹿」

コツンとおでこを叩かれた。大島さんは気恥ずかしそうに前を見て、私から視線を反らす。

私は触れられたらおでこを撫でつつ、

「毎日でも、嬉しいですよ？」

と返した。

それは嘘偽りない。

いくら時間があつても足りない。

仕事仲間の大島さんはいつも見ているけれど、こうして二人の時の大島さんは、あの蕎麦酒屋の大島さんしか知らない。

それ以外の場所で会う大島さんは、どの大島さんも初めて見る大島さんで、とても新鮮だ。

意外に背中に手を回したり、手に触れたり、とボディタッチが好きなことも、付き合い始めて知った。

笑いあう肩が触れ合う程近い距離も、心地よい。

会社で一緒に仕事していた時は、知らなかった心地よさがある。

(それをもつと知りたいと思うのは、がつつき過ぎかなあ？)

知れば知るほど、ますます恋しくなるのは、私だけなんだろうか。

付き合い始めて、両想いのはずなのに、片思いに拍車がかかった気がしてならない。

「お前、直球すぎ・・・」

大島さんは口元に手を当ててから、チラリと横目で私を見た。

それからハア、と溜め息をつくとき、後ろを振り返る。

（誰がいる？）

私も振り返ろうとした瞬間、グイッと肩を引き寄せられた。暗い道が更に暗くなる。

否、私の視界だけが暗くなったのだ。

乾いた唇が、カサリと私の唇に触れて、直ぐに離れる。

「・・・・・・・・・・」

（え？ え？ え？）

慌てて後ろを振り返る。

誰もいない。

周囲を見渡しても人はいない、窓の空いている家もない。

（だけど、ここ、公道！！）

「大島さん！？」

「ごめん」

直ぐに謝られた。

ずるい。それじゃ、何も言い返せない。

「今度からそういうの、駄目ですよ？」

「一応、気をつける」

「一応はつけない！」

「適度に」

「大島さん！」

言葉遊びじゃないんだから、と口を尖らせると、また、肩を引き寄せることもなく、顔が近付いてきて、今度は、チュッとリップ音つきで離れた。

「誰かに見られたらー!!」

「暗いし大丈夫だろ」

「そういう問題じゃ・・・!!」

更に問い詰めようとすると、ぎゅっと今度は手を握られた。そのまま、手を繋いで歩いていく。

「酒田は触ると黙るのな？」

(ずるい!)

色々、遊ばれているって分かっているけど、何も言い返せない自分が悔しい。

顔を赤くしながら俯いて、手を握られて歩く。

「たまに早く帰れる時は一緒に帰ろう」

「・・・いきなりキスしないなら、いいですよ」

「酒田が直球投げてこなけりゃ、しない」

「何だか私のせいみたい」

「お前のせいだし」

(何、それえ?)

文句を言いたいののに、嬉しそうな大島さんの声に何も言えない。

『両想いで付き合い始めた自分たちの幸運に感謝しなさい』

サチの声が頭にふと、浮かんだ。

(そうだね。そう思う)

繋ぐ手が熱いのは、お互いに緊張してるからだろう。

初めて触れたキスは、子供じみたキスだったけれど、そこから伝わる熱は感じられた。

少なくとも、大島さんも私のことを好きでいてくれる。

それがどれくらいの想いかは計れないけれど。

(どうか、どうかー．．．)

大島さんがもっと私を好きになってくれますように。

いつか、千夏さんよりも私を好きになってくれたら。

そうしたら、私ー

もう裏切られないって、

信じられるのになあ？

24 9月9日

『大事な話があるから、飲みにつき合って欲しい』

千夏から、社内メールでその文が入ってきたとき、海は思わず顔をしかめた。

(何を今更)

この前、彼女として桃を紹介したばかりなのに、どうしてそんなことができるのだろうか。

『彼女に悪いから無理』

それだけ打って返信すると、直ぐに返事が帰ってくる。

『同期のよしみでお願い。これが最後だから。彼女さんにもそうお願いして』

いつもの彼女にしては珍しく下手に出た文面に、海は思わず眉間に皺を寄せた。

(同期、か)

確かにそれは覆せない事実だ。

それに千夏は男女の関係を意識せずに海とは飲みに行っていた。

これからもそんな感じで彼女としては飲みたかったのかもしれない。

海は少しだけ考えた後、

『了解。9時までなら』
と返信した。

それに対しての返事は『ありがとう』という言葉と、駅前の居酒屋という場所指定だけだった。

取り敢えず、桃に心配をかけたくないのので、メールだけしておく。

『同期と、今日少し飲んでくる。九時前には終わるから出来れば蕎麦酒屋で待ってて欲しい』

(何だか変な文章だな)

そう思ったが、千夏のことを何と説明すればよいのか分からず、そのまま送信した。

遅くなっても同じ日に顔を合わせれば、桃も疑うことはないだろうと思っただからだ。

(まあ、そこまで気にしなくてもいいんだろうが)
昔好きだった女に会うという行為が、単純に自分の中では後ろめたいだけだ。

桃からの返事は少ししてから来た。

『了解しました。大島さんの奢りで沢山飲んでますね(*^_^*)』

可愛らしい絵文字に、一瞬頬が緩む。

これなら大丈夫だろう、と桃の方を確認もせず、海は仕事に専念した。

居酒屋に着いたのは7時過ぎだった。

それでもいつもの海ならばかなり早い時間に仕事を切り上げてい

る。

今週は仕事が薄かったのも幸いした。

「待たせた、すまん」

そう詫びると、既にぬるくなっていそうな生中を手に、千夏が苦笑する。

「結構、待った」

(相変わらず手厳しいな)

昔はそういうサバサバした所に惹かれていた。千夏のハツキリした言葉は、時に人を傷つけ兼ねないが、海にはその正直さが好ましかった。

「何から飲む？」

「あ、生中で」

生中が運ばれてくると、千夏が言う。

「海に彼女が出来た記念と、私たちの最後の飲み会に乾杯」

カチンとジョッキをあわされたが、海は千夏の言葉に意識がいく。自虐的な物言いに、敢えて返す言葉はない。

先に口を開いたのは、千夏だった。

「結構、本気なんですよ？」

「何が？」

「後輩の彼女のこと。」

そうじゃなきゃ、私との縁、切ってまで付き合わないよね」

ビールよりも苦い言葉に思わず顔をしかめた。

確かにただの同期という関係なら、二人で飲みに行くことに抵抗を感じない輩もいるにはいる。

だが、海にはそれができない。

ただの同期と思うには、あまりにも近くにいきすぎた。

(それで酒田に勘ぐられたら堪らない)

過去の女に縛られているなんて、桃に思っただけで貰いたくない。それならば、潔く千夏との関係を切ってしまったかった。

「薄情者。同期の仲なのに」

「すまない」

同期の仲といわれると耳が痛い。

悪いのはそんな同期の女に惚れた自分だろう。

黙りこくった海を見ながら、千夏はニッコリと笑う。

「まあ、いいわ。

その代わりに、二人の馴れ初め教えてよ。

どうせ海のことだから、あの後輩の子に告られたんでしょ？」

「え？」

「凶星。海、嘘つけないものね」

クスクス笑いながら、千夏は言葉を続ける。

「臆病者」

サラリと呟かれるような言葉の意味はあまりにもキツイ。

(俺の何が臆病だよ?)

そう思う端から、思い当たるが多すぎて、千夏に何も言い返

せない。

その表情を見て、漸く海は千夏が怒っているという事に気づいた。

「千夏、何か怒ってるのか？」

「怒ってる。」

「だけど、私、零れた乳を嘆くような子供じゃないから」

「は？」

「最初から最後まで友達面出来ないんだったら、自分に彼女ができる前に私から離れてきなさいよ、馬鹿」

「.....」

彼女が結婚したとき、もう千夏と飲むのは止めようと思った。

事実、自分から誘うことは止めた。

「だけど、彼女から誘われれば、《同期》という言葉に格好付けて飲んだことも確かだ。」

（でもそれは、お前が誘ったからで.....）

「海が何も言わないから、私は海が同期としての私がいいんだと思っただ。だから、他に好きな人作って、結婚しても、同期として海は変わらず接してくれると思っただ。」

「だけど、自分に女が出来たら、私は用なし？ 同期っていう括りは、単純にあんたの感傷だったわけだ？」

「紡がれる言葉は酷く刺々しかった。」

「そしてその内容を解釈していくと、まるで.....」

「深く考えなくていい。
今は旦那だけだから」

海の考えが纏まる前にバツサリ切り捨てられた。

「だって、俺ら、男女だろ？」

なら、相手にパートナーが出来れば、それを優先するのは当たり前のはずだ。

「同期ってカテゴライズしたのは、海、あなたよ」

男女の垣根をなくして、同期だから、そういう理由付けでお互いつき合ってきた。

その方が楽だから。

その方が関係が壊れなくていいから。

では、そのカテゴライズをしなかったなら、二人の関係はどうなっていたのか？

(ああ、だから覆水盆に返らずか)

t
m i l k . ” I t ' s n o u s e c r y i n g o v e r s p i l

高校の時、英語で習った。国が違えど、同じ様な格言はあるのだ
なと思ったから、印象に残っていた。

千夏が言いたかったことが、何となく分かって、海は深く頭を下
げた。

「すまん」

「分ければいいよ。」

私もずるかったのは分かってるし」

顔をあげると、千夏が寂しそうに笑っていた。

(利用されていると思ったけど、俺も利用していたのか)

無意識に無自覚に、きつと海は千夏を利己的に扱っていたのだろ
う。

「好き」という感情を、放棄したつもりはなかった。

だけど、千夏はそう見なかった。

だから、海を選ばなかった。

「うちの旦那と、海の彼女も一緒なら飲める？」

苦笑いしながら、それでも不安そうにそう問われた。

物事の見方つてのは、こんな一瞬で変わるのか、と思えるくらい、

千夏が弱々しく見えた。

こいつも女だったのか。

好きだったのに、今更そんなことに気づいた自分が情けない。

そして、千夏を避けようとしたことが、どれだけ千夏を傷つけて
いたのかを知る。

「お前の旦那、嫌がらないのか？」

「嫌がる人なら結婚してない。」

それにそこまで不安にさせる隙間なんて与えない位、愛してるし」
千夏の、夫に対するノロケを初めて聞いた。

いや、言っていたけれど、聞いていなかったのかもしれない。

何だか色んなことが気恥ずかしくなり、ガシガシと海は後頭部を搔いた。

「彼女にもきちんと言ってよね。同期なんだって」

「分かった」

「今度、皆で飲もうね」

「・・・考えとく」

「ありがとう」

千夏の表情が柔らかくなった。

その表情を見て、彼女もまた今日、海との関係が壊れることを見越して来ていたのだと理解した。

海が千夏との関係を【同期】とした。

千夏はその関係を承諾し、そうあるうとした。

もし、海がその居心地のよい関係を飛び越える勇気を持っていたら、二人の関係はどこか変わっていたのかもしれない。だけど、『もし』なんてことは、現実に存在しない。

(何か情けないな、俺・・・)

自分の臆病さが、ほとんど嫌になる。

「彼女とお幸せに」

この前、家電量販店で会った時には見せなかった柔らかい笑顔でそう言われた。

いや、あの時もこんな顔だったのかもしれない。

「じゃあ、今日は二人で飲む最後の飲みに、もう一度、乾杯しよう

か？」

千夏がぬるくなりきったビールジョッキを掲げたので、海は苦笑いしながら、カツンとそれに自分のジョッキを合わせた。

(何て伝えればいいんだ?)

八時半には千夏と別れて、海は電車に乗った。すぐに着いた最寄り駅から、のんびり蕎麦酒屋まで歩く。ぼんやりと桃のことを考えながら。

自分に意気地がなくて、好きだった女にとうの昔に見限られていて、それに気付かず尾を引いていたなんて、どう説明しても情けなさすぎた。

(いつそのこと、同期だからで押し通すか?)

そうして、千夏と千夏の旦那が仲良くしているところでも見れば、桃も安心するのではないだろうか。

そこまで考えた瞬間、

「臆病者」と、千夏に言われた言葉が、耳に返ってきた。

薄情者とも言われたが、臆病者と言った時の千夏の声は、とても低く、怒りが込められていた。

自分からは動かない。

相手が動くのを待つ。
動いて貰ってから動く。

それは用心深いといえは聞こえがいいが、千夏に言わせれば臆病者でしかない。

(今度はタイミングを見誤らないようにしよう)

歩きながら心に誓う。

臆病だった恋は教訓に。

手に入れた恋には勇敢に。

「手っ取り早く、好きだって言えばいいのか？」
ぼそりと呟いた。
今更過ぎる。

恥ずかしすぎる。

(取り敢えず、会ってから考えればいいか)

そう思いながら空を見上げると、ぼつかりと白い月が浮かんでいた。
満月になりそうな大きさに、もう直ぐ十五夜か、と思った。

「月見で一杯か？」

そんなことを言えば、桃はとても喜びそうだ。
そう思いながら、蕎麦酒屋に辿り着く。

ガラガラと引き戸をあける。

「大島さん！」

そう呼んで満面の笑みを浮かべてくれる恋人は目につかない。

トクン

違和感に一度だけ心臓が跳ねた。

「いらつしゃい。今日は一人？」

店主の陽気な声に、桃が来店していないことを、瞬時に理解する。

（俺、何か彼女を怒らせたか？）

その日、どんなに連絡しても桃の携帯に連絡は着かなかった。

25 9月9日

(同期と飲み会、かあ)

定時後、まだパソコンに向かっていている恋人を、私はチラリと確認する。

本当なら定時で上げれる筈なのに、グダグダと仕事をしていたら、六時を少し過ぎてしまった。

これ以上いても、仕事に身が入らないから、諦めてパソコンの電源を落とした。

どちらにせよ、九時過ぎには蕎麦酒屋で会える。それまでの我慢だ、と自分に言い聞かせる。

(嫌だな・・・)

海を前の彼氏と同じだとは思っていない。

だけど、このまま不倫関係に進まれて、自分が隠れ蓑に扱われたら・・・と情けない妄想までしてしまう。

(どうしたら、強くなれるんだろう?)

昔はもっと盲目と相手に信頼を寄せることが出来た。

それなのに、今はそうできない。

それがとても辛く、歯がゆい。

「はあ・・・」

会社の門まで向かいながら、溜め息を逃すと、ポン、と肩を叩かれた。

「はい？」

「あつ……………」

「……………」

叩いた相手の気まずそうな顔に、私の方が気まずくなる。

「いい加減、私とちとせちゃんの区別ぐらいつけましょっつよ」
「思わず愚痴りたくなるのも私のせいではないだろう。」

「いや、その……………すまん」

「ちとせちゃんなら定時で帰りましたよ？」

「そうなのか？」

（あなたの彼女でしょ！）

意外に間抜けなのか、浅間さん？と思いつつも、きつく注意だけはしておく。

「あんまり間違えると愛想つかされちゃいますよ…！」

「それはない」

（は？）

間髪入れずに断言されて、思わずマジマジと浅間さんを見上げてしまっつ。

浅間さんは自分の言葉の恥ずかしさに気づいたらしく、

「いや、自惚れとかではなく・・・」

と、しどろもどろに訂正してきたが、これのどこが自惚れではないのか、膝詰め説教して問い質したいくらいだ。

「でも、本当に間違えないうでくださいね」

「う、ああ。分かった」

何となく離れそびれて、そのまま正門も二人で出てしまう。

(このままだと駅まで一緒?)

大して親しくないのに、それは嫌だな、と思う。話題もないし、可愛い後輩の彼氏だが、ちとせちゃんを私を間違えるような人とは、あまりいたくない。

「あ、私、こっちから帰りますから」

いつもは定時直後でないと通らない道を指さすと、浅間さんが心配そうに、

「暗くないか？」

と聞いてきた。

「まだ六時半前ですから」

こんな時間に物騒なこともないだろう。

「そうか。じゃ、またな」

浅間さんもそれ以上引き留めなかったので、私はニコリと笑って、脇道に反れた。

中途半端な時間だったので、帰る人がいない。

既に暗い道は六時半と思えない位、人気が少ない。

何だか嫌だったので、携帯電話を開いて灯り替わりに道を歩く。

こういう時、意外に携帯電話のライト機能って便利だな、と思う。

車のライトが後ろから私を照らしてくる。

私はそれを避けるように道の端に寄った。

車は少し先の公園前で止まった。

私の進行方向だ。

(ちょっと嫌だな)

軽自動車だけど、何となく嫌な気持ちになって、少し距離を置いて道の端を歩く。

軽自動車の横を通り過ぎた時、車のドアが開いた。

暗闇で顔ははっきりとは見えないが、服装から女だと分かったので、少しだけホッとする。

が、すぐに違和感に気づいた。

駆けてくるのだ。

女が。

自分の方に。

(何?)

振り向こうとした。

だが、振り向けなかった。

いきなりバシんと頭に衝撃。

痛い。

(何、何?)

ビックリして、携帯電話を足元に落としてしまつ。

殴られたんだ、と判断した。

しかも手ではない。

これは鞆だ。

だけど、顔を確認しようとした時、もう一度、今度は顔を鞆で殴られて、私は頭を庇うようにしゃがみ込む。

(何? 何? 何で?)

「返せ! 返せ!」

涙声で女が叫んだ。

次の瞬間、女は私にとって思いもかけないことを言った。

「あの人は私の恋人なの!

ずっとずっと!

もう7年前からずっと!!

いきなり来て、私の彼を奪わないで!」

(彼?)

スウッと手の力が抜けた。

(彼って?)

大島さんの顔が浮かぶ。

女は暫く私をバシバシと叩く。

「私に愛してるって言ったのに！！ 何であんたが彼女面してるの？！」

悲鳴のような叫び声。

悲鳴をあげたいのは私の方だし、これって暴漢だろう。

そう思えども、体の芯から冷えていく。

(どうということ?)

訳が分からない。

一方的な暴力に、言葉もなく身を縮めていると、女は

「もう二度と近寄らないで！！」

と叫んで、車に走っていった。

ゆるゆると見上げた顔に、髪の毛の長い女の後ろ姿が見えた。

顔は分からなかった。

だけど、私と同じくらいか年上と思われる女。

ボタンと車のドアを閉じる。

そして車は乱暴にバックすると、大通りの方へ走っていった。

それらを目にしながら、私は、突然起きたことを処理出来ずにいた。

ナンバープレート位、見ていれば良かったのに、何も頭に入っていない。何も出来ない。

(恋人？ 誰の？)

あの女は誰？

誰かは分からなかった。

だけど、あの女は自分を知っているのだろう。

だって、わざわざ通り過ぎるのを確認してから降りてきた。私だと知って、殴ったのだ。

『返せ！』

その叫びに、思わず口を押さえる。

そうしないと、叫んでしまいたくなったからだ。

「またなのか」と。

どうして、男は私を騙すのだろう。

どうして、男は一人の女を愛してくれないのだろう。

どうして。

どうして。

何で、私は誰かを好きになる度に、こんなしんどい思いをしなくてはならないの？

私はノロノロと立ち上がると、膝の土埃を払い、携帯電話を手にとった。

大島さんの携帯番号を検索して表示すると、無言のまま、そのデータを消す。

確認しなくていいのか。

何かの間違いではないのか。

そんな言葉が私の中を駆け巡った瞬間、私は小さく笑う。笑うしかない。

「今日、好きだった女と飲みに行くような男だよ?」

他に女がいてもおかしくないだろう。

しかも、同期としか書かずに、私がどんな気持ちになるか、きつと考えていない相手だ。

「もう、いや。イライナイ」

ピー、と削除した音を確認し、携帯をしまう。

あんなに叩かれたのに、頭はもう痛くなかった。

寧ろ、冴えさえとした気分で、私は空を見上げる。

白い月がポツカリと浮かんでいた。

ああ、なんて、綺麗。

私は今日の月を、きつと忘れない。

26 十五夜

その人とは、隣の部屋だった。

何度か挨拶する内に、互いの顔が分かる位になった。

たまたま、仕事を終え、駐車場に車を停めたとき、彼が帰ってきた。

「こんばんは」

「あ、こんばんは」

彼はペコリと私に頭を下げしてくれる。

その礼儀正しさが好ましいと思う。

二人してアパートの階段を登る。

行き先は隣なのに、まるで同じ部屋に行くかのような錯覚を覚え、私の胸はドキドキと早鳴る。

「あ」

彼がいきなり声をあげた。

ビックリして、私は彼を見上げる。

階段の上、ポツカリと満月。

綺麗な、綺麗な、月。

「……ですね」

「え？」

いきなり話しかけられて、私は戸惑う。聞き直すと、彼はぼんやりと月を眺めながら、

「月、綺麗ですね」と言った。

そう言えば、今日は十五夜。

ああ、だからあんなにも白く、
気高く、

綺麗に月が輝くのか。

彼は照れくさくなったのか、そのまま、部屋に行ってしまう。

私は顔を抑える。間違いなく、真っ赤に染まっているだろう。

月が綺麗ですね

彼はその意味を知っているのだろうか？

かの文豪が、“ I love you ” を訳した時に使った言葉。

きっと、知っているだろう。

いや、知っているから、私に言ってくれたに違いない。

ボタンと車の扉をあける。

先週の金曜日、あの忌々しい女には釘をさした。

自分が悪いことを分かっていたのだろう。抵抗もなく私に殴られていた。

車にいた私に気づくこともなく、タン、タン、タンと、階段をあがる彼の後ろを私はついていく。

7年前、彼は今日と同じ十五夜の日、私に告白してくれた。私は恥ずかしくて自分から彼に思いを告げたことはないけれど、彼は私を愛している。

私も階段を登ると、彼は私に気づいて後ろを振り向く。

私はニツコリと笑う。

「こんばんは」

「あ、こんばんは」

邪魔者はいない。

私は勇気を振り絞って、彼に告げる。

「こんばんは、浅間さん。」

「月が綺麗ですね」

浅間さん、貴方を愛しています。

27 9月16日

事態は海の思った以上に深刻だと気づいたのは、情けないことに金曜日になってからだだった。

月曜の朝、普通に出勤すると、普通に桃がいた。

「おはよう」

「おはようございます、大島さん」

土日に連絡が無かったのが嘘のように、カラリとした笑顔に騙された。

金曜日に桃がいなかった理由も、土日に連絡が出来なかった理由も、聞けば教えてくれる程度のことなのだろう、と安心してしまったのだ。

あんまりにも、桃が普通に笑うから。

そして、どうして連絡が無かったのか聞こうとするときに限って、立て続けに仕事がいりこんできた。

月曜〜水曜までは、午前様になった。当然、明け方近い時間に電話するわけにもいかず、連絡がつけられなかった。

木曜は何とか12時前に家路に着いたが、先週とは打って変わってのハードワークに、残念ながら身体がついていかず、風呂上がりで撃沈して、連絡出来なかった。

そして今日、金曜日。

ここまで放っておいたわけではなく仕事で忙しいことは、桃も見ていて分かっていたのだろう。

「今週はお疲れ様でした」

と定時にいたわりの言葉をくれた。

それが不覚にも嬉しくて、頬を緩ませてしまう。

出来れば二人きりの時、桃を抱きしめてぼんやりテレビなんか見ているときにそんなことを言われたい、と思わず想像してしまう。

桃といると、落ち着く。

何かをしなくてはいけないと、急かされるのではなく、ただ、あるがままにいられる気安さがあった。

無論、それは蕎麦酒屋で二人で飲んだ日々が積み重なったからこそ今なのであって、最初からそうではなかったはずだ。

飲み仲間を経ての今だから、こうして丁度いい距離を保っているのだと思った。

就業中に飲んだコップを片付けに行くだろう桃に、トイレに行きかてら、と理由を付けて後を追う。

「酒田」

呼びかけると、桃が振り向いた。

「今日、早く帰れそうなんだけど、帰り、少しいいか？」

「いいですよ」

桃は愛想よくそう返してくれた。

いつもと変わらない笑顔。

「？」

その筈なのに、何か違和感を覚えた。

「酒田？」

「正門のところにいますから」

桃はそれ以上、何も言わずにそのまま給湯室に向かっていった。

いつもなら少しだけ、海と気軽に話し込むのに、それさえもない。

定時間際だからだろう、とも思ったのだが、違和感が拭えない。

(何かがおかしい)

今更ながら、違和感に気づいた。

桃はあんな風に笑う女だっただろうか？

腹の奥からジワジワと湧き上がる不安。

繋がらない電話。

一切、連絡を超越さない態度。

違和感のある笑顔。

何かがまずい、と今更気づいた。

トイレで小用を済まして戻る廊下で、桃ともう一度鉢合わせる。

「酒田、そういや今週、連絡……」

会社なので語尾を濁すと、桃はにこりと笑ってから、

「後でお話しますね」

と優しく言った。

その瞬間、海は強く後悔する。

この一週間、何もしなかったことに。

（馬鹿だ、俺）

冷水を浴びせられたような気分だった。

今週、一週間、ずっと桃はこんな笑顔で自分を見ていたのだ。

声色はいつもと変わらない。

だけど、視線の先が違かった。

海を見ていない。

何も見ていないかの笑顔は、いつも全面の信頼で向けられていた

眩しい笑顔とは、あまりにも違いすぎた。

「さか……」

呼び止めようとした手はスルリとかわされて、海は帰りに桃から

言われるであろうことを、図らずも察してしまった。

海にとつて、定時速攻で帰るのは珍しい。いつもなら同僚を気にして残業まではいかなくても、六時過ぎまではいたりするのだが、今日はそんな余裕もなく定時を告げるチャイムを聞くと、急いで帰り支度をして外に出た。

正門付近は定時直後ということもあり、沢山の人がいた。

桃も定時であがったのだろうが、海よりは遅くなったらしい。

「すいません、お待たせしました」

と近寄ってきた彼女はにこりともしていなかった。

「今週は連絡出来なくて悪かった」

歩きながら、取り敢えずそれだけを先に謝る。

桃は首を横に振り、

「お忙しかったみたいだし、仕方ないですよ」

と言った。前を見て、海の方には視線を向けない。

「今日、蕎麦酒屋行くか？」

ドキドキしながらそう問うと、桃は曖昧に微笑みながら、

「いいですよ」

と返してくれた。

それだけでホッとす。

(ああ、別れるつもりではないんだな)

連絡がつかなかったのも、笑顔に違和感を感じたのも、きっと海が忙しいから、遠慮してくれたのかもしれない。そう、手前勝手に都合よく解釈した。

桃との付き合いが長かったにも関わらず。

多少のことなら多めに見る彼女が、ある一面ではとても潔癖に近いほどの潔さを兼ね備えていることに。

それに気づいたのは、人気が少なくなった場所で、そつと彼女に手を伸ばした時だ。

すつと海の手から桃の手が逃げた。

戸惑いつつ桃を見ると、桃は表情のない顔で言う。

「駄目ですよ」

「何で？」

「彼女がいるのに、駄目ですよ？」

「酒田がそうだろう？」

何が駄目なのか？と首を傾げた瞬間、桃はハッキリ言う。

「大島さんの彼女は他にいるんでしょう？」

笑うわけでも泣くわけでもなく、ただ、淡々と事実のように突きつけられ、海は困惑する。

「いるわけないだろう」

「でも、先週の金曜日、私はここで、大島さんの彼女だという人に殴られました」

桃が足をピタリと止めた。

公園の隣。

二人で帰るときは当たり前のように選んだこの近道で、他の場所より人の目が少なくなる場所。

「殴られた？」

「鞆で何度も殴られました」

大島さんを返せって叫ばれながら」

「怪我は？」

「大丈夫です」

(千夏か?)

一瞬、千夏の顔が浮かんだが、すぐにそれは否定する。彼女とは金曜日の飲み会でお互いに区切りをつけたから。

「顔、確認したか?」

「はつきりとは見てませんが、多分私の知らない人でした。軽自動車に乗ってました」

桃の言葉で更に確信する。

千夏は軽自動車を持っていないし、会社通勤に車を使用していない。

(だけど、他にいないぞ)

「俺には覚えがない」

海が自信を持ってそう断言した瞬間、桃は無表情だった口元に小さく笑みを浮かべた。

もしかしたら笑ったわけではないかもしれない。単純に、歪んだような唇が、震える声で言葉を紡ぐ。

「信じられません」

キツパリと断言されて、思わず息を呑む。

「信じられないって...」

本当に覚えがないんだ」

「先週の金曜日、飲んでいた同期は誰ですか?」

「え?」

「今、私が殴られたって言ったとき、思い当たった人は誰ですか?」

矢継ぎ早に問われ、一瞬、答えに窮す。桃はそんな海を見ながら、もう一度、唇を歪めた。

「なかったことにしてください」
ポツリと小さく呟かれた言葉は、理解出来なかった。
それを分かっているのか、桃は更に言う。

「もう二番目は嫌なんです。誰か他に好きな人がいる人なんて嫌なんです」
泣きそうな顔に、胸が傷む。そんな顔をさせたくないのに、間違
い無くそんな顔をさせたのは自分だ。

「酒田・・・」
近寄ろうとしたが、後退りされた。近付くことさえ許さない桃の
姿に、自分のしてきたことの愚かさを実感する。

「今週一週間、普通の同僚としてお仕事出来ましたよね？ 恋人な
んてならなくても私たちは変わらないんです。それでいいじゃない
ですか。」

わざわざ恋人になる必要なんてなかったんです。
・・・だから、なかったことにしてください。
大島さんと付き合い合ってきた1ヶ月、大したこともなかったし、な
かったことになんて、すぐに出来ますよね？」

別れる以前の問題だった。
付き合ったことさえもなかったことにしたいという拒絶に、驚き
や怒り、悲しみといった激しい感情は湧いてこない。
ただ、ただ、桃のその拒絶に戸惑う。

「違うんだ、酒田。」
千夏とはただの同期だし、他に女なんていない」
「ただの同期だったら、彼女に内緒で飲んでもいいんですか？」

「この前の金曜日はそれをやめて欲しくて話にいったんだ」

「私はその日に、ここで、別の女に殴られた!!」

「!!」

悲鳴のような苦しそうな叫びだった。桃はぐつと唇を噛み締める
と、海を睨む。

薄暗いが、桃の目が涙ぐんでいるのが分かった。

「怖かったのに、大島さんは別の女のところに行ってた。痛かったのは頭じゃなかった」

「酒田……」

伸ばした手は避けられた。

(違うのに)

そんな女は覚えがないし、千夏のことだって上手くまとめたはずなのに。

「だから、もう、なかったことにしてください」

黙ってしまった海に、確認することもなくそう告げると、桃は深々と頭をさげて、「さようなら」と言った。

そしてそのまま、ひとりで駅まで歩いていく。

海はその後ろ姿をぼんやりと眺めていた。

(このまま、終わるのか?)

終わるのだろう。

桃の傷は深い。

その原因の一端は海にある。

(このままでいいのか?)

いいんだろう。

だって、まだ大して付き合っていない。

だから、今なら傷も浅い。

(そう、このままでいいんだ)

だって、あんなに誤解している桃にどうやって誤解を解けばいい？
自分の方が年長だっていうのに、土下座でもするのか？

そんなみつともないことをしてまで、わざわざよりを戻す必要があるのか？

『大島さん』

瞬間、過ぎつたのは嬉しそうに微笑む桃の笑顔。自分の名前を呼んで、恥ずかしそうに繋いだ手。

頭の中ではもう別れるつもりで話は進んでいたし、そう理解した筈だった。

だけど、臆病者だと言われた自分にもこんなにも動く力があつたのか、と事が起こってから気づく。

「何．．．．．？」

桃がグシャグシャの顔で泣いていた。海が走ってその腕を掴むなんて思ってもいなかったのだろう。

海自身だって、そう思っていなかった。

だけど、身体は心よりも単純で。

掴んだ細い腕を離したくないという感情が、腕を掴んだときに伴って、我ながら馬鹿馬鹿しい提案を海はする。

「お前を殴った女、探す。

俺とは無関係だって証明する。

だから．．．．．！」

だから。

続ける言葉は抱きしめて、耳元で囁く。

「まだ俺を諦めないでくれ」

そんなに簡単に見限らないでほしい。

中学生みたいな恋だった。

1ヶ月近く一緒にいながら、したことなんてキスだけで、お互い手探り状態で。

だけど、そんなおままごとの時間をなくすことは出来なかった。

だって、掴んだ腕はこんなに暖かくて柔らかい。

「そ、そんなこと、無理に決まってるじゃないですか！」

腕の中の桃が焦ったような声をあげる。

「だけど、そうしないとお前、俺のこと信じられないんだろっ?」「
どんなに千夏との関係が潔癖だと言っても、それだけでは足りない。
い。」

「それにそういう問題じゃ・・・!」

「分かってる!」

悪いのは自分だって、痛いくらい分かっている。

桃のことをきちんと考えてなかった。考えているつもりで、自分の都合のいい方ばかり解釈してた。

だけど、それじゃ駄目なんだと思い知る。

「頼む、必ず見つけるから」

心の片隅でそんなことは不可能に近いと分かっているくせに、それでもそれ位しか、桃の信頼を回復する手立てはなくて。

腕の中で、桃の強ばりが解けた。

体を離すと、桃が不機嫌そうにため息をつく。

「分かりました。見つけてくださるなら、信じます」

どうせ出来ないくせに。

言外にそう滲んだ声色に、海は苦笑する。

自分でも無謀だって分かっている。

それでもそれ位しなくては、彼女の信頼は勝ち得ない。

それ位してもいい程、惚れてることに今更気づく。

「ちよっ・・・!!」

顔を近づけていったので、キスをされると思ったのだろう。強張る桃に、キスはせずに額を合わせる。

コツンと合わせた状態で、小さく呟く。

今まで情けないことに、きちんと伝えてなかったことを。今から始まるから、きちんと伝えたいと思ったことを。

「酒田、好きだ」

28 9月20日

「え？ 何？ その面白展開！」

ですよねえー！

人に話したらそう言われることは分かっていたよ、私だって！

ガヤガヤと人の声が煩い居酒屋で、私はサチとちとせちゃんの前で、ビール片手にテーブルに突っ伏す。

「大島さんを見る目、なんか変わりそお〜」

そう言ったのはちとせちゃん。

「何？ これは私、ノロケを聞かされたってこと?!」

サチは目を白黒させて、展開についてくるのがやっとのようだった。

先週一週間、傍観に徹していた二人は、何となく私の様子から何かがあったと分かっていたらしい。

それでも私から話すのを待っていてくれた二人に、今朝、「相談があるんだけど、今週、暇な日ある？」と聞いた私は、まさに飛んで火にいる夏の虫だったらしく、そのタイミングで、速攻、夕方の飲み会が決定した。

で、これまでの事のあらましを説明した次第。

「喧嘩したとは思っていたけれど、まさかそんなことになるとは……」

サチは半分呆れている。

「別に他の女と付き合ってたわけでもないだろうし、アンタも強情

だね」

と呆れ顔で言われて、反論の余地もない。

それでもあの日の私はもう一杯一杯で、今だってそれにあまり変化はない。

「だって、嘘かもしれないし」

そう、あの優しい言葉だって嘘かもしれない。

だって、間違い無くあの日、私を殴った女は確かにいたのだ。

「でもそのストーカーさん、恐いですねえ」

ちとせがブルブルと僅かに震えた。

「あれから何もされてないんでしょ？」

「うん、されてない」

「大島さんが全く知らない相手だった場合が一番怖いね」

サチに断言されて私は首を傾げた。

「何で？」

「だって、かなり長い間、自分は恋人だと思ってるんでしょ？　だ

けど本人は全く知らないって、かなり怖いよね」

「.....」

確かにそう考えると恐いとも言える。

「今回の件で桃にきたわけだけど、本人に更に行く可能性って、ないわけじゃないよね？」

「.....!」

それは考えてなかった。

だって、大島さんのことが好きな女性なら、本人に危害を与えるなんて本末転倒すぎる。

「で、でも大島さんも知ってる人かもしれないし！」

「大島さん、他に女いないのは本当だと思うけど？」

「.....」

私だつてそれ位分かつている。

「ただ、どこまでも意固地になつた私は、言葉だけじゃ信用出来ない。」

「どんなに優しく好きだと言われたつて、それが真実でない時もあることを痛いほど実体験しているから。」

サチは何うように私を見てから、溜め息を逃すと、

「どちらにせよ、このまま放置するのはマズいだろうし、私達でも出来ることは協力するから」

と言つてくれた。

「私も出来る限りします！」

私、空手習つてますから結構武力になりますよ！」

「そうなの?!」「空手?!」

私とサチがギョツとしてちとせちゃんを見れば、ちとせちゃんは満面の笑みで、

「任せてください!」

と自分の胸を叩いた。

その見た目と違う逞しさは、あの草食系浅間さんには本当、ピツタリの気がする。

(さ、流石、肉食系女子代表だなあ)

「というこで、今日から出来ることはじめましょう!」

「はい?」

ちとせちゃんはニコニコしながら携帯を取り出すと、電話かけますね、と言いながら、電話をかけはじめ。

「あ、隼生さん。今、大丈夫ですか？」

今日、帰り何時ですか? もうすぐ? じゃあ、大島さんも帰れそうなら二人で駅前の居酒屋『円』に来て貰えます? ええ。お願いします!」

(え?)

思わずサチを見る。サチはちとせちゃんを見ながら、

「本当、アンタ、一番若いくせに、一番曲者よね」
と言った。

(え? 今、大島さんて……)

「ちとせちゃん?」

恐る恐るちとせちゃんに確認すると、ちとせちゃんは悪びれもせず、寧ろ漢前に宣言する。

「邪魔な虫はあぶり出して退治するのが一番です」
可愛らしい顔でも言うことはえげつない。

「あ、あぶり出す……」

「この前、襲われたってことは、どこかで見ていたってことですよね? だったらもつと見て貰いましょうよ。煽って煽って、火の中に飛び込んできてもらいましょう」

「そ、それは危険じゃないかなあ?」

(だって、返せって言われてるんだよ?)

「でもこのままだても危険なことには変わりないんじゃない?」
そう応援に入ったのはサチで、気がつけば私は壁際に追い込まれていた。

「で、でも、私、信じられるまでは……」

「大丈夫ですよ。本番じゃないんですから」

本番って何?!

ちとせちゃんが理解できない。

叫びたい私の口は、言葉を紡ぐことも出来ずに、ただ、パクパクと動くばかりで、ちとせちゃんはニコニコとしたまま、

「頑張りましょうね、桃さん」
と言った。

私への了承確認は当然、ない。

「ちとせ」

いつの間にか二人は名前呼びになっていたらしい。
浅間さんが大島さんと白土さんを引き連れて居酒屋に来たのは、
電話してから40分後だった。

それでもこの三人が八時前に会社を出てきたのだから早い方だ。

大島さんが私を見て、優しく微笑んでくる。

（あなた、絶対、頭のネジ、どっかに落としてきましたよね?!）

一応、先週の金曜日の段階で、私たちの関係は保留になったはずだ。

はずなのに、大島さんは箍が外れたらしく、ダダ漏れで私に何か送ってくる。所謂、秋波つてやつ。

（そんなに露骨に見つめないでよ!）

そんな私の心の代弁者は、呼んでもないのについてきた白土さんだ。

「大島、鼻の下、のびてる」

「のびてねえよ」

肘鉄を食らわされた白土さんは、私を見て、

「とりあえず、こいつの言い分は聞いたから。何だか災難だったね」と言ってくれた。

言い分ってどこまで聞いたんだろうと思っていたら、大島さんが、「あらかた、二人には話している」と説明してくれた。

「恥ずかしいとか言ってもらえないしな」

「協力者は多い方がいいでしょ？」

と言ったのは白土さんで、浅間さんは流石に年長者らしく、

「しかし、こういうことは警察にいうべきじゃないのか？」と言った。

(そうか、警察……)

それもそうだと思ったところを、サチが冷静に助言してくる。

「警察の介入は難しいんじゃない？」

確かに被害ではあるけど、すでに一週間以上経っているし、しかも怪我もない。証拠もないときたら、動いてくれないでしょ」

確かに私は殴られたけど、それは凄く怪我を負ったわけでもなく、ただ、八つ当たりされたようなもので、今はそれ以外被害も受けていない。

大島さん自身も直接被害を受けていないのだから、警察にいつても何の捜査もして貰えない可能性がかなり高い。

「現行犯で捕まえて警察に突き出すのが一番だと思いますよ？」

力業一番のちとせちゃんがあつきりと断言すると、浅間さんと私以外はその意見に概ね賛成のようだった。

「俺としても出来るだけ早く、誰がそんなことをしたか知りたい。

これ以上、酒田を傷つけない」

大島さんはそう言うと、テーブルから少し離れると、
「すまないが、協力を頼む」
と頭を下げた。

「大島さん！」

そんな大島さんの姿は皆も初めてだったのだろう。
だってテーブルが無ければ土下座に近い。

男の人がそんな風に真摯に物を頼む姿を初めて見た。

そして、それが須く私の為だと思つと、胸にくるものがある。

(何でそんなに私のために・・・)

信じられないのだって、結局は私が上手く自分の過去を精算できていないからだ。

それなのに、そこまでしてもらつことに、胸が熱くなる。

「くれぐれも危険なことはするなよ」

結局、折れてくれたのは浅間さんの方で、全員の合意がとれたことに、大島さんは安堵の表情を浮かべた。

しかし、大島さんもそこから先はまだ考えていなかったらしく、そこから先を見据えていたちとせちゃんの発言に驚くのだ。

それは無論、私も含むが。

「じゃあ、今日からできうる限り大島さんは桃さんと帰ってくださいね。あ、送れないときは私かサチさんが一緒に帰りましょう。大島さんが無理な日の桃さんの安全は私たちが守ります。

で、虫を炙り出すためにも、ちょうどいいんで、今週の金曜日、休みですから二人はデートしてください。で、夜は大島さん家でお

泊まりですかね？」

(.....?)

「は？」

大島さんも言われたことの意味が分からず、ちとせちゃんを呆然と見ている。

私も一度に言われたので理解するまで、少し時間がかかった。

「あのお、ちとせちゃん、今、外泊って.....？」

「相手はどこから見てるか分かりませんが、大島さんの部屋に外泊なんて、一番シヨッキングだと思っただけですよね？ あ、その日は大島さんちの近くの駐車場で私と浅間さんが外から張ってますね！大丈夫、ストーカーは必ず仕留めて見せますから！」

「い、いや.....、が、外泊ってのは」

「そうですね。一回じゃ、ストーカーも引つかからないかもしれませんが、毎週、休み前の日、お泊まりしましょ！」

「いやいやいや！ちとせちゃん、そんな！」

私が腰をあげてその作戦に異議を申し立てようとすると、ちとせちゃんはニツコリとしながら、

「大丈夫ですよ、大島さんはその気のない桃さんをどうこうする様な鬼畜じゃないですから。」

信頼回復しなきゃならないのに、自分の下半身一つ抑えられなきゃ、土下座の意味もないでしょう」
「言い切った。」

「.....」

終始無言の大島さん。
何も言えない私。

つまり、大島さんの家に泊まらせるけど、指一本、私に触れるんじゃねえ、と言外にこめているのは、そこにいる全員が分かった。

「ちとせは、桃の事、大好きなのよね」

サチがポツリと大島さんにそう説明した。

(いや、好きなのは嬉しいけれど・・・)

大島さんの横では白土さんが、ニヤニヤしながら、

「なまごころし」

なんて呟いている。

浅間さんはちとせちゃんを一度見たけど、すぐに遠くを見てしまった。

この場でちとせちゃんに適う人はいなかった。ちとせちゃんは大島さんの了解も得ずに、ニコリと微笑むと、断言する。

「というところで、皆さん、頑張りましょうー!」

29 9月23日

これは一体、何の天罰だ、と海は気付かれないようにため息を逃す。

台所には小さな背中。

暖かい匂いは自炊の準備で、今日のデートの帰りがけ二人で寄ったスーパーで買ったものだ。

「桃さん、外にいますから何かあったら連絡くださいね」

と西脇が電話を寄越したのは、自宅に着いてすぐのことで、あからさまに外から監視していると、海に分からせる為だと分かった。

(というか、ストーカーより西脇の方が怖い)

久しぶりのデートだったはずなのに、浅間と西脇の二人にずっと監視されていたので、到底楽しめるものでもなかった。

映画館のトイレで浅間と偶然遭遇した時、浅間には恐縮しながら頭を下げたが、

「ちとせが言ったことだから」

と表情に乏しい顔で言われてしまった。

どうやら西脇のアグレッシブアタックに常に当てられているせい、浅間にはもう西脇の行動に振り回されること自体慣れてしまっているらしい。

そんな西脇たちの視線に晒されてのデートだったせい、いつもよりかなり疲れてしまい、桃の料理の手伝いも殆ど禄に出来ない。

「大島さん、お皿どこですか？」

唯一出来たことと言えば、食器や調理道具の準備くらいで、桃に言われて、海は食器棚の方へ向かう

「どんな皿？」

「大皿です」

フライパンで桃が作っているのは、ニラ玉だ。隣では餃子も焼いているし、ワカメスープも既に出てきている。

自宅に着いてから、わずか30分でそれだけ出来てしまうのだから、桃はかなり手際がよい方だろう。

早炊きしたご飯が出来上がった音のする炊飯器の上の食器棚から、大皿と、あと、取り皿なども取り出す。

殆ど外食だったり、自炊を殆どしない我が家でも、僅かな食器は存在する。

但し、対のものは一つもなく、皆、何かの景品や貰い物だ。

それを軽く水で濯いでから桃に渡すと、桃は「ありがとうございます」と、会社にいる時と変わらない態度でそう言っ、出来上がったニラ玉を皿によそった。

(少しは緊張するかと思っただけど・・・)

桃の態度は極めて普通だ。

初めて彼氏の部屋に入ったようには全く見えない。

いや、今の桃にとって海は彼氏ではないのだから、当然なのかもしれないが、そんな態度が少しだけ寂しい。

(自業自得だな)

千夏にはあの後、会わないまでも連絡だけした。話す前に確認として、軽自動車のことなどを聞いてみたが、やはり違かった。

それからストーカーのことには触れずに、桃と今修復中だとだけ伝えると、

「私だったら、女と二人で飲みに行く男は嫌だけどね」

と、自分のことは棚にあげて言うのだから、女は怖い。

だから、結局、桃を襲った犯人が誰なのか海には分からない。それでも、次は決して桃を一人にするつもりはなかった。

「さ、大島さん、食べましょう」

桃に促されて始まった夕飯は、至って普通の夕飯だったが、二人で食べた分、いつもより暖かく感じた。

蕎麦酒屋で飲んだ時とはまた違う、家の中という空間で二人でいることは、どこか暖かさを伴うものなんだと初めて知る。

その後はテレビを見て、晩酌としてビールを飲んだり、後片付けをしたりした。

9時を過ぎた頃に、桃がソワソワとし始めたので、

「どうした？」

と訪ねると、

「お風呂、どうします？」

と確認された。

「あ、じゃあ、今から用意してくるから先に入れば？」

本当は1日位、入らなくてもいいのだが、桃にまで入るなど言うわけにもいかない。

風呂場に行つて、普段は湯を張りもしない風呂釜を僅かばかり残っていた浴室洗剤で洗った。

桃用に新しいバスタオルも出しておく。実家から引き出物で使わないからと送って貰った物があつて良かった。

「入つていいぞ。お湯は赤い蛇口で水が青い蛇口だから、温度調節してからシャワーで使つて」

簡単に浴室の説明をすると、着替えをいつの間にか用意していた

桃が、大事そうにそれを抱えて、浴室に向かった。

ユニットバスでなくて良かったとしみじみ思ったが、お世辞にも広いわけではなく、脱衣所と呼べるスペースは洗濯機もあるので、半畳以下だ。それでも友人の家では脱衣所もない家もあるから、我が家はましな方だろう。

暫くするとシャワーの音が聞こえてきて、なんとなく落ち着かなくなる。

どうこうするつもりはないし、ならないことは分かっている。

信頼回復の為にいるのに、汚名挽回になってしまったらたまらない。

ウロウロしていると、海の携帯が鳴りだす。

相手を確認すると、浅間からの着信だったが、電話に出てみると西脇だった。

「大島さん、今、桃さんお風呂ですか？」

「どこから見てるんだ、お前」

これじゃ、西脇がストーカーのようだ。若干引き気味の海に対して、桃は弾んだ声で、

『桃さんに手出したら、先輩といえども、私、関節外しますよ？』
と言った。

骨を折るではなく、関節を外すというのは、本気で遣りかねない、というか、本気なんだろうな、と話を聞きながら、思う。

「手なんか出せるか」

『お風呂あがりの桃さん、凶悪ですから覚悟してください』

「何でお前が知ってるんだ？」

海でさえ見たことがないのに、何故西脇が知っているのだろう。

問いかけると、西脇は簡潔に答えを返してくれる。

『サチさんと三人で日帰り温泉入浴したことあるんで成る程。この三人はプライベートでも仲良しだ。そう言えば以前、そのような話を桃本人からも聞いたことを思い出した。』

『湯上がり桃さんは、果物屋さんの桃みたいですから、自制心、フル稼働してくださいね？』

無理そうだったら、私、大島さんの関節外してさしあげますから、外来てください』

西脇はそれだけ言うと、それじゃ、と電話を切った。

何を物騒なことを・・・と海が呆れつつ、携帯電話を睨んでいると、

「あの、ありがとうございました」

と桃が浴室から出てきた。

「.....」

パジャマではなくジャージにTシャツという姿だが、しっかり乾いてない髪に、桃色に染まった頬は、確かに西脇が言うように『凶悪』だった。

頭の中で、白土が

「なまごころ、しー！」

と小躍りしている。

(この後、布団は違えど一緒の部屋で寝るんだよな)

ベッドを桃に貸し、海は台所側に長座布団をひいて雑魚寝予定だ。

桃と海が寝る場所の距離、僅か2メートル。

何かするつもりはないし、何もする訳にはいかない。

(. くそ)

一瞬、本気で両腕の関節外して貰うべきか、真剣に海は悩んだ。

今日は月が出ていない。

私は明け方まで起きていた。

何故なら休日だというのに、浅間さんが部屋にいなかったからだ。

眠気なんてちつともこなかった。

何で浅間さんが帰ってこないのか、分からない。

ぼんやりとする頭に、自動車の音が聞こえたのは、朝の8時過ぎだった。

カンカンカンと階段をあがる音。

「来週も本気で張り込むのか？」

浅間さんの声！

私は思わず玄関を出ようとノブに手をかけた。

だけど、それ以上は動けない。

すぐに女の声がしたからだ。

「勿論です！ 大丈夫、すぐに引っかかりますよ」

「そうか？」

「そうです。だって、私が同じ立場だったら、朝までずっと一緒に毎週いる女なんて許せない」

それは、私が思っていたこと。

浅間さんの部屋に泊まる女。

若いだけ取り柄であろう低俗な女。

あの日、殴っただけでは、足りなかったのか？

「殴るだけじゃ、足りないかも」

「物騒なこと言うな」

二人が部屋に入る音を、私はドア越しに聞いていた。そしてゴツンと頭をドアに打ちつけて、呟く。

「何でまだいるのお？」

私の浅間さんなのに。

私の浅間さんなのに。

私の浅間さんなのに！

私は隣から聞こえる女の笑い声に耐えきれず、部屋を飛び出した。

やっぱり、

殴るだけでは足りなかった。

30 9月26日

毎週、週始めに飲みっぺどうなんでしょう？

私はそう思いながら、目の前の面子を確認する。

女性陣はサチとちとせちゃん、そして私。

男性陣は大島さん、浅間さん、そして何故か白土さん。

今日の会合の発案者は当然ちとせちゃん。

改めてしみじみ、流石一晩で浅間さんを物にするだけあって、ちとせちゃんの行動力は半端ない、と思う。

「さて、週末の状況なんですけど、変な人はいませんでした！

と言っても、金曜日から土曜日にかけてしか確認してませんが。

土曜日、桃さんをきちんと自宅に送るまでに何かありましたか、

大島さん？」

ちとせちゃんが大島さんに確認すると、大島さんは小さく首を横に振った。

「誰もついてくる様子はなかった
と思う」

週始めだというのに、大島さんの顔は何だか凄く疲れ切っている。
土曜日も、朝起きたときはへ口へ口だったので、きつと、ベッド
じゃないと寝られないのかもしれない。

「どこかで見えていた可能性は捨て切れませんよね」

「確かにそれはあるけど、だからと言ってどうするんだ？」

ちとせちゃんはニヤリと笑って、言う。

「隙を作ります。」

前回は平日、夕方の犯行でした。相手は桃さんがひとりになると

ころを狙っていた。だから、もう一度、桃さんにひとりで帰っています」

「それは危険だろう」

大島さんが険しい顔になる。

しかしちとせちゃんはそれには動じず、「きちんと守ります」と断言した。

「桃さんが帰る場所に、私と浅間さん、サチさんと白土さんで、所要所で隠れて桃さんを見張ります」

「え、俺も？」

白土さんがギョツとした顔になるが、ちとせちゃんは「ここにいますから、当たり前でしょう！」と笑った。

「勿論、当日は防刃チョッキを服の下に着て貰いますし、簡単な護身術も教えます。まあ、一番大切なのは、大きな声を出すことです」

（防刃って……!）

まさかナイフが出てくるのか？と思うと、ゾツとしたが、ちとせちゃんは「念の為です」と強調してくれる。

「最初が脅しだけですし、いきなりナイフにランクアップっていうのは、最悪の場合、ってことで」

「そこまできると警察沙汰なんだけどねえ」

サチも少しだけ表情が固い。

「でも、まだ何も起きてませんから」

そう、何も起きてないから、警察は動かない。

「そんなにうまくいくか？」

浅間さんも疑いの眼をちとせちゃんに向けたが、ちとせちゃんは
その目さえはねのけてしまう。

どこからその自信が溢れてくるのかは分からないが、ちとせちゃんに勝算はあるらしい。

「うまくいくように仕向けるんです」

そう言うと、ちとせちゃんは再度ニツコリと人を魅了する笑みを
うかべて、今週一週間にすべきことを私たちに説明する。

内容を掻い摘んで話すと、金曜日以外は毎日、私は誰かと行動することになる。

ストーリーがいつきても私たちには手を出せないように、だ。

そして金曜日、各自が配置につき、ストーリーカーを待つ。

何も起きなければまた翌週も同じようにする。

この計画の利点は、仕事の忙しい男性陣は金曜日だけ開ければいいということだ。

勿論、大島さんは出来る限り、私と行動を共にした方が、相手を焦らせて良いらしい。

「でも毎週金曜日だけ一人なんて、怪しまないかな？」

「そういう思慮深さがあったら、軽自動車で横付けして殴るなんて馬鹿なことしませんよ」

私の質問に対してちとせちゃんはそう返して笑った。

「ナンバープレート見られたら一発なのにそうしたってことは、最初の金曜日は衝動だと思います。」

だから、相手は金曜日は比較的自由に動ける可能性も高い。そういうことひっくるめての作戦です」

ちとせちゃんが胸を張って断言するので、本当にうまくいきそう
な気がしてきた。

帰りは大島さんと帰った。

家までタクシーを回してくれると言っているので、今日は甘えてしまおう。

「うまくいきますかね？」

駅前、タクシー待ちの列でそう大島さんに問いかけた。

大島さんは私を見て、少し複雑そうに微笑む。

「うまくいつてほしいけど、酒田を危険な目にはあわせたくないな」
「大丈夫だとは思いますが．．．」
それでも、少しだけ怖いのは確かだ。

「人を好きになることって難しいですね」
ため息を小さく漏らす。
ストーカーさんだって、普通ならただ、大島さんを好きになった
ひとりの女性のはずだ。

だけど、何が狂ったのか。
何を間違えたのか。

一方通行の想いの先は行き止まりなのに、狂った馬車の様に突き
進む様は、何だか見ていて辛い。

そう、辛い、だ。

確かに同じ人を好きになったのに、そこにある根底が違いすぎて、痛々しい。

塞ぎ込んだ私の手を、ギュツと大島さんが握ってくる。

私が横を見ると、大島さんは少しだけ申し訳なさそうな顔をした。きつと、手をつないでいることに対してだと思った。今は保留期間だから。

それさえも曖昧なのに、それでもそのことをきちんと守ってくれる大島さんのことを思うと、それもまた胸が痛くなる。

大好きなのに。

すごくすごく、好きなのに。

こうして側にいたいし、もう、ストーカーなんてどうでもいい気もしてくるのに、どうしても一言が言えない。

「私も好きです」

その一言で、きつとまた付き合える筈なのに、言えない。

言いたくない。

(本当に、人を好きになることは難しい)

ストーカーが見つかったら、私はまたこの大好きな人と、以前のようにつき合えるんだろうか？

少しだけ、本当に少しだけ、握った手に力を込めた。

大島さんがそれに気づいたかは分からない。

だけど、大島さんが何も言わないことをいいことに、私は黙ってその手を握りしめていた。

31 9月30日 (1)

まるで西脇が考えたみたいに物事は順調に進んでいった。会ったことも見たこともないストーカーを意識しながら、一週間はあつという間に過ぎ、そして金曜日、いよいよ一回目の『隙』を見せる機会になった。

「こんなんでも上手く行くのか？」

時刻はこの前よりやや遅い午後6時20分。既に暗くなった時間帯。

浅間の仕事が終わらないということで、参加しているのは、白土、花川、西脇、の3名。それぞれが各自、路地裏で待機している。

海は桃と一緒に一度、駅前まで歩き、桃が忘れ物をしたので、近道を通って会社に戻るという設定だ。

西脇のその筋書きは、沢山穴がありそうなのだが、それでいて上手いきそうなのだから、不思議だ。否、穴があるからこそ誘いやすいのもかもしれない。

桃は更衣室で防刃ベストを着てきたらしく、それに伴いどこことなく緊張した面持ちだ。

海は少しだけ桃の手に触れて、

「大丈夫か？」
と問う。

自分は見張り役ではないので、ストーカーが見つかるまで、若しくは桃が帰ってくるまで、駅で待機しなければならない。

「大丈夫ですよ」

桃が心配をかけまいと笑うが、それが返って痛々しい。

海は一緒に会社まで戻りたい衝動に駆られたが、それでは計画通り進まない。

「駅前に入る直前の道で、待ってる」

それでもギリギリまで側にいたくてそう言えば、桃はコクリと小さく頷いた。

「もし……」

「はい？」

「もし、襲われそうになったら大声で叫べよ。俺も必ず駆けつけるから」

桃の声がどこまで聞こえるかは分からない。それでも、何かあった時は、なるべく早く駆けつけてやりたかった。

桃は海の顔を見ると、嬉しそうに微笑む。気休めとしかとってはくれなかっただろうが、それでも海の言葉は嬉しかったのだろう。

「はい、きちんと呼びます」

そう言われて、それだけで胸が熱くなった。

前回は何も出来なかった。何が起こったのかさえ、知ったのは随分後で、そのせいで桃を傷つけた。

だから、もし、今度何かあったら、その時は誰よりも早く駆けつけたかった。

例えそれが理屈上は無理であったとしても、だ。

そつと桃が海の指に自分の指を絡ませてきたので、海もその指を優しく握りしめて、脇道の入口になる側道へと向かって歩く。

直前の道に差し掛かろうとした時、タイミングよく海と桃、二人の携帯が同時に鳴った。

二人とも確認してみると、それは西脇からのメールだった。

『浅間さん、合流しました。公園近くにて待機です』

確かその場所は西脇の場所だったはずだ。工場側から、花川 白土 西脇となっていたので、恐らく白土と西脇がズレて駅側寄りになったのだろう。

「じゃあ、行ってきます」

桃がそう言った。

「ああ、気をつけて」

海は心配そうに桃を見ながら送り出す。

ゆっくりと工場に戻り始めた桃の背中が、やはりとても小さくて、何か起こらなくてはいけないのに、何も起こらなければいい、と心の底から願った。

あの日、浅間さんと話した女は、わざわざ人気のない道を選んで帰った。

きっとあの辺りが家か、若しくは車の駐車場があるはずだ。

そうでなければ、わざわざ駅までの道を別れる必要性がない。

今日は車にしなかった。軽自動車は音がうるさいし、道をうるつくには不便だ。

(家か車だけでも見つければいい)

本当は定時から会社前で張りたかったのだが、出遅れてしまった。だから、あの女の家、若しくは車を停めている駐車場位見つけられたら、と思ったのだ。

隣の部屋の声からでは、あの女が同じ会社ということしか分からなかった。その情報だけではどうしようもない。できれば確実に女が一人の時を狙いたかった。

定時には遅いが、暗い道をウロウロと歩くと、

「隼生さんはここにいてくださいね！」

と、女の声がした。

隼生という名前にドキリとする。

僅かに身体を固くしながら、一本隣の細い道を歩く。

ここは住宅街のせいか道が入り組んでいる。

そのお陰で一つ道を挟んでしまえば、あまり周りが分かりにくい。音を立てずに声の方へ近づくと、案の定、憎い女が私の大切な人といいた。

「結構暗いな」

「キスしてもわかりませんよ。しますか？」

「・・・ばあか」

他愛ない恋人たちの話に、嫉妬でどうにかなりそうになる。

私の浅間さんなのに!!

女は何故か浅間さんを公園近くの道に残すと、そのまま別の道を歩いていく。

一度家まで帰るのだろうか？

でも、それなら丁度いい。家を確認したら、別の日に襲ったっていいからだ。

私はポケットに隠していた狂気をグッと握りしめた。

女は暗い道を歩きながら、携帯をいじっていた。後ろから、少し離れているが後をつけている私にちっとも気づかない。

私はゆっくり女の後を追う。

焦らない。

じっくりと、ゆっくりと、女に近付いていく。

女が携帯を閉じた。

そして何も無い道の角に佇む。

少し様子を見ていたが、女は道の方を見ていて、脇道になるこちら側を意識していなかった。

(?)

何がしたいのかは分からない。

だけど、チャンスなのは分かった。

(ああ、やっぱり神様も私の味方なんだ)

今、この瞬間、人気のないこの場所に、あの女と私だけしかない。

私はゆっくりポケットから凶器を取り出す。

いつあの女を仕留められるか分からなかったから、持ち歩いてきたものだ。

大丈夫、うまくいく。

後ろから、その首筋でも狙ってしまえば……………

女がどこかに意識を集中している。私は全神経を尖らせて、女に近づく。

そして、ナイフをふりあげた――。

32 9月30日 (2)

「じゃあ、行ってきます」

そう言って、駅から工場までの道を戻るといふ奇妙なウォーキングが始まった。

「ああ、気をつけて」

と私を送り出してくれた大島さんは、とても心配そうだった。

それもそうだろう。これは所謂おとり捜査に近い。しかも、おとりになる私は、刃物の除け方も知らないズブの素人だ。

誰が考えたって無謀だって分かる。

(でも、やるしかないんだろうなあ)

何もしなくても、ストーカーはやってくる。

この前はただ鞆で叩かれただけで済んだが、いつもそれで済むかは分からない。

いつそのこと、別れてしまえば私だけは楽だろう。

でも、皆それを指摘しない。

一生懸命、私と大島さん、二人が幸せになれる未来を探してくれる。

(お人好しというか、何というか・・・)

大学のあのサークルでは考えられなかったことだ。

皆それぞれ、表面的に仲良くし、争いもなく、ただ、ただ、楽しかった。

だけど、会社は違う。

働くことには責任が伴うし、叱られることも頻繁だ。楽しいことばかり追求できたら楽しいだろうが、それではお金が稼げない。

職場によっては、ギスギスしたり、下手をしたら大学生より質の悪い子供っぽい人たちのいる職場があることは、就職して周りからの話から知った。

でも、【ここ】は違う。

サチがいて、ちとせちゃんがいて、男の人たちも皆優しくて。本当、奇跡みたいに優しい職場だと思った。

(そんな場所で大島さんに出会えたことは、凄く運が良かったんだろっな)

信じてもいいのかな？

信じてても大丈夫かな？

そう思いながら一步一步道を踏みしめると、やや遠くの電柱の影に人がいた。

一瞬、ピクリとしたが、それがちとせちゃんだとすぐ分かったので、安心する。

(そんなところいたら、バレバレじゃん！)

意外に抜けているのかな？と思わず苦笑いして、

今度こそ、息を飲んだ。

(何、あれ?)

女が、いた。

ちとせちゃんの背後。

ゆっくりと、歩いてくる女が見えた。その女はちとせちゃんに近づいていく。

ちとせちゃんは背後に気を配ってないらしく、その女が近づくのに気づいていない。

キラリ。

遠くの街灯に、女が手に握る何かが光った。

その瞬間、自分でも分からないが、身体が勝手に動いた。

駆ける。そして、叫ぶ。

「ちとせちゃん、後ろ!!!」

ちとせちゃんが後ろを振り向いた瞬間、女が手にしていたナイフを振りかざす。

ちとせちゃんは自分の頭を庇うように、両手をクロスしてそのナイフをよける。

(刺さった!?)

分からない。

だけど、何とかしなければいけなかった。

「誰か、誰か来て！！」

大島さん！！ 大島さん！！！！」

必死で叫んで、ナイフをまた振り上げた女に向かって突進した。ドンっとなを突き飛ばす。

うずくまるちとせちゃんを庇いながら、突き飛ばした女を睨む。

（この女だ！）

ごくごく普通の女だった。

だけど、その体格、その髪型、全てがあの日、自分をなぐった女と同じだった。

「あ、痛い……」

「ちとせちゃん、大丈夫？！」

誰か、誰か、来て！！！！」

私は腹の底から大声をあげた。

女は突然現れた私に動揺しながら、それでももう一撃、ちとせちゃんを狙っている素振りだった。

だけど、女は次の瞬間、プツリと糸の切れた人形みたいに座り込む。

それはある人の声を聞いた瞬間。

「どうした？！」

初めに駆けてきたのは、浅間さんだった。その声に反応して、女は青ざめて座り込む。

「浅間さん、その女の人です！」

私は叫んだが、浅間さんは思いもかけない人を見たといわんばかりの顔で、大きく目を見開いた。

「佐川さん……………」

浅間さんがポツリと呟く。

「佐川さんて隣の女の人の？」

私の背後にいたちとせちゃんが起き上がって、浅間さんに確認した。

（隣？ え？）

混乱する私に、更に混乱する言葉を投げかけたのは、その佐川さんという女だった。

「どうして…………どうして?！」

浅間さん！ 私のこと愛してるって言ったじゃない!!！」

（……………えええええ?!）

浅間さんはギョっとした顔になり、私より驚いていた。当然だろう。

探していたのは大島さんのストーカーで、浅間さんのストーカーではない。

だけど、その瞬間、ピタリと頭中でパズルが組み合わさる。

よく似た背格好の私とちとせちゃん。

あの日は途中まで、浅間さんと帰っていた。

今日、狙ったのはちとせちゃん。

「もしかして、私とちとせちゃんを間違えた……?」

「嘘。浅間さんのストーカー?」

ちとせちゃんも思いもかけなかったことらしく、呆然と佐川さんを見て、呟いた。

しかし、その呟きがまずかつたらしい。

佐川さんはちとせちゃんの言葉に反応すると、ぐっとナイフを持った手に力をこめ、そのまま勢いよく立ち上がると、その勢いのまま、こちらに突進してくる。

それこそ、浅間さんさえ追いつけないスピードだ。

「ストーカーはあんたでしょおおお!!!」

突進した先にいるのは、私とちとせちゃんの二人だ。

しかも、また庇っているのは私の方で、この位置で突っ込まれたら、間違いなく被害に遭うのは私の方で。

こんなとばつちり、冗談じゃない!!!

と思いながら、それでもその場を動けなかったのは、私が動いたらちとせちゃんに刺さるって分かったからで……

色んなことが、酷くゆっくりと、動いていた。

実際は10秒にも満たない時間で、その時間の中で、

私は馬鹿なことに自分の腹筋に力を入れて、足に力を込めだし、ちとせちゃんは私を押しつけようとしたし、浅間さんは何とか手を伸ばそうとしていた。

そして、大島さんは、多分、訳も分からず飛び出していたんだと思う。

私が大島さんの名前を呼んだからだ。

「必ず駆けつけるから」

そう約束のように交わされた言葉は、ただの御守りに過ぎなかった筈なのに。

私の前に大島さんの背中。

ドン、と何かを受け止める音。

多分、

佐川さんを受け止めたのだ。

あの女は何を持っていた？

何をしようとして私とちとせちゃんに向かってきた？

確認したくないのに、頭の中で情報は整理され、そして私はまた叫ぶ。

「大島さん！！！！！！」

そんなことをしてもらう為に、アナタの名前を呼んだわけじゃない！

33 9月30日 (3)

女の名前は佐川と言った。

浅間のアパートの隣人で、二人の間に肉体関係どころか、隣人という繋がり以外の何もなく、正真正銘、浅間のストーカーだったことは、警察の事情聴取で判明した話、だ。

「そういうことは前もって警察に相談し、個人でそんなことはしないでください」

とコツテリと6人は灸を据えられたが、それでも誰の怪我也なく済んだということで、12時には解放された。

「しかし、歩く人間凶器か？」

と言ったのは花川だ。

それに対して西脇は、

「いやあ！ まさか、腕につけていた鋼鉄製アームバンドで、ナイフが曲がってくれているとは思わなくて」と苦笑する。

「女が鋼鉄製アームバンドって・・・」

白土が呆れたように呟いたが、浅間はそれさえも西脇の行動の範疇で、日常茶飯事だと思っっているのか、何も言わなかった。

「じゃあ、各々タクシーで帰りますか」

そう仕切ったのは花川で、三台のタクシーで、各々が帰宅する。海と桃は同じタクシーに乗った。

「この埋め合わせは必ずするから。色々すまなかった」

出発する前に、浅間にそう一言謝罪されたので、海は苦笑いでそ

れに返した。

タクシーの運転手は「皆さん、喧嘩かなんかで絡まれちゃったの？」と絡んできたので、海は「まあ、そんなもんです」と軽くかわした。

行き先を告げようとする、桃に先に言われた。

行き先は海のアパートだった。

そのまま、桃も海のアパート前で降りる。家に帰らなくてよいのか尋ねようかとも思ったが、元から今日は何もなければ海の家に外泊予定だった。但し、根本は解決したのだから、桃が泊まる必要性は全くなかったのは、多分、お互い分かっていた。

桃は無言で海の後についてくる。

海がドアを開けて、桃を中に招き入れる。

鍵を閉め、靴を脱ぎ、居間に入って電気をつけようとした瞬間、桃がギュッと海に抱きついてきた。

「酒田？」

「.....」

しゃくるくぐもった声に、桃が泣いているのだと分かった。

「こっちおいで」

背中に抱きつかれている状態では、頭も撫でてあげられない。

ゆっくりと、桃の手を外しそちらに向かい合つと、桃がぐしゃぐしゃの顔で泣いていた。

「し、死んだかと.....」

ボロボロと大粒の涙を零す桃に、海はやりわりと微笑む。

「大丈夫、生きている」

くしゃりと頭を撫でてやれば、桃が海の首にしがみついてくる。

「生きてて良かった！」

感極まった声を耳元で聞きながら、ゆっくりと、手をその小さな背中にまわした。

確かに、ナイフの先が曲がっていなかったなら、死んでいたかもしれない。

それでも、あの時、あの瞬間、飛び出したことに後悔はない。

テレビドラマではないけれど、人間というのは、好きな相手の為なら、自分で思うよりも単純に身体が動いてしまうものなのだろう。

「酒田に怪我がなくて良かった」

そう言つと、桃がヒックヒックと喉を鳴らしながら、

「ありがとうございます」

と言った。

海はその頭を優しく撫でる。

「.....で、犯人は図らずも見つかったんだけど？」

泣いている桃に、そう聞くのはどうかとも思ったが、外の明かりが入り込むだけの暗い部屋で、目の前に好きな女の泣き顔があれば、頭を撫でるだけじゃない慰め方だってしたい。

桃はぐっと思いを飲み込むと、海の首にしがみついてくる。

「酒田？」

「.....」

「やっぱり俺と付き合つのは、無理？」

そう問いかけると、腕の中の桃は僅かに身体を固くして、それからポツリと甘い言葉を言う。

「．．．私だけにして」

耳元で涙ぐんだ甘い声が響く。

「ん？」

思わず返した自分の声も酷く甘かった。

桃は海の耳元に口を近づけたまま、言う。

「名前で呼ぶの．．．」

私の名前だけ、名前で呼んで」

(私の名前だけ?)

意味が分からなかったが、直ぐに桃が補足する。

「千夏さん．．．」

「ああ、そういうことか」

確かに桃は「酒田」で、千夏は「千夏」だった。

可愛らしい嫉妬に、背中に回した手に力がこもる。

「分かった。桃だけ桃って呼ぶ」

初めて呼んだ桃という名前は、なんだかくすぐったくて、どこか嬉しい。

桃も海の言葉に反応したのだろう。僅かに肩が揺れた。

「他には何かある？」

今だったら、何でも願いを叶えてあげられる気がした。あくまで気持ちだけだったが、それでも、全部、叶えてあげたい。

「他はいらない」

ギョツと更に強く桃がしがみついてくる。

そして飛びつきり甘い言葉を海に告げる。

「大島さんがいてくれれば、他には、何にも、いらない」

（ああ、可愛いなあ）

しがみついてくる桃がたまらなく可愛くて、それだけ言ってまた泣き始めた桃の背を優しく撫でると、海はゆっくり桃の身体を自分から離れた。

そしてその頭をもう一度撫でて、

「慰めていい？」

と確認する。

桃が小さくこくりと頷いたので、海は桃の頭を撫でていた手を後頭部に添えて、恋人同士しか出来ない慰め方をした。

涙の味のキスで。

エピソード

「こんばんは！」

「あ、久しぶりだねえ！」

馴染みの蕎麦酒屋に顔を出した私に、おとーさんはニコリと微笑んだ。

「こつち座りな〜」

「あ、あとで連れもくるんですけど」

「分かってるから大丈夫。二人分、どうぞ」

カウンターの席は選び放題だったのに、何故か端の方に座らされた。

奥の座敷には背を向けるその場所は、いつもなら焼酎や一升瓶のある場所だったし、今日も瓶が置いてあるにも関わらず、わざわざどこかしてその場所を案内された。

（団体さんでもいるのかな？）

奥の座敷からは死角の場所なせいか、奥の音は聞こえども姿は見えない。

まあ、人待ちの身で他の客に興味を示す必要もないので、大して気にすることなくその席に座る。

「お連れさん、どの位でくるの？」

おとーさんに問われ、私は時計を確認してから、

「あと30分後です」と答えた。

今日は飲みが終わったら、大島さんちにお泊まりだ。

最近、大島さんの仕事が忙しかったので、久しぶりの外泊だ。

ソワソワしているのは、少しだけ見逃して貰いたい。

「はい、お通し。」

あと、これ、作ってみたから食べてみて」

生中を頼んだら、更に美味しそうな煮付けまで出て来て、私は思わず歓喜の声をあげてしまう。

「おとーさん、おいしい！」

「そうお？ もっと沢山食べてね」

嬉しそうなおとーさんの顔を見ると、私も嬉しい。

と、奥の座敷で男の人たちの歓声。どうやら団体さんが賑わっているらしい。

声の感じからして若い感じだ。

(学生さんかなあ？)

賑やかでいいことだ、なんて思いつつ、お酒を呑んでいると、おとーさんがニコニコしながら、

「楽しそうだね」

と聞いてきた。

「楽しそうに見えますか？」

「見える見える。嬉しそうにお酒飲んで、ご飯食べて貰えるのが、私は一番嬉しい」

「それはおとーさんのご飯とお酒が美味しいからですよ」

そう断言すると、おとーさんは「そうじゃないんだよ」と笑った。

「あなたが今、幸せだから美味しくなるの」

他の人が言ったら恥ずかしい言葉なのに、不思議とおとーさんが言うつと、人生の深みがプラスされているせいか、心に染み入る。

「一緒に飲む相手によっても、お酒の味は変わるよ」

「そうですか？」

「そうですね？」

逆に問われて戸惑った。

意味深に問われて、一瞬過ぎたのは随分昔の色褪せた思い出のこと。

元彼と一緒に飲んだときは、お酒の味なんてあまり覚えていなかった気がする。

独りでこの店に来るようになって、少しずつ美味しく感じるようになって、大島さんと来るようになって、ただ美味しいだけじゃなくなった。

そこから色々な話が広がって、いつも沢山のことを話した。そして、それは次にそのお酒を飲んだときに思い出すくらい、お酒と話の記憶が結びついていた。

「お酒はね、お酒と一緒に想いも飲み込むの。色々な想い。しんどいこと、辛いこと、悲しいこと、嬉しいこと。あなたの最近のお酒は嬉しいことばかりでしょ？」

おとーさんがチラリと見た私の左手の薬指にはキラリと光る指輪。私はそんなおとーさんの視線にはにかみで返す。

指輪の意味がどんなことかなんて、わざわざおとーさんに報告はしなかったけれど、もう少ししたら名字が変わることは確かで、それでも変わらずこの店に通い続けていられることが嬉しかった。

「良かったね。幸せで」

「はい、良かったです」

つきあい始めたら、色々なことがあった。色々なことで喧嘩もしたし、色々なことで楽しく笑いあったりもした。

その全てに大島さんが関わっていることが、私には嬉しい。

ガラガラと引き戸が開く。そちらに目を向けると、大島さんが入ってきた。

「大島さん！」

私が手を降ると、大島さんは嬉しそうに私のところへ来てくれる。

「あ、生中で」

おとーさんにそう注文してから、大島さんは私の横にドカリと座り込んだ。

「お疲れ様です」

「ん」

軽く返事をして、おとーさんが持ってきてくれた生中を一気に飲み干した。

「くー、生き返るー！」

「うわ、おやし臭い」

「うるせー」

コツンと頭を軽く叩かれた。

私は苦笑いを浮かべながら、大島さんを見る。

「あ、マスターに言った？」

確認されて、私は首を横に振った。こういうことは大島さんから言っただけの方がいいと思ったからだ。

「マスター、ちょっといいですか？」

大島さんが呼びかけると、おとーさんは「なあに？」とニコニコしながら聞いてくる。

「結婚式の二次会、ここでお願いできますか？ 二次会と言っても

有志で集まる程度だから、10人程度なんです」

「ん、幹事さん？」

「いや、自分たちの結婚式なんです」

大島さんがそう言うのと、おとーさんは「そうなの?!」と声を高らかに上げて、

「おめでとう!」

と喜んでくれた。

大島さんは照れながら笑う。

私もつられて微笑む。

「いつなの？」

「まだ先なんですけど……」

二人が会話していると、背後を奥の座敷で飲んでいた団体さんが通り始める。

「どうやら飲み会が終わったらしい。

「すみません、会計お願いします」

幹事らしい人がそう言うと、おとーさんは大島さんに「ちょっと待っててね」と言いながら、会計を書いた紙を団体さんの幹事に渡しているようだった。

「内藤、二次会どうする？」

「あ、駅前の居酒屋予定」

掛け合う声が私の背後で交わされる。

一瞬、ドキリとした。

その声と、その名前に聞き覚えがあったからだ。

「はい、お釣りね。ありがとうございました」

おとーさんがお釣りを渡したが、私の位置からは団体さんの幹事の顔は丁度うまい具合に見えなかった。

「内藤ー、なんか浜崎、気持ち悪いってー!」

「今、行ってくて！」
幹事が私の背後を通り過ぎる。

振り返れば多分、その声の主の顔は見えるはずだ。
そして、さっきの声だけで、私にはその声の主が誰だか分かってしまった。

別にまだ心残りがあったわけではない。
元気そうな声に、何の感情も覚えなかった。

(相変わらず楽しそうなんだな)

私とは違う人生を歩んだ人。
私に傷を残した人。

元彼というのもおかしい嘘つきだった相手。

なのに、その相手に対して、何も込み上げる物はなかった。

「はい、これ」

おとーさんが戻ってきて、綺麗なグラスに入った発泡酒らしきものを2つ、私たちの前に出してくれた。

「日本酒の発泡酒。お祝いのシャンパン代わり」
粹な計らいに、大島さんと顔を合わせて微笑むと、二人でおとーさんに頭を下げた。

「あなたたち、幸せになれるよ」

おとーさんは嬉しそうにそう言った。おとーさんの視線は私に向けられて、もう一度、

「ね？」
と念押しされる。

きつと、そういうことなんだと思う。

おとーさんの目を見て、分かった。

おとーさんは私の元彼を覚えていて、だからわざわざこの席を選んでくれた。

あの男にとっては既に私との思い出さえも色褪せた場所なのだろう。

だから飲み会のセッティングも出来た。

私にとってもここは、元彼との思い出の場所ではない。

大島さんとの思い出の場所だ。

振り返らなかつたこと。

その意味は、とても大きいんだと、おとーさんに念押しされて、実感した。

ああ、きつと、

私、この人と、幸せになれるんだな。

何の保証もないのに、凄く当たり前にそう思ったから、私は満面の笑みを浮かべて、大島さんを見てからおとーさんに言う。

「はい、幸せになります」

f i n

エピソード（後書き）

少しの間ではありましたが、辛抱強くお付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました。あとがきなどは活動報告に記させていただきます。ここまで読んでくださった方に、たくさんのご感謝を。
ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6727u/>

臆病な恋

2011年10月2日08時17分発行